

明治学院歴史資料館資料集

第1集

— 井深梶之助 生誕150年記念号 —

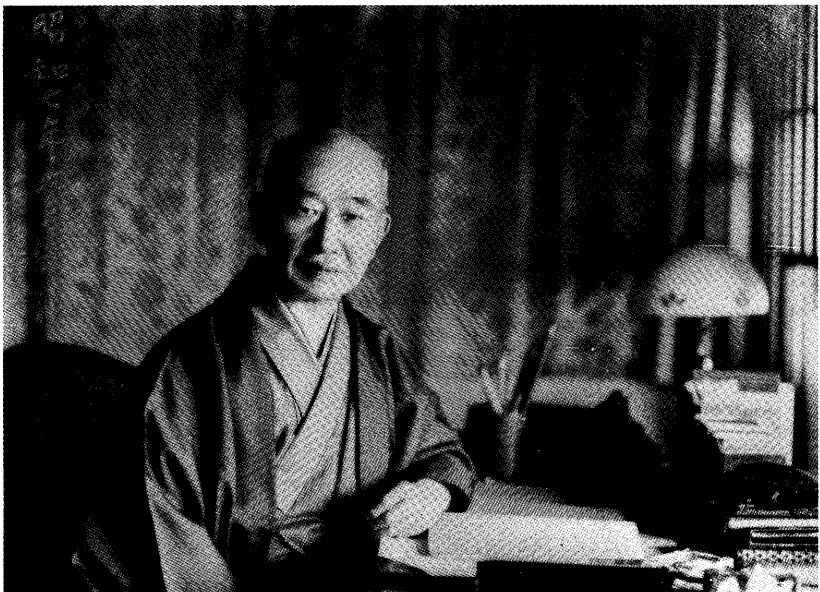
明治学院歴史資料館



井深梶之助の後ろ姿
1913（大正2）年11月19日
三男・真澄・12歳時描く



1872（明治5）年修文館時代



晩年の井深梶之助 1932（昭和7）年6月

明治学院歴史資料館資料集 第一集

明治学院歴史資料館

明治学院歴史資料館資料集発刊にあたって

明治学院歴史資料館館長 播本 秀史

『明治学院歴史資料館資料集』の発刊にあたって、ひと言、ご挨拶を申し上げます。

明治学院歴史資料館は一九九八年にそれまでの広報室（一九七二―八〇年）、広報史料室（八一年）図書館図書課史料室（八二―九〇年）の後を引き継ぐものとして出発しました。一八七七年の東京一致神学校の創設を起点とした明治学院創立百二十周年を期してのものでした。

ところが、二〇〇〇年十月二十七日、明治学院第四七三回定期理事会において、久世了学院長は明治学院創立の起点をヘボン塾創設の一八六三（文久三）年にすることを宣言し、同理事会において承認されました。また、二〇〇二年度のキリスト教学校教育同盟の名簿において創立年を一八六三年に改めています。新聞『キリスト教学校教育』四六一号（二〇〇二年七月十五日）では「教育同盟の中で最も創立年の早い学校になりました」と紹介され、その後久世学院長の創立年変更に至った経緯が載せられています。その結果、二〇一三年には明治学院は創設百五十周年を迎えることになりました。この度の本資料集は、以前の『明治学院百年史資料集』第一集から第七集（一九七五年―七八年）

『明治学院史資料集』第八集から第十四集（一九七八年—八七年）の後を襲うものです。通算では第十五号となります。明治学院歴史資料館が発足して六年が経過した今、これからのますますの充実を期して『明治学院歴史資料館資料集』と装いを新たにした次第です。また、上記の理由で創設百五十周年を迎える『明治学院百五十年史』（仮）のための資料提供の役割も持つものとなります。

なお、今年には井深樞之助総理生誕百五十年の年となります。本号を井深特集とした由縁です。その年に装いを新たに『明治学院歴史資料館資料集』を発刊できることに感慨を覚えます。これからの井深研究に、明治学院に、歴史資料館に、意味ある働きとなることを願っています。

今後とも、皆様方のご支援、ご厚情の程、よろしくお願い申し上げますとともに、ご教示、ご示唆、ならびに資料提供等も合わせてお願い申し上げます次第です。

最後に、本号発刊にあたって、立教大学名誉教授で本資料館の研究員もお願いしている鈴木範久氏のご助言に感謝申し上げます。また、同研究調査員の辻直人氏の働き、同職員の前原豊氏、黒田有希代さんの労もここに記します。

目次

井深梶之助の思い出	3
井深先生の思ひ出(島崎 藤村)	3
故井深梶之助先生を想ふ(有馬 純清)	3
追憶(馬場 銈作)	4
先生の思出(土居 譽雄)	5
井深先生に就ての思ひ出(海老澤 亮)	6
井深先生の思出(一)(原田 生)	7
井深先生の思出(二)(原田 生)	11
わが知れる総理(平林 武雄)	14
井深先生を偲ふ(稲澤 謙一)	16
井深梶之助先生(久布白 落實)	18
教室に於ける井深先生(桑田 秀延)	19
床次内相との会见(牧野 虎次)	20
井深先生と私(松尾 造酒蔵)	21
井深先生(三松 俊平)	22
先生と私(村岸 清彦)	23

弔悼(武藤 健)	24
井深先生の思ひ出(書翰の中から)(大川 正)	25
局外中立(沖野 岩三郎)	27
恩師井深先生を偲びて(小沼 邁)	28
「講壇や演壇の上の井深先生・・」(大島 廣)	28
先生の英語と細心(斎藤 勇)	29
優しき一面(斎藤 惣一)	30
叱られて(佐々木 邦)	31
欧州における井深先生の思出(鈴木 春)	32
井深総理のこと(多田 満長)	34
井深梶之助先生を憶ふ(高田 畊安)	35
温容玉の如し(生方 敏郎)	36
故井深大人を偲びて(和田 秀豊)	37
同窓訪問 病床の井深先生(鷺山 第三郎)	37
ありし日の井深先生(上)(鷺山 第三郎)	39
ありし日の井深先生(下)(鷺山 第三郎)	41
井深先生を憶へて(山本 忠興)	43
故井深梶之助先生を想ふ(山室 民子)	43
井深先生の説教(矢野 貫城)	44
井深梶之助先生を憶ふ(横川 四十八)	45

記 録

附録―明治学院理事会「井深博士ニ送ル感謝決議文」

井深梶之助氏

井深先生の葬儀―明治学院葬

日本神学校だより

学院育ての親井深名譽総理逝去さる

井深梶之助先生略歴昭和十五年六月二十六日 明治学院葬に際し朗読す(鷺山 第三郎)

井深梶之助研究

キリスト教大学の理想を求めた井深梶之助―第二代明治学院総理―(工藤 英一)

井深梶之助―その思想形成への一試論(工藤 英一)

井深梶之助(杉本 民三郎)

講演・座談会

井深梶之助先生没後六十年、インブリー館一般公開記念講演会・座談会

インブリーと井深梶之助(中島 耕二)

井深梶之助先生と明治学院(秋山 繁雄)

井深梶之助没後六十年記念座談会(木村知己、松崎百合子、表満寿江、秋山繁雄ほか)

井深梶之助生誕一五〇年記念講演会

井深梶之助の「原体験」と「キリスト教」(木村 知己)

..... 51

..... 52

..... 53

..... 54

..... 55

..... 64

..... 77

..... 81

..... 93

..... 117

..... 129

..... 140

..... 166

.....

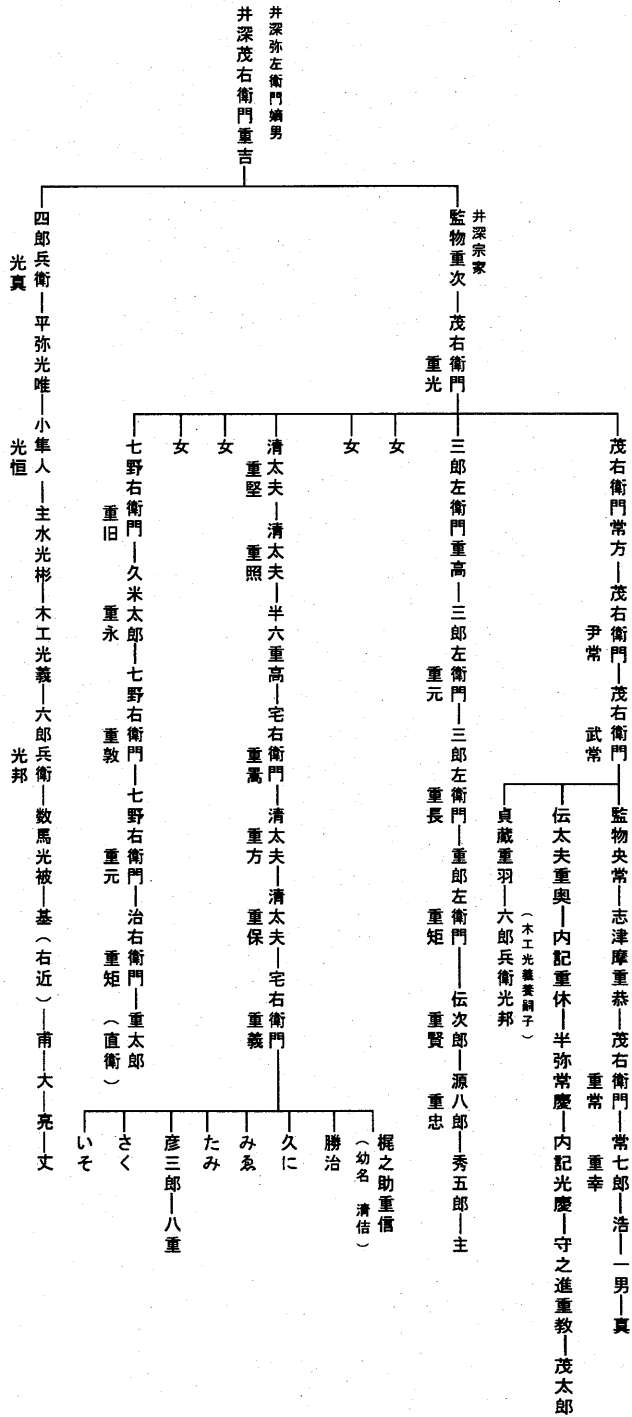
.....

.....

凡例

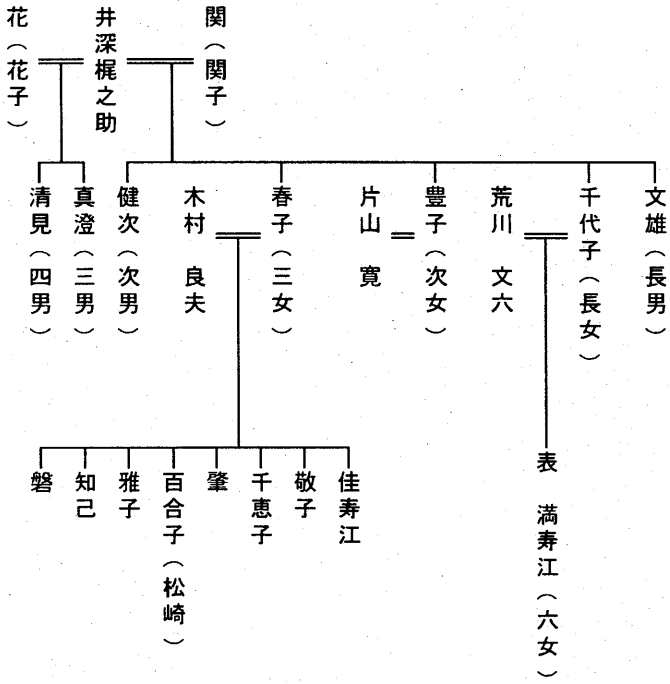
- 一、原文に忠実であることにつとめた。漢字は原則として新字体としたが、送り仮名はそのままとした。
- 一、原文にママとあるものはママのルビを付けた。又、原文が明らかに間違いであると思われるものは「ママ」のルビを付けた。
- 一、読不能の場合には□であらわした。
- 一、出典元が明記されていないものに関しては、本人直筆の原稿に従った。
- 一、発刊されたものと原稿が異なる場合は原稿に従った。
- 一、肩書は原則として原稿執筆当時のものを記載することとした。
- 一、出典の年月日については、その出典の奥付に従った。
- 一、編集者が手を加えた箇所は「」を付した。

「井深家略系図1」



「井深氏通信 第二号『井深家の人びと』刊行会 平成八年十二月二十七日発行参照」

「井深家略系図2」



井深梶之助の思い出

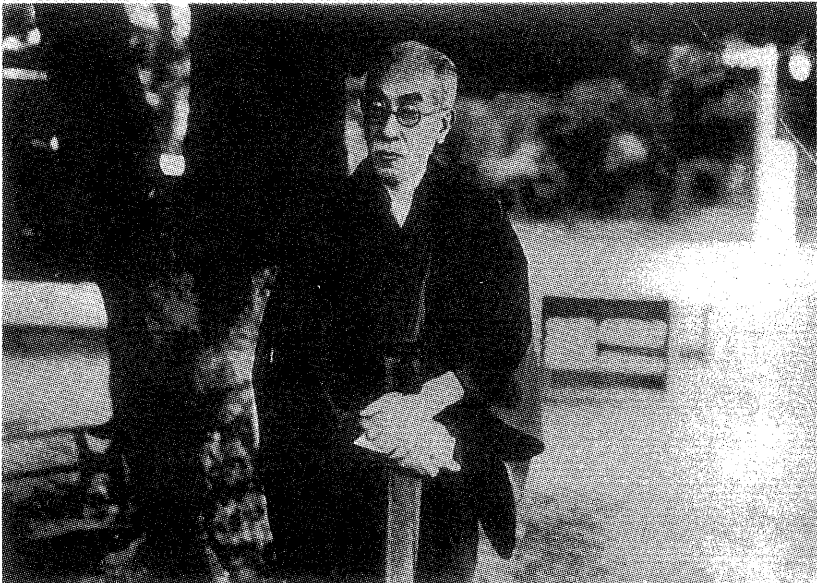
井深梶之助先生逝去に際し
主として『明治学院時報』
『福音新報』に掲載されたも
のを採録した。なお、無典
拠の原稿は『明治学院時報』
に掲載されなかつたと推測
される本人直筆の原稿を元
に掲載した。

島崎藤村

故井深先生の英語は精通せられたことと、斎藤勇蔵の所感にもある通りで、今更小生の中上げるまでもありません。

学院時代、貴学の普通学部四学年の頃、井深先生に「英文学選集」二巻の譯の授業時間を所持と承知した。アンソロジー風は編まれと原書であつたと覚えます。その折の先生の口述を字々句々、實は簡潔正確で、先生が日頃の造詣の深さを思ひ知りまして、得るところが多かつたのをあの時でした。井深先生が語学の上の練達を、石本三十郎先生の軽妙な通譯術と共に、當時もあつての雙璧とも言ふべく、これを学院内のみわびる事はないことでした。

島崎藤村 直筆原稿「井深先生の思ひ出」



島崎藤村と記念樹 井深槐之助葬儀の日に

井深先生の思ひ出

島崎 藤村 「二八九一（明治二十四）年普通学部卒・詩人・小説家」

故井深先生の英語に精通せられたことは、斎藤勇君の所感にもある通りで、今更小生の申上げるまでもありません。

学院時代当時の普通学部四学年の頃、井深先生は「英文学選集」二巻の訳の授業時間を受持たれました。アンソロジイ風に編まれた原書であったと覚えます。その折の先生の口述は字々句々、実に簡潔適確で、先生が日頃の造詣の深さを思ひ知りました。得るところが多かったのもあの時でした。井深先生が語学の上の練達は、石本三十郎先生の軽妙な通訳術と共に、当時にあつての双璧とも言ひたく、これは学院内のみかぎらないことでした。

〔明治学院時報〕第九十八号昭和十五年九月二十日発行より〕

故井深梶之助先生を想ふ

有馬 純清 「二八九三（明治二十六）年神学部卒・哲学博士」

井深先生永眠の悲報に接し実に哀悼に堪えなかつた。たとひ病床にあられても、生存して居られたら、学院は大きな後楯に支持されて力強く感じたであらう。而も六拾有余年一日の如く学院の為め教

界のため尽瘁されたので、感謝と喜びに満ちて神の召しに応ぜられた事であらう。私の観た先生は常識の人で、余り野心のない人であった。政治に、経済界に、文学に、一旗挙げやうといふ野心はなかった。而も其英文学に精通せる点に於て、先生は確かに我国の英学者中群を抜いて居た。而し先生は英文学者として名を成さうといふ野心も持たれなかつた。たゞ一意専心学院と教界のために尽くされた。若し先生にしてもっと積極的で、争鬭的で、前進的であつたなら、或は三十有余年前日本基督教界に一大争論の起こつたとき、学院は動搖を免かれ得なかつたであらう。学院が今日まで順調に発達し來つたのには先生の人格と力とに負ふ所多大である。学院は永く其の功績を紀念しなければならぬ。

追憶

馬場 銚作「一八八八（明治二十一）年神学部卒・牧師」

今日我国宗教界の多事なる時に当り、先生の如き学識経験に優れたる士を失ふ事は神意の然らしむる処とは云へ、実に大なる損失である。先生は温厚篤実にして、理性に富まれ、何事を行ふにも感情に流れず必ず熟慮の上是れを決行せられたのである。又後進を指導する為に専ら力を尽され、予の如きも先生の勧めに依り大阪西教会の牧師となり、又先生の斡旋に依りて米國に留学するに至つた。先生の日本キリスト教会に於ける功績は不朽に伝ふべきである。日本キリスト教会の基礎たる憲法もインブリー、植村、井深、三先生の草案に基て出来たのであつた。先生の教有る長所の一つとして挙げ

れば、其英語に堪能なりし事である。明治の初年に於ては先生の如き英語に達したる士は稀れであった。明治十二三年の頃かと思ふ。米國ボストンの講演者ジョーセフ・クック博士が来朝せられ東京淺草須賀町井生村樓に於て死は万事の終りなるかと題して大講演をせられた。其節先生は三時間に涉れる通訳をせられ、聴衆をして驚嘆せしめた。又カンバランド教会と日本キリスト教会との合併に際し先生は其委員の一人として専ら協議に列せられた。其後エー・「デー」・「ヘール」博士が予に語られ、其協議中先生には一つのグラマチカルミステークも無かつたと告げられた。以上は如何に先生の英語に秀出で居られたかを示して居る。

先生の思出

土居 譽雄「玉川学園礼拝牧師」

誰でも知つてある通り井深先生は古武士的風格の豊かな方で謹厳で、礼儀正しく又凡にキチンと筋道を立てられた事は有名でありました。今から十年前私が米國から帰つて間も無い頃当時不便の多かつた目黒の片田舎の私の家に、或日突然井深先生が御訪ね下さつたのには吃驚したのでした。荷物などのまだ片付かない雑然たる部屋の中で帰朝後の御挨拶にも出て居ないので恐縮しながら御話を伺ふと先生の御来訪は、私共をお宅に招待下さるためと解り一層恐縮しました。御招待の日も先生御夫妻の鄭重なる御もてなしに預かつたのですが、それは先生の御三男真澄様が米國留學中、雄凶空しく、

異境で淋しく客死なされた時、先生の御世話になつた者として当然にした僅かばかりの事を深く感謝せられた為で私共は先生御夫妻の恭々しい御取扱ひに感動しつゝ、又先生の礼儀正しい古武士的な御風格を泌々と感じた事でした。

〔明治学院時報〕第九十八号昭和十五年九月二十日発行より〕

井深先生に就ての思ひ出

海老澤 亮〔日本組合教会牧師・日本基督教協議会幹事〕

昔日曜学校協会の關係に於て、又後に日本基督教連盟の關係に於て、私は故先生の風貌に接し、その人格的感化を蒙つた者でありまた、先生は最も明晰な頭腦の持主として、その御性格の如くに議論の整理をせられる事の多く、何人も及ばぬ第一人者でありまた、議長としての採決振りの鮮やかな手腕に私は幾度か敬服したものであります。曾て三教の代表者が集まり宗教平和會議の開かれた時、先生は副議長の一人でありましたが、混乱に陥らんとした際先生の明確な採決には寸分批難の余地を挿み得なかつたのであります。又或る連盟總會に某高官が臨席し祝辭を述べられた中に、独逸國民は神の外何者をも怖れぬというのだが、吾々はその神さへも怖れぬと言われた時、先生は答辭の中で循々として神を懼るゝも吾民たる事の要と説かれた所、実に敬服の外はなかつた。

几帳面な端嚴な先生の風貌はいつも眼前に髣髴として映じて懐かしさを覚えしむるものがある。

井深先生の思出(一)

原田 生「一九一〇(明治四十三)年神学部卒・牧師・本名原田友太」

明治三十五年七月末の頃であつた。鹿児島地方裁判所判事の叔父が何かの私用で、宇土半島の郷里に帰り緑川口を隔てた私の家を訪づれ、夏休みで泳いだり寝ころんだりして、無聊に日を過してゐた私を鹿児島に連れて往かうと云ふので、大喜びで旅装もそこそこに、翌朝、有明海岸に近い住吉駅から叔父と一緒に汽車で三角港に赴き、そこから汽船に乗込み米ノ津港に向つた。

×

×

×

乗客の中で特に私の目を惹いたのはアルパカの服を着け、ヘルメットの帽子をかぶつた背丈の低い併し堂々たる風采の五十余りの人であつた。此紳士は甲板上に一寸顔を出したが、すぐ船室に其姿を消してしまつた。

当日の天気は快晴、渺茫たる海面には小波たち拡り、潮風徐ろに双頬を撫で、甲板上は涼味津々、全く酷暑を忘れ去らしむるものがあつた。

北には金峰山聳え、遙か東方には薄曇で画いたやうな阿蘇山脈が横たはり西にはすぐ眼前に温泉獄の偉容が有明海に臨んでをる。頼山陽の詩に、『温山遙面阿蘇山』。山脈透逸碧玉環。漚得海波一開一鏡。相臨自照両烟鬢』とあるが、洵によく此情景を写し得たるものと言はざるを得ない。

青々たる天草群島を右に、点々と漁船を浮べたる八代湾を左に、船脚はだん／＼と宇土半島を遠ざ

かり紺碧の水上に白泡の尾を曳きつつ進み行く。洵に愉快的な数時間の航海であった。

×

×

×

米ノ津港に上陸、叔父に伴はれ一料亭にて昼食を喫し、直ちに川内行の馬車に乗込む。合客四名、叔父と私との向側には一人の老婆とヘルメットの紳士とが腰掛け、紳士と叔父とは年齢の相違も左程なさそうに見受けられ、好い相手として会話が続けられた。紳士は中々の該博、且つ言葉が明晰で、側で聞惚れてゐた私は、紳士の経歴や地位に就ての判断つかず、窃に其為人を揣摩しほ憶測した。

当時の馬車―私共はこれをガタ馬車と呼ぶ―は、今日のバスと異なり速力遅く、且つ屢々馬に水や糧を与ふるので、川内までには半日余の時を費した。途中、出水、野白郷、阿久根等の海岸を過ぎ、夕陽將に没せんとする天草洋の光景も言はれず、紳士と叔父とは口を揃へて、『かゝる美觀を山陽は詩に詠じたのであらう』と賞賛してやまなかつた。私も側から合槌ツツを打つ。其情趣は今なほ忘れ得ない。『雲耶山耶呉耶越。水天髣髴青一髮。万里舟泊天草洋。煙橫ツツ蓬窓一日漸没。瞥見大魚波間跳。太白当レ船明似レ月。』

右の詩は、山陽が曾て天草洋を横ぎり大矢野島に赴いた際に詠じたものである。大矢野島には渋谷龍淵と呼ぶ儒者が私塾を開いてゐると聞いて、山陽は早速之を訪れたが、生憎不在で、其門人に向ひ、『主人が帰られたらば渡されたい』と、懷より一封の書を出し之を托して立ち去つた。数日の後、主人帰り之を披き愛誦措かなかつた。其の稿本は今もなほ同家に秘蔵してあるとのこと、床しき極みである。

八時頃川内着、紳士と一緒に私共も駅前宿の宿屋に立寄つたが、紳士は宿泊の気配にて奥の間に導かれた。叔父は『日中は暑いから』と云ふので夜行の馬車を買切り、十時頃川内発、薄い畳が敷き詰められた車内に、叔父と私とは横臥し、揺られ揺られて半眠半醒の情態にて早朝、鹿兒島市冷水町の叔父宅に着いた。其日一日は疲労の体を息め、無為に過したのであつた。

翌朝は元氣全く回復、夏樹立の間よりふき来る青嵐に浸りながら、鹿兒島新聞を見ると、『日露戦争と国民の覚悟に就ての講演会が午後一時より商業会議所にて催され、弁士は神学博士井深樞之助氏』との広告が載せられてあつた。当時未だ基督者でなかつた私は、神学博士とはどんな博士であるか、意味が解らないので一種の好奇心を抱いて其講演会に参加し、博士先生の出演を固唾を飲んで待つた。畳敷の広い会場には聴衆溢れ、外部に立つものもあり、なかなかの盛況であつた。司会者鹿兒島教会牧師尾島眞治氏の紹介を受けて壇上に現れた弁士は、計らずも一昨日、汽船や馬車に同乗し親しく膝を交へて快談の機会を得たヘルメットの紳士其人であつた。私は驚異の眼を見張り興味を胸に湛へながら、其雄弁に耳を傾けた。其講演の内容は判然と記憶してゐないが、『戦争は悲惨である。併し身体全部を救ふためには手か足の一部を切棄てなければならぬ場合が起り来るが如く、国民全体を活かすためには国民の一部が潔く戦ひ死を以て敵に当らねばならぬ。これは忠君愛國の精神の発露、国利民福のための犠牲である云々』以上のやうな誰にでも判り易い話の要部だけは、私の頭のどこかに残つてをる。閉会后、私は直ちに井深博士に挨拶を述べたが、先生は非常に喜ばれ止宿の旅館を示

された。其夜同旅館に先生を訪ねたが、部屋には先生を中心として、尾島牧師、薩摩隼人を思はする大男の平山武知氏其他二三名の会員が円坐し、西瓜を喫べながら快談の真最中であつた。私も其馳走に預かつたが、学生の分在「My」なれば、唯かしこまつて一座の談話に耳を傾け、一時間余にして辞去した。

翌日曜日、鹿兒島日本基督教会に赴いて井深先生の礼拝説教を聞くことが出来たが、遺憾ながら其時の題意が何であつたかは忘却して仕舞つた。鹿兒島ではそれきり先生とお別れしてお目にかゝらなかつた。

先生を迎送した城山と桜島岳と海門獄「※」とは、鹿兒島山色の三美とも称すべきで、城山は鹿兒島市の背景、桜島岳は鹿兒島湾の中央に屹立し、海門獄「※」は鹿兒島湾の門戸に聳立してをる。私は先生が滞在数日にして鹿兒島を辞された後、朝夕此等の山々を仰望する清福を得、又西郷南洲の終焉地たる岩崎谷に杖を曳き洞穴を窺いては、百戦功なかりしも尽日、洞中に於て碁を打ち、従容として死期の迫るを忘れし偉人の倂を偲び低徊去りがたきものがあつた。

X

X

X

其後、私は熊本の五高を卒業して上京、帝大で法科を学んだのであるが、明治四十年伝道の志に燃え、明治学院神学部に入らんと決心し、恩師服部章藏翁の紹介状を手にして、井深学院総理を訪づれた。然るに生憎先生はチプスで高輪病院に入院中とのことで、私は同病院に赴き井深夫人にお目にかゝり、私の志望を伝えていたゞき、其年の秋から神学部の学生として親しく先生の薫陶を受くることとなつた。私の今日あるは偏「My」に先生の眷顧の然らしむることと、其尊靈に対し深謝を捧げざるを得

ない。

井深先生は書を能くせられ、私宅には晩年の先生の揮毫「教」葉を藏してをるが特に詩篇十九篇の大幅の掛地は、粗末な私の応接間の床を飾つてをる。

『福音新報』第二千三百二十一号 昭和十五年九月十二日発行より

「※「海門獄」となっているが「開闢岳」と思われる」

井深先生の思出（二）

原田 生「一九一〇（明治四十三）年神学部卒・牧師・本名 原田友太」

明治学院在学中、私は一身上の事情で、或期間、学科を休んだことがありました。それが教授会の問題となり、『彼は神学校をやめるのであらう』との意見がある教授の口から出たそうですが、井深先生は之を打ち消し、『そうではない。彼は伝道の志は棄てまい』と、私のために弁護せられたとのこと。其後秦庄吉教授が私に向つて、『君は井深先総理と何か親しい関係でもあるのか。あの冷静な総理が生徒の肩を持つことはめづらしい』と告げられました。私は此言葉を聞いて先生が鹿児島旅行の不思議な道連となつた私に、興味と眷顧とを變らず持つてゐて下さつたことを知つて、感謝の心を一層深めたのであります。

×

×

×

神学部卒業後、私は直ちに日本橋教会に招かれ今日に至つてをりますが、何か特別な催しを致しませず折にはいつも井深先生をお招きして、説教や奨励をしていたゞくことを慣しとしたのであります。日本橋教会の過去にさかのぼつて見ますと、明治三十二年頃組合派の海老名弾正師に半年余り、日曜日午後二時よりの講壇を受持つて貰つたことがあつたそうですが、此事が東京中会のやかましい問題となり、教会の代員はさんざん議場で攻撃を受け、一時は脱退トウタイ「※」まで惹き起したそうですが、幸に井深先生が仲裁の勞を取られ無事落着。かくて先生が仮牧師として日本橋の講壇と治会との任を負はるること一年余年、洋行帰りの松永文雄氏を後任として推薦され、終始教会の歩みをして蹟くことのないやうに取計はれたのであります。この事に関し日本橋教会としては先生の恩義をいつまでも忘れてはならぬと私は考へてをります。

×

×

×

先生は頭脳明晰、其意見を述べらるるや、條理透徹、論旨井然セイゼンとして聞く人をして、快く承服せしむるものがありました。又、先生は礼儀正しく、事の大小に捕はれず、誠実其物を以て人に接し日々の行動を律せられました。故に先生の前に出でては、不明な思を懐き、曖昧な態度に出づるが如きことは断じて許されないうな気がいたしました。

昭和十二年十一月第三日曜日に日本橋教会で教会創立六十年の記念会を催しましたが、井深先生から丁寧な祝辞を送つてまゐりましたので、其御礼の意味で閉会后、数名の婦人達が綺麗な花を携へて白金の御宅に伺ひましたところ、先生は非常に喜ばれ、銘々に聖句を書いて贈らんと言出でられたそ

うですが、其後先生の容態思はしからず遂に其事は果されなかつた。婦人等は先生の揮毫の恵与に預り得なかつたことを非常に残念がつてあるやうです。

×

×

×

三、四年前、白金の御宅を訪つれました際、先生は私に向つて申された。『先日大森の佐波牧師が見え、植村君の愛誦の句、「出門如見大賓」の言葉を書いてもらひたいとのことで、今それを書く用意をしてをる』と。この句は仲弓が『仁』に就ての問を發したのに孔子が答へた言葉で、私は此句に接し新しき興味と感銘とを与へられたのであります。『門内は親しきものの交りなれば、緊張を要せないが、一度門外に出でては、公人として用意周到、大賓客を接待するが如き慎重の容姿を保たねばならぬ。臣下として主君の面目にも係はることなれば、只管敬虔^{【ひたすら】}を旨とし、世の誹謗を断じて受くることのないやうに、進退去就を定むべきである。』（私訳）

井深、植村両先生は以上の金言其のまゝを体得せられた方で、神僕としての貫禄がおのづから備り、外部より鼎の軽重を問はるるが如きことは敢てなかつたやうあります。

今や基督教の前途多難にして、時代の風波激しく、稍もすれば信仰の舵を失ひ、周章狼狽の醜態を演じ、其の方向に迷はんとするものなきにしもあらず。此時に際し私共としては、一層沈着と篤信とを以て、諸先輩の志を継ぎ主の御名を辱しめないやうに努むる事が、諸先輩の靈を慰むる道と存じます。

×

×

×

井深先生の葬儀の日の朝、私は白金の御宅で令室から左のやうな話を承りました。『主人は逝去する前日、かう云ふことを申しました。自分は此世的には地位も財産も持たない。併し子や孫に恵まれてをる。幼年の頃、会津を出て、横浜に於て苦学をした当時の事を思ふと、神の恵を今更の如く感謝せざるを得ない』と。ヨハネ第三書二節に『愛する者よ、我なんぢが靈魂の榮ゆるごとく、汝すべてに榮え、かつ健かならんことを祈る』とあるが、井深先生の晩年は慥に此聖句の実現せられた好適例のやうに信ぜられます。

『福音新報』第二千三百二十二号 昭和十五年九月十九日発行より

〔※「驟」とあるが「驟」と思われる〕

わが知れる総理

平林 武雄 一九二八（昭和三）年中学・昭和六年高等商業部卒・明治学院大学教授

私は大正十二年に中学部に入學した。それゆゑ総理室における井深総理を知るはずもない。何かの式の時に壇上にあおぎ見る井深名誉総理の役割は、まず祝禱ときまつていた。その短い祈りの声は清く澄んで莊重、講堂のすみずみまで徹り、これならば確実に神様のところまでとどくぞと思つたほどである。私の級友石山茂太君は今でもクラス会などで少々まわつてくると、必ず白髪頭を振立ててや
おら祝禱をはじめるのは全く恐縮だが、あれは総理の祝福が身にしみた結果なのだろう。

私はその後寄宿舎の舎監をやり、敷地つづきの井深邸にも出入りするようになった。舎監をやめ、結婚し、長女が生まれた時、小さい彼女を抱いて参上したことがある。先生は幼児の手をとってあやして下さり、大そうご機嫌がよかったが、お疲れになってはと、氣を利かしたつもりで一時間ほどで辞去した。数日して花子夫人から、

「あなたがお帰りになったあと、女中と私とが、主人にきびしくしかられました。おもてなしが悪くからお客さまが早く帰ってしまったのだ、と申して。本当に散々でした。」

といわれた。亡くなる二三年前の先生は幼児の友達になって下さるほどお優しくなられた。

◇
『明治学院同窓会報』第十九号昭和四十二年十月発行「わが知れる総理たち」より

「人の世の」が出来る前、明治学院には校歌がなかった。（校歌がなかったということは大して不思議なことではない。今でも正式の校歌がなく、外国の民謡をうたったり、学生歌をうたったりしている学校はいくらかもある。）そして白金の丘の学生のなかには、その昔、築地の一致英和学校（英語名ユニオンカレッジ）時代にうたわれたカレッジ・ソングを歌っていたのもあっただろう。

「それは一体どんな歌だったのですか。」

私はある日、亡くなった井深先生におたずねしたことがあった。昭和十一年のころで、セベレンス

館のとなりの先生のお住居、コロの複製画のかかった部屋であつた。井深先生はその頃八十二歳で、昔のカレジ・ソングをそらんじてはいらっしゃらなかつたが、

「それはラトガーズ・カレジという学校のうたをちよいと直したものでした。ラトガーズをユニオンとなおし、ラリタンという河の名を隅田となおして歌つたものです。おわりのところは On the banks of the old Raritan.」とおっしゃつた。先生は八十を越しても声の澄んだ方で、その the old Raritan というあたり、全く美しいとしかいいようのない発音をされたので、内心私はびっくりした。

「明治学院大学英文学会誌」No.7 Dec.1958〈昭和三十三年〉「古いカレジ・ソングの話」より

井深先生を偲ふ

稲澤 謙一「二八八六（明治十九）年神学部卒・牧師」

井深先生は八十七歳の高齢に達せらるるまで祖国教化のため著大なる貢献をなされた国宝的人格者たる事は周知の事実で永く我が国文化史上に其名を録せられるべきである。私が先生の薫陶を蒙つたのは明治十八年頃の事で半世紀以上の長きに及んで居る。其間私は渡米して修学を続けたり在留同胞に伝道したりして二十五年を過ごした。明治四十三年排日の声高き際私が結婚の報を呈するや先生は直ちに返書を賜つた。

「現今米国にては排日熱の盛なる折柄米婦人アリス・ケエト・グッドマン嬢と結婚被成候事申中容

易の事に有之間敷令夫人の御勇氣の程推察到候願くは天父の祝福新家庭の上に益々豊かに加へられん事を祈申候。敬具一

降て大正五年先生の令弟井深彦三郎代議士の逝去を傷み弔詞を呈するや直ちに

「極めて懇篤なる弔詞を辱ふし同情の段奉深謝候。前途有望の身を以て溘焉長逝致候は残念千萬に候へ共彼自身に到りては満蒙発展の為に東奔西走の最中北京に斃れ候は寧ろ本懐ならんと想像罷在候。不取敢御礼申上候、敬具」

大正十一年頃鎌倉静養館に静養の為先生御夫妻がお出になつた際令弟が蒐集された支那名士の麗筆と共に勝安房伯が揮毫されたヨハネ伝三章の聖語の唐紙を割愛された。此は軸と成り故あつて小林誠君に譲つた。同君は会津藩士の家に生れ、同藩の親戚たる日下義雄氏より譲られた白虎隊の遺品九寸五分の小剣を私は割愛した事が有るので、井深先生に此話をした所是非一見したいと所望されたので之をお目につけた。先生は之を熟視せらるる事稍暫しにして往時を追懐し万感交々胸に迫るの状、わき目にも著しきものがあつた。翌月になつて先生の云はるるやう。「昨夜は一睡も取れなかつた。薬を服用したが効目がなかつた。此上昂奮して不眠になやまさると健康を害する恐れ」があるから一旦帰京して医師に相談したいとて予定を繰　　「未完」

井深梶之助先生

久布白 落實「日本基督教婦人矯風会」

井深先生は私にとっては何処までも夫人井深花子先生のご主人である。私が十五才で初めて東京に女子学院の生徒として学んだ時は井深花子夫人が新夫人として井深家に入り六人の母となり且つ女子学院で教職に立たれた計りの時であった。当時先生御夫妻はいづれも中年の中堅組とも云う可き然かも若老^{「若老」}「※」寄組と云つてよい地位であられたやうだ。

学生等は新帰朝の女理学士M・A・であられる花子夫人を其家庭に迎へ、一挙に六人の子女の母となり家庭の妻たる職をつとめつゝ更に生涯の為の学問です、私はこれを家庭の中に葬つて仕舞ひませんと敢然として教職に進出せられる夫人を良き理解をもつて支持せられる夫君を得難いキリスト者紳士として見上げて居つた。一度上野公園で何かの集会があつた時、この御夫妻はチリ／＼に来列して居られた。夫君は紙片に何か書きつけて少し離れた夫人に投げられた。間もなく御二人は連立つて出て行かれた事があつた。目敏い娘達は□二人を見送つて居た。當時に於て彼等の間に教養あるキリスト者夫妻の存在は一種のインスピレーションでさへ有つた。

『明治学院時報』第九十八号昭和十五年九月二十日発行より

〔※原稿では「若老寄組」となっているが、『明治学院時報』では「若年寄組」になっている〕

教室に於ける井深先生

桑田 秀延「一九一八（大正七）年神学部卒・日本神学校教授」

私が先生の御薫陶に浴したのは大正の初期で、今顧みて一番濃厚な思出として残ってゐるのは教室での先生です。神学部の建物の入口右側が先生の御室兼教室で、私は予科二年の時マッケンヂーの倫理学を習つたのを始めとして、本科ではホイットの説教学、マーテーゼンの基督教倫理学の教授を受けました。先生のやり方は、一二頁位宛を学生に訳さしてゆき、それをせきたて出来が悪いと次の学生に廻すと云ふ方法で、時々御自分で訳して頁を進められました。私共は之で苦しめられ英語の神学書を読む事を大いに訓練されました。

先生は学生を呼ぶ時にも必ず「……さん」と呼ばれ、紳士的で凡てが自由でした。私共は明治学院神学部から一定の神学を与へられませんでした。が、学問を愛し学問をなすことを教へられたと感謝してをり、この点で井深先生に負へるもの多きを思ひ、恩師を失つたの感を深くしてゐます。

〔『明治学院時報』第九十八号昭和十五年九月二十日発行より〕

床次内相との会見

牧野 虎次 「同志社総長事務取扱」

日本基督教界の長老として多年の足跡を残された博士のことであるから、後進予の如き者に取りても想ひ出での数々は頗る多い。がその内の一つをとのことであらば、差し当り第二に述べ度いのは、たしか大正八年であつたかその秋頃ではあるまいかと覚へる。博士の斡旋により、時の内務大臣床次竹二郎氏と在京宣教師の重立てる者との会見を、青山学院内で催された。案内役を承わつた予は内相と同道して会場に赴いた。内相は曾て三教会同を主催し、宗教行政には頗る関心を寄せた政治家である。博士はこの内相の理解ある御心持ちを外国宣教師に知らせ度いと的主旨でこの会合を催されたのであつた。十数名の教師達は内相を中心に晩餐を供にし懇談歎語頗る和やかな打解けた会合であつた。博士は云ふまでもなく主催者として頗る機転の利きたる斡旋役を勤められた。この一例を以てしても、如何に内外の融和と、政教の円満なる協力とに、博士が意を用ゐられて居たかを察するに余りある。以て博士が教界に重きをなされて居た面影を偲ぶことが出来やう。たゞ付記して置き度いのは、英語に堪能なる博士が一向にその使用を避けられ、内相と外人との会話一切の通訳を予に一任せられた時は、予は内心聊か平かならざるを覚えた。然し後になつて見れば、博士が後進に道を開き、相知のチャンスを与へやうとの好意の程が察せられ、洵に床しい次第である。

井深先生と私

松尾 造酒蔵 「一九一四（大正三）年神学部卒・牧師」

過去三十年間井深先生は私の先生でした。わが先生と申上げ度い方は私に取っては井深先生だけでも忘れない記憶です。ホイトの説教も先生に教授して頂いたのであった。卒業後私が小樽に伝道したのも、渡米留学したのも、帰朝後学院の講師になったのも、鎌倉に教会伝道するに至りしも先生の推薦によるものであった。先生が夏になると逗子の別荘に見える。それが毎年の一つの楽しみであった。今は只我が恩師に報ゆることの余りに少なかつたことを後悔してゐます。御見舞もせず、手紙とても差上げず、失礼してゐたのが気にかゝります。先生の八十余年の生涯は人生の貴重な記録である。横浜に於ける学僕より学院総理となる。神は明治の初年会津の一青年を召して我が教界の元老たらしめ給うた。その摂理の不思議を思ふ。

『明治学院時報』第九十八号昭和十五年九月二十日発行より』

井深先生

三松 俊平「福音新報社員・植村正久門下」

『君は直ぐにお家にお帰りなんです、では一寸植村君に御伝言を願ひませう。これから先も植村君が続けて自転車に乗られるのなら余程気をつけないと神様からの尊い生命を或は害ふ様な事にならぬとも限らぬと思ひます』と。かく曰ひつつ井深先生は神学部講堂の一室から泥んこになつた一両の自転車を引出した。教室の鍵、小さい鎖のついたのを指の先に巻いたり解いたり振廻したりしながら言をついだ、『昨日こゝへ講義にくる途中、植村君は芝公園の赤羽橋で泥濘にスッテンコロンと横倒しになつた』のだと痛心の色を浮かべて話されたのである。

それから一、二年後であつた。植村先生は明治学院から離れた。何でも噂によると神学教授上の問題からといふ。それは兎も角、程経たあと、明治三十六年と覚えるが私は氏から井深、熊野両先生に宛てた親展書を使ひして届けた。あの焼け失せたサンダム館の事務室であつた。金庫を背にデスクを前に立つた熊野先生、それと向き会ふた井深先生は椅子の寄り掛りのあたりを両手でつかんでゐた。この両先生の間には親展書が披いてある。憂ひげな視線を投げてゐた。井深先生はこういつた。『植村君が学院の理事を辞めるといふが全体明治学院の名づけ親である君にそんな筈がない、どうかそんな思ひ迫つた事を急いで為さらんでもよろしいと思ひます。一応は他の理事達にも囂りますが』。又突進飛躍せんとする植村先生、細心にステップを一步步と踏んでゆく井深先生、私はこの間を幾十

年に渡つてどれだけ往復した事であろう。日本基督教会の基礎、かくて築き上げられ、又事業は漸を追ふて建設された。眼前に映されしそのコンビの如何に偉大なるよ。

先生と私

村岸 清彦「一九一五（大正四）年神学部卒・牧師」

公的な関係は別として、先生と私との私的な思ひ出となると、明治四十三年から大正四年に到る私の学院時代の事に心惹かれる。何う云ふ訳か、其の当時私ほど先生に叱られた者も少いであらうし、又私ほど先生に突かかった者も稀であつたやうだ。怖い先生だと思ひ乍ら、何だ彼だと学院内に問題の起る毎に先生の処に押し掛けたものだった。素より毎度、議論で行き詰り、その怖さに威圧されてしどろもどろで撃退された事は云ふ迄もない。

其頃から二十年も経てからの事だ。先生に改めて、「昔の向ふ見ずな乱暴者が斯うして教会の御用に当らせて頂いてゐる事は有難いよりは申訳ない気持ちで一ぱいです」と述べると、先生は破顔一笑、「やあ御聖旨ですよ」と仰せられた。怖かつた先生はそれ以来親しむ可き先生として私の心に映じた。「老境」と云ふものが先生を斯くなしたのか、但しは其の様な一面が先生の中に在つたのか、それは知らない。

それからは時ある毎に、教会全体の大問題を携へては先生の邸を訪れ、その高見と指導とを受けた

ものである。先生は対談して面白い先生ではなかったが、我々の持つて行く問題は、閑居してゐられ
ても適確に看取され、正確な意見を洩らされた。しかし、語りかつ述ぶ可き領分を十分確守されて、
他の範囲に出しや張られなかつた事は敬服してゐる。

〔明治学院時報〕第九十九号昭和十五年十月二十日発行より〕

弔悼

武藤 健「一八八八（明治二十二年）年神学部卒・実業家」

「昭和十四年極月六日午前十一時、霜を踏んで白金の里に、念頭寸時も忘れ難き恩師井深先生をそ
の病床に訪ふ。夢幻裡に握手、血温旧誼を偲ぶ。師、寿齡八十有六。この長寿翁の明治文化建設に於
ける勲績多大なるを讀へよ」とは僕の日記だ。越えて一日「主人は一昨日も今日も、うとく眠つて
許りゐました。このやうな時でしたらとても昔のことを思出し得なかつたでせうに、昨日は珍しく判
つきりと幾十年もお目に掛らなかつた貴方様のお顔を直ぐ思出し得たことは全く不思議と存じます。
そうして過ぎし頃のことをお忘れなくお訪ね下さいましたことを大変喜びました様子は私ども永く忘
れ難き印象となり」云々。これ花子令夫人の書信の一節だ。

「あ、僕は何たる幸運児だ。一種の靈感に導かれ、大理石の如き聖者の面影に接し、憶へば明治十
八年以来訓育を賜りし恩師に感謝を捧げ、生別の礼を致せしを。」

翁今や久遠の眠りに入り給ひしも、その薫化は丘上の校歌碑と共に永く白金学徒の胸裡に不滅の生命を刻むべし。

白金の晩鐘寂し五月闇 豊水

〔明治学院時報〕第九十八号昭和十五年九月二十日発行より〕

井深先生の思ひ出 (書翰の中から)

大川 正「一九二二(大正十一)年神学部卒・台北神学校教授」
私は大正十一年三月神学部を卒業すると直ぐ、先生の御推薦で当神学校に就職して今日に至つてゐる。先日先生の訃報に接し、驚きと悲みと感謝の中に先生の御洪恩を追想してゐる次第である。卒業の際先生は自宅に我々卒業生三名を晩餐に招待して下さいました。其時先生は紋附の羽織と袴を着けて端坐せられてゐたが、其は武士を戦場に送る時の様な態度であつた。一別以来私は再び先生の温容に接することが出来なかつた事は誠に遺憾の極みである。然し御膝元に居た友人達と異り、私は遠隔の孤島に在る為めに、先生は御書翰を以て絶えず指導鞭撻して下さいされ、私も事々に先生の御配慮を辱うし得た事は身に余る光栄と感謝してゐる。

茲に先生の御書翰中の断片を記し以て先生の知遇を偲び度いと思ふ。

台北神学校にて

「次に小生も幸に其後益々元氣恢復致し昨今にては平素に不異候間御安意相成度候今年々々首の感に、老が身も神のめぐみに驚のこと

若かへるこそうれしかりけれ

御一笑々々」

右は大正十三年二月十五日付の書簡中の一片である。同年の三月五日には先生は神学部々長並びに教授の職を辞任申出られた。

「而も今回は令夫人も御同伴の由重々の御幸運と奉賀候老生は欧州へ三回北米へ五回旅行致候共未だ皆て一回も荊妻同伴致候事は無之只数年前ホノルル迄参候節同行致たるのみに候」

右は昭和五年二月二十八日付の書翰の一節である。私の渡米に際し先生の御紹介状を賜った時の一節であるが先生の御家庭の清福円満を偲ぶ便ともなるであらう。

「又先日議員選挙にも選挙場迄往復徒歩にて参り一票を投じて国民的責務を果し申候。

老が身も人にまけじと選挙かな

御一笑々々

昭和十一年三月十九日 井深梶之助

神学教授大川正様」

先生の壯者を凌ぐ愛国心を垣間見ることが出来ると偕に教へ児に対して神学教授等と書く所に先生のユーモアが謹厳そのものである様な人格の中から零れ出てゐるやうに思はれる。

『明治学院時報』第九十九号 昭和十五年十月二十日発行より

局外中立

沖野 岩三郎 「一九〇七（明治四十）年神学部卒・小説家・牧師」

井深先生を批評するには、局外中立の一語で尽きる。総ての事件に対して、局外にあつて中立するといふ事は容易でない。此の局外中立には、冷静が必要条件である。冷静は時として冷酷と見誤られることがある。

井深先生が、外国人と日本人との間にあつて、明治学院の総理として事を処理して行く時、外国人の方にのみ味方せず、日本人方にのみ味方せず、常に心を其の局外に置いて、中立の思想をもつてゐたことは、其の総理といふ難局を能く切り抜けて来た所以である。

井深先生には、武士の精神が凜乎として残つてゐた。だから局外中立の位置を守つてゐても、その何れからも軽蔑せられなかつたのである。しかし、時としては冷酷だといふ批評は免れなかつたのである。けれども誰しも井深先生を冷酷だといつて排斥はしなかつた。それは、その冷酷に似たものが、冷静であるといふことを誰しも知つてゐたからである。

『明治学院時報』第九十七号 昭和十五年七月二十日発行より

恩師井深先生を偲びて

小沼 邁「一九一五（大正四）年神学部卒・日本救世軍」

わが家に父の用ひた一冊の新約全書がありてその扉に左の如く記されてある。明治二十四年一月二十一日午前十時米人オルトマンズ氏日本人平山武知君両氏ヨリ洗礼ヲ受ク我ガ教会ハ日本基督教会ナリ。これは父榮吾が佐世保にて受洗を記念に記したものである。文字として表はせばこれ丈の事ではあれど、これ実に永年に亘る井深先生の御熱心なる個人伝道の結実に外ならぬ事を思ひて、感恩の情を禁ずる事が出来ない。父受洗の前年母、姉等とともに受洗して満五十年の記念の年に先生を天の聖国に御送りして感慨無量である。不肖主の福音の証人として今日あるも亦先生の御影である。我が願ひは身も霊も君のとして生くる事なり。

天父の御恩籠御遺族の上に豊かならん事を祈る。

（昭和十五、七、九）

〔講壇や演壇の上の井深先生・・・〕※

大島 廣「九州帝国大学農学部教授」

講壇や演壇の上の井深先生のお顔は会衆の一人として久しい前から拝して居たが、初めて一対一の

関係で先生の前に座ったのは多分私が大学を卒業した明治四十二年の夏、夫迄学院の博物科担任であった伊藤篤太郎博士の代りとして私が博物を受持つことになった折のことと思ふ。それから大正三年夏五高へ赴任する迄、総理としての先生と一パートタイム教師としての私との関係が五年間続いて御世話になったのである。

会議の席や懇話会の時などあの福徳円満なお顔に笑を湛へてウィットに富んだ色々の話をなされた中に、煖爐の直ぐ近くに座ると風邪を引き易いこと、国字問題は結局羅馬字に落付く外はないだらうなどと申されたことを不思議にハッキリ記憶してゐる。

寄宿舎の焼けた跡に建った新教室に蒸気レディーエーターに形のみ似せて下から瓦斯を燃やして湯を沸かすやうになつた物を各室に据つけられたが、暖房の目的には何の役にも立たぬ馬鹿気切つたもので猛烈に非難して先生を苦笑させたことを、筆を執りながら今思出して大いに恐縮して居る。

福岡にて

〔※原稿は題名なし〕

先生の英語と細心

齋藤 勇〔英文学者・東京帝国大学教授〕

明治四十年万国キリスト教青年会大会が東京で開かれた時、井深先生は度々壇場から英語で報告を

なされた。一学生であつた私は、そのやうに英語を話すことは他の日本人には不可能だらうと思つた。後、私が学生でなくなつてから間もなく青年会同盟委員の末席を汚すやうになつては、井深先生の議長ぶり、殊に外国人には英語を以て応答なさる鮮かさに、驚歎するほかなかつた。私などは英語で話すことを努力しない方がよいと、横着なことを考へるやうになつたほどである。

先生をおたづねしたことが唯一度ある。それは御勇退後、大正十五年の春であつた。私は聖書訳史を調べてゐたので、そのお話を伺ひに出たのである。御懇篤に教へて頂いた。数日の後には御丁重にも参考文献を二つ知らせて下さつた。(その御葉書は今私の机上にある。)さういふ細心な御注意にも御人格がしのばれる。

〔明治学院時報〕第九十七号昭和十五年七月二十日発行より〕

優しき一面

齊藤 惣一 「日本基督教青年会 Y M C A 同盟主事」

もう十七年の昔となつた。私は渡欧を前にして、御暇乞に白金の御宅に伺つた時のことであつた。その頃、病床にあられた先生は何くれと親切に、御注意下され、又、世界大会で逢ふであらう先生の旧知の方々を一々名をあげてよろしく伝へてくれとの御言葉であつた。勿論その中にはモット博士の名も含まれて居た。

先生は典型的、武士的基督者、謹厳端正、一語一句もいやしくせられなかつた方と云ふ印象はかなり強く人々の脳裡に残されてゐる様である。しかし、私には幾度となく、先生の優しい一面をあらはされ「た」場合を知つてゐる。先生と同じ船で、釜山から下関に渡つたことがあつた。丁度その時は、私の母も同船であつたが十歳年下の母に対して、「私よりまだ十もお若いから」と色々奨励して下さつたことも忘れぬ記憶の一つである。その母と同じ年に僅か五ヶ月を距て、天上の人となられたことも私にとつては何となく意味深く思はれるのである。

『明治学院時報』第九十八号昭和十五年九月二十日発行より

叱られて

佐々木 邦「一九〇五（明治三十八）年高等学部卒・小説家」

井深先生は謹厳な方だつた。私達は高等学部三年生の時、マッケンジーの倫理学といふのを先生から習つた。先生が怖いので、皆、先生の時間だけは充分に下読をして行つた。先生の英語の力は素晴らしいものだつた。恐らく日本一だつたらう。

私は一度先生から叱られたことがある。私達数名のものが夏休みに寄宿舎に残つてゐた。或夕刻賄の男衆がテニスをやり始めた。学生がゐないのを好機会に打ち興じたのだつた。皆裸体だ。私は何の気なしに見物してゐた。テニスコートと反対の果に井深先生の家があつた。先生は赤ちゃんを抱いて

涼んでゐたが、裸坊のテニスを見つけて走って来た。賄達は直ぐに逃げてしまった。先生は私のところへ寄つて来て、

『君は何故黙つて見てゐる？何故叱らないのか？』

と鋭く言はれた。自分は科のない積りでも、成程、裸体のテニスを見てゐたのは悪かつたと思つた。元來私を叱りに来たのではない。賄達が逃げてしまつたものだから、私が捉まつたのだつた。

『明治学院時報』第九十七号 昭和十五年七月二十日発行より』

欧州における井深先生の思出

鈴木 春「一九〇〇（明治三十三）年普通学部卒・明治学院理事長」

わたしの滞欧は一九一〇年から一七年にいたる七ヶ年間でして、最初の三ヶ年間はロンドンに、其後の四ヶ年間はパリに在住していました。一四年からの三ヶ年間は、恰も第一「次」世界大戦争の最中でして戦争の最重要地と認められたパリにおりました故、種々忘れ得がたい思出がありますが、今は井深先生に関する思出を語るに止めます。

欧州で先生にお会いしたのは、たしか一九一〇年エディンバラにて開かれた教会々議に先生がご出席の途次ロンドンにお立寄りのときでした。先生は当時ビショップ街にあつたわたしの事務所にお電話があり、お泊りになつていたホテルに先生をご訪問することになりました。その頃のわたしは齡三

十歳、今日は既に九十歳を超え、先生にロンドンでお目にかかったのも既に六十年の昔のことです。当時のわたしの写真をと本書の編集責任者からのお求めに応じ、ここに載せられることになりましたが、まことに今昔の感に堪えないものがあります。〔※〕

ロンドンに在任の期間わたくしに会見を求められたキリスト教会の先生方で、井深先生以外には植村正久先生と原田助先生とがあります。わたしの海外勤務は銀行関係のことでありました故、先生方と会見しましてもお話の題目は自然と限られてしまいますが、異国で再会の喜びをあらわすには、先生方を食事にご案内するのが適当と感じていましたので、井深先生をご案内しようと思いいホテルの狭いお部屋におたずねしその旨を申し上げますと、先生はベッドに腰掛けわたしに椅子をすすめながら、お部屋で語り合う方が望ましいと答えられ、そのままひと時を故国のこと特に明治学院母校のことなどのお話に過ぎしました。

植村先生は何の前触れもなく突然わたしの事務所にお出になりましたので、お食事に先生をご案内しお話を承わりたいと申し上げますと、暫らくわたしの身内のものなどのお話があり食事よりも大英博物館へ案内して呉れとのこと希望があり、ミュージアムの前までお供しますともうこれでお別れすると先生は独り館内にお入りになってしまいました。原田先生はわたしの妻の里方湯浅家の姻戚でもあり、同志社総長としてのご経歴から世俗社会とのご経験も少なからず、銀行マンのわたしとおつき合いいも心得ていられるとみえ、わたしが先生をお食事にご案内すると喜んでおうけになり種々のお話を交えながら一夕の歓びを尽すことができました。

以上ロンドンに於ける教会の三大先生とわたしとの会見の思出は、先生各自の異なつたパアソナリティの片りんを示しているように思います。あえて優劣を判断するためでなく各自の特色がにじみ出ているような感じを受けたのです。今日はこれらの先生方も各々のなすべきこの世の仕事を果たして、父なる神のみ許に立ち帰られました。ロンドンならぬ天国に於て先生たちとわたしとの再会も程遠からぬことでしよう。

『井深梶之助とその時代』第三卷 明治学院、昭和四十六年刊、二百三十頁～二百三十一頁より

〔※写真は『井深梶之助とその時代』第三卷二百三十頁にあり〕

井深総理のこと

多田 満長 一九〇七（明治四十）年普通学部卒・衆議院議員

私は、五年級一年間、学院の御厄介になり、親しく先生の薫陶を受けた。丈は余り高くない。小太りの確かりした身体つき、頭のテカテカ禿げた、丸顔に切れ長の鋭い目、其一文字に結んだ口、一種犯すべ可ざる威厳の中に慈愛の心を深く藏した風格は、さすが神学校の校長、修養の凡ならざるを思はしめた。入学試験の時、替玉の多い受験者に憤慨した自らは、「明治学院総理に奉る書」を書いて、先生に郵送して小言を食った事があつたが、入学許可となつて、「神学とは何か」と質問して、校長室に呼び出され、「銀貨を数枚握んで、地上に投げ、君の希望する表か裏を揃えようとしてそれが出

来るか」「鶏は卵を生む、卵から鶏は生れる、何時迄経つても果しはない」要するに神の力だ、人力など及ぶ処にあらず、宇宙の大自然力と云ふか、神の力と云ふかそこをよく認めねばならぬと説明されたことを今でもはつきり記憶して居る。当時自らは井深総理も神様ではないかと云ふ感で退出した。

井深梶之助先生を憶ふ

高田 畊安「南湖院長・医学博士」

井深先生は私らの極めて敬愛したる、本邦基督教元勳の一人であり、私は明治二十年先生と植村正久先生に由りて長老の按手礼を受けました。又先生の幼き令嬢の絶望的重患に際して、診療を托せられ、臍胸を発見して排膿せしも、二、三週間毎に蓄膿発熱せしに由り、停置套管法を思付き、遂に全治し、明治二十五年東京医学会に於て之を報告せし時、先生は令嬢を連れて、其の事実を証明せられました。又昭和四年南湖院創立三十周年及二十九回医王祭には臨席せられ、祝詞と祝祷をして下さいました。或日先生に南湖院てふ額面の揮毫を求めました所、快諾せられ、加之、別に貴重なる語を書き与へられました。即ち写真の通であります。「※」右両書を先生ご自身にて九段の私宅へ御持参下さいました。天垂余慶の聖語は極めて忠義善正なる先生の令裔に應ずべきであります。先生は聡明恭謙、温厚篤実、洵に聖霊の美果であり、小崎先生と共に吾らの好代表者でありました。

〔明治学院時報〕第九十九号 昭和十五年十月二十日発行より

〔※写真は「明治学院時報」第九十九号 昭和十五年十月二十日発行にあり〕

温容玉の如し

生方 敏郎 一八九〇二（明治三十五）年普通学部卒・作家

私達の組は先生から修身を教へられた。そして先生のお話は大変面白く有益だったが、倫理学として系統だったものではなかった。例へば「時間を大切にせよ」とか「怒りて日の入るに至る勿れ」とか「君子屋漏に恥ぢず」とかいふ類で断片的の教訓だった。また先生の温容、その中に閃く威厳、言語の優雅、殊にお祈の時の慄へ声など一として青年学生の尊敬の材料でないものはなかった。高等科では英語の訳読を教へられてゐたが、これまたステキな評判だった。

併し惜しいことに、又不思議にも先生の生徒間に於ける評判は甚だ悪かった。クールだとか吝嗇だとか云ひ、一人として先生を弁護し又賞賛する生徒はなかった。年若き新夫人を迎へられたので、一層悪評する人々が殖えた。併し実際先生に接してみると温容玉の如くだ。何故諸君が悪評するのか、私には今以て分らない。他の先生の場合にこんなことは一つもないのに。

〔明治学院時報〕第九十七号 昭和十五年七月二十日発行より

故井深大人を偲びて

和田 秀豊「好善社社長・牧師」

世のつとめ

まめにつくして

主のもとに

召されし君や

嬉しかるらむ

〔明治学院時報〕第九十七号昭和十五年七月二十日発行より

同窓訪問 病床の井深先生

鷺山 第三郎「一九一九（大正八）年神学部卒・明治学院高等学部教授」

伊藤主事とともに、井深先生をお見舞にでかけた。東京市内に、電車のひゞきのないところと謂へば、芝ではまず雷神山の森にちかひこの先生のお宅の付近か、御殿山の上くらしいのものであらう。玄関におとりつぎを願ふと、まもなく奥様が出られた。御看護のおつかれのためか、この二十日程の間に急にお顔に老ひの色が見え、少し前こゝみになられたやうにさへ見うけられた。先生の御容体を御

尋ねると、「二進一退目だった変化はみとめられませんが、池の水の静かに減じてゆく様に衰弱は加はってゆくやうです」とのお話であった。「十日間程まへまでは二階の一室にねてゐましたがかねがね二階への上り降りが大儀におもへるところから、奥に八畳の座敷を準備してゐたのですが、それがやつと出来あがりしましたから、そこへ移しました」とのお話であった。二人は奥に通された。廻り縁があつて、東と南に硝子戸がはめられ、床も書院もしつらへられた小ぎれいな離れであつた。お達者であられたら、先生はこゝで好きな義之や子昂や王猷の書に親しまれることであらう。今はその中央に寢台を置かれて、静かに、いとも静かに仰臥されて居られるのであつた。幸にお眼ざめで居られたので私共二人は寢台のそばによつていった。昔ながらの臉尻のながい細い眼であられる。勿論三十年前のそれとは較べられないが、ぢつと何かを見据えられる時の眼光には人を威服する威厳がやどされて居られる。お顔は、おもひのほか艶やかで、血食マユはいく分熱のあられるためか、はなはだよろしかった。従つて純白な夜具、周囲の柾目の新らしくもきよらかな建てつけ、着い畳によくも調和して、先生の御人格そのものゝやうに、あくまでも清楚高雅な感が漂ふてゐた。御声はさすがに嘎れてしまつて、容易に聞きとり難い。敏感な看護婦の通訳によつて漸くそれと判断ができるばかりである。往年のあの朗々として而も響きのある御声はどこに隠されたのかと疑はれる。伊藤主事は「建築資金の募集は順調にはこんでゐます。もう八万円くらいになりました。二三年のうちに立派に校舎を建てます」と、お耳のそばで囁くと、「さうですか、ありがとうございます。エンスイの結果ですね」と申された。その「さうですか」といふ言葉は相当に声量があつて今にも聞え出しさうであつたが、その次の二こと

は何の意か分らず「結果ですな」といふのは、喘ぎの様であつたが、それと判断された。

時たま霧がはれてかつきりと山のすがたが見える様に、すっかり意識を回復される事がある。筆者がお別れの握手をして戴かうとお胸のあたりに手をさしのばすと、右の手をおだしになつて「こちらはまだ強い」と可成りしつかりとした握力でにぎられ「奥様によろしく」とことづけされた。比較的小さくそろつて、しかも力強いその御手を見てゐる時に、その手この指こそ、かつてブラウニングの詩集をくりひろげられては、それを私共のために講じ、マルテンゼンの基督教倫理学の頁をくられは読みかせられたものだと思ひいで、何時までも握つてゐたいやうな思ひがした。

ある信仰のあつい乙女の臨終に接した時、美しき病人といふ感じをえたが、今こゝに別な相の美しき病人、いな立ちえざる老人を見た。私共は深い感激を覚えてそこを辞した。何時の日までこの美しき相を世にとどめられることか。

先生のうへに平和あれ、栄光あれ。

〔明治学院時報〕第八十四号 昭和十四年六月二十日発行より〕

ありし日の井深先生（上）

鷺山 第三郎 一九一九（大正八）年神学部卒・明治学院高等学部教授

鼠色のコート、同じ色のズボン、白地のチョッキのポケットからは細い金の鎖がのぞいてゐた。丈

は小さかったが、胴まわりは確かに人並以上である。首は太く、その上へのせられてゐる頭はどの点から見ても傑物といふ感を与へた。頭髮の具合は総退却型といふのか額から頭頂を超えてさらにそのむこうまでさがり、最後の一線を衛るごま塩の髪はほゞ直線をえがいてまるく両方の鬢のあたりまでまかりでゝゐた。そして大きな額から前額部にかけては、大平原を想はせるやうな広莫な無毛帯であるが、その中央、嬰兒の「をどり」といふあたりには、不思議に十数本の柔かい毛が残されてゐて、それがかすかに左に靡いてゐた。

先生は六十近くなられても決して眼鏡をもちひられなかつた。マルテンゼンやマッケンヂーのこまかい英字の書を講ぜられる場合でも、ついで眼鏡を用ひられたためしはなかつた。書物を左手で恰好よく、胸のあたりにさゝえられ、右手をズボンのポケットにさしこまれ、そこに入つてゐる何本かの鍵をおもひ出したやうにカチ／＼と幽かな音を立てさせながら、朗々たる声で講義をなさる姿は確かに全明治学院の一偉觀であつた。

講義をなさりながら総理室の一角から一角へ、よく磨かれた小さな靴を一足一足踏みしめながら、歩きなさるのであるが、その廻れ右の恰好にはまた一つの特徴があつた。左足の踵でくるつと廻られるから、一ど全体重をうしろの右足にうけられ、左足はのびしたまま床から二、三寸はなして、それから改めて、その足をふみしめ、右足を運んでゆくのである。だから上体が廻つた拍子に、一種の反動をうけて一度は後に、つきには前にとあるリズムを見せるのである。これは先生が御機嫌がよくて、元氣であられる場合はことに著しかつた。脚が比較的に短い割合に、上半身が太く重かつたために、

力学的に、かうしたりズムがあつたのかとも思ふ。

その訳解は、実に正確流暢なもので、殆んど外国書を邦訳してゐるとは思はれない程文脈は一貫し、措辞巧妙なものであられた。いくら永年の経験からとは謂へ、田舎の中学をで、きたばかりの書生どもには、世にこれ程英書を確かに読まれる方は又とあるまいとつくづく思はせられたものである。
(つづく)

『明治学院時報』第九十八号昭和十五年九月二十日発行より

ありし日の井深先生 (下)

鷺山 第三郎「一九一九(大正八)年神学部卒・明治学院高等学部教授」

教室での講義のほかに、各種の委員会や協議会が連続したためであらう、先生は遊びを忘れた方であつた。人を相手に話してゐなければ、書きものをされて居られるか静かに英書をよんで居られた。居眠りとあくびをされたお姿はたうとう私は見そこねた。さうかといつて決して先生にはユーモアが無かつたわけではない。時には狂歌や俚言をひかれてはまづ御自分で相好をくづしてお笑ひになつた。「ひとにする意見をきけば「前人^{マユ}」とか「こゝぎりの話とそこら謂ひまはり」とか「かるいこと去られぬわけのある箆^シ」とか「世の中にかほどうるさきものはなし文武といひて夜もねられず」といふ蜀山人の有名な狂歌などはみな先生の口から教へられたものであつた。

先生はまたよく西洋人と英語の洒落を謂つては興がられてゐた。

先生の一般生活は几帳面そのものであつた。総理室の机はいつもきちんと片づいてゐて、曾て乱雑になつた様子はなかつた。第一何物も机の上に置き放しのものはない。朝は始業一時間前に室に入られて、前日に着いた手紙を一一精読され、必要なものには早速返事をした、められた。

靴は深ゴムを好まれたやうであるが、それにはいつも艶があつた。お顔には毎朝剃刀をあてられるものか、曾て不精髯は見られなかつた。先生はどんな小さな集會でも、必ず、手帳に話されることの要項を誌して来られ、それを見ながら順序よく述べられるのであつた。

カレンダーには一杯にエンゲージメントを英語で認めて居られてゐた。丹念にその時間を書込んで居られたところを見ると、一一勤直マユにそれに御出席なされたことが思ひやられた。夜おそく神田方面から電車にのると、時々先生と乗りあはせることがあつたが、それがクリスマス頃の頃であると、白金の丘に足を入れる瞬間に、秩父おろしが顔にあたつて切れるやうな冷たさを覺えた。

「ごらんなさい、この丘の風はすっかりちがひませう！冷いでせう。さよなら、おやすみなさい！」と謂はれるのであつた。今やその人なし、とこしへに亡し。庭前の公孫樹よ、チャペルの高塔よ、かくて汝らは幾代の人々を迎へてはおくるのであるか。

一九四〇、七、二三

『明治学院時報』第九十九号昭和十五年十月二十日発行より

井深先生を憶へて

山本 忠興 「東京基督教青年会 Y M C A」理事長

明治初代入信の基督教先人の特徴は其武士的品格の凜然犯し難く廉潔操守以て範とすべきものがあつた。井深先生亦其典型にして起居進退基督教徒の師表とすべき巨人であられた。

先生は重厚事を苟もせざる性格に修練達識玲瓏玉の如き光彩を添へられたが為に、基督教諸般の会合に長として座せられ特に会議を指導さるる妙締に於ては追隨するものが無かつた。又端廉なる英語を以て内外人の会席に於て議事に又通訳に対処された事は万人の胸底に深い印象を残されて居る。

植村先生との御親交の故を以て富士見町教会の為に絶へず御配慮を受け又青年会の関係で屢々御奨励を受けた事は自分達後輩には絶大なる恩顧と激励を感じしめた。天寿を完ふして静に天に昇られた先生の高風清節を記憶して人世に処したい思がする。

〔『明治学院時報』第九十七号昭和十五年七月二十日発行より〕

故井深梶之助先生を想ふ

山室 民子 「日本救世軍」

故井深梶之助先生を想ひ、哀惜の念に堪えません。実は私自身は先生を個人的には深く存じ上げ

ませんでした。先生の夫人花子先生は私の旧師で、女子学院在学当時、化学を御教へ頂きました。先生は学課の間に折々御家庭の生活に就て語られることがありましたが、さういふお話を通し、私は花子先生を尊敬するのみならず、梶之助先生にも敬慕の念を抱くやうになりました。梶之助先生は教界に偉大な足跡を遺されしのみならず家庭人としても立派な方であられたらしく、女として私は特に其点を深く感銘致してをりました。亡き父山室軍平は梶之助先生を甚く尊敬もし、御慕ひもしてゐて軽井沢などでお目に掛る際には如何にも親しげにお話致してをりました。先生の御病篤しと聞いた時には、病身をも顧みず自ら御見舞に上つて夫人に御面会し、お祈りして帰つたこともございます。其後も先生の御健康には常に関心をもち、度々お噂し聖旨ならば、御快復なさいますやう、少しでもお楽になられますやう希つてゐました。井深御夫妻は救世軍の為にも色々御尽し下され、其事も父は何時にも感謝致してをりました。

〔『明治学院時報』第九十七号昭和十五年七月二十日発行より〕

井深先生の説教

矢野 貫城 〔明治学院長〕

私が初めて先生に御目にかゝつたのは、三十年も前のことで、地方の或る小さな教会員であつた頃のことである。伝道集会の為に先生をお招きしたので。非常な期待をしてお招きしただけに其の時の

お説教が今もありくくと残つてゐる。

『基督教は外国の宗教の様に考へられて居るが決して其の様なものではない。基督教は人生に於ける真理である。恰も太陽の光線は無色であるが其の光線に依て育てられて或る花は赤く、或る花は紫に、又或る花は青く、或は黄色に咲き出でる。其と同じく神の恵に浴しながら世界の各国は夫々の国柄を有し、夫々特徴ある文化を發達させ、夫々の国の使命を果すのである。我々日本人は基督教を受け入れ其の信仰を有することに依てよい日本人たる道を歩むこととなる。神の教へは太陽光線の様にすべの生命あるものを育てるのだ』といふのが其の主旨であつた。此の話は今考へて見て、日本精神と基督教との關係に就て適切な教訓を与へる。

〔『明治学院時報』第九十七号昭和十五年七月二十日発行より〕

井深梶之助先生を憶ふ

横川 四十八〔神戸女学院教授・図書館長〕

明治二十一年、石原牧師の不在中、大儀見元一郎氏が日曜朝夕の説教をして居られた当時の本郷教会堂は今のメソヂスト中央教会のあるところと思ふ。其十一月には私が洗礼を受けた思出の多い教会であつた。血氣の青年求道者の私は一函に伝道者たらんと思ひ立ち、或る日築地の明治学院神学校を訪れて入学の手續を調べた。私が井深先生に逢つたのは其の時が最初である。先生は羽織袴の扮装で、

威厳のある学者らしい中年の紳士であつた。其の時どんな話をしたか、亦何と教へられたかは更に記憶がない。只其の気品の高い風貌容姿、特に其の澄み透るやうな美声が強い印象を与へて尊敬の念を起さしめたのみである。

それから機会ある毎に先生の説教を聞き、亦麻布二本榎の先生の宅を訪問して教を受けたたりした。

先生の説教は二度聞いたゞけだが二ツとも其大意を覚えて居て時々回想するのである。一は明治二十一年の夏の夜築地の新栄教会でせられた伝道説教で、も一つは明治三十七年の頃私が仙台から上京した時、芝教会で聴いた朝礼拝の説教である。甲は靈魂不滅論で、乙はガラテア書の序論から交戦中の日本人の心得を教へられたのである。新栄教会での一節に『大カトウがタプサスの城中にて強いて友人、城兵を悉く逃れ去られしめ孤影端然、燈火の下にプラト一の靈魂不滅論を読み、案を叩きてプラト一よ爾の議論是なりと叫び喜びて自由の爲め、邦家の爲めに死せり』と叙べられ、古今東西の偉人は多く靈魂不滅を信じたる事を例証して聴衆に迫られた。折から雨がぼつぼつ降り出した。散会の人々が木造ペンキ塗の白い会堂の入口を降り行く時、故石本三十郎氏が得意の英語でイット・レインスと独語せられた通り、やがて風さへ強くなり、土砂降りの中を私は本郷春木町三丁目の寓居にズブ濡れとなつて帰り、着物を絞りにて家に這入つたのは十一時過ぎであつた。築地から本郷まで夜中雨の中を歩いて還る。五十余年後の今日では奇行と思はれようが当時の青年信者には珍らしくもなかつたと見え、此時同行した二人の女学生は私よりも更に遠い西片町までも歩いた程である。

先生の芝教会での礼拝説教では、勇猛果敢なゴール人は南欧に起り、欧亜と席捲してガラテヤ建国

に至りたるも爾來國勢振はず、教会も容易に淺薄な異端に惑はされなどする所以のものは其の民族性に堅忍持久の精神を欠くものがあるのでなかつたか、吾人日本人も大に反省すべきである。といふのであつた。

私は多くの先輩大家の説教を聞いたが、其の当時は感激しても三十年、五十年の後其大意を喚想し得るものは井深先生の、みで、二回聞いて、二回共永久に銘記したのである。惟ふに先生の説教は構想極めてよく整頓し、措辞、表現勝れて論理的にして加ふるに音声に頗る魅力があつたから、多くの聴衆に透徹した印象を与へたものと思はれる。

玉の如き信仰と情熱と明鏡の如き理性で包被し、常に控へ目で、年と共に円満な人格を築き上げられた井深先生は真に幸福な人であつたと思ふ。

一人の教会員を生れ出でしめるのにも神は多くの人に意識的に又無意識的に協同せしめ給ふ事がある。私が入信の初を回顧して見ると、教会では大儀見先生、乗松八郎執事、外にありては岩田徳義、ワデルの両先生があつたが接する機会は少なくとも井深先生の感化が最も顕著であつたと思ふ。井深先生始め上記の諸先生に謹みて感謝の意を表する。

『福音新報』第二千三百二十二号 昭和十五年七月十一日発行より

記 録

ここには、「明治学院理事会議事録」の中から議事録附録の「井深博士二送ル感謝決議文」、「福音新報」『明治学院時報』の中から井深梶之助先生の「逝去」「葬儀」に関する記事を掲載した。また井深梶之助先生の明治学院葬に際し鷺山第三郎氏により朗読された「井深梶之助先生略歴」も合わせて掲載した。

附 録

井深博士ニ送ル感謝決議文（本議事録（二〇）参照）

神学博士井深梶之助氏ハ西曆千八百九十二年明学院総理トナラレタルガ、其以前ニ副総理タラレシコト已ニ五年。西曆千九百二十一年三月ニ至リ総理ヲ辞セラル、迄能ク精勵セラレタリ、博士ハ当初ヨリ神学ヲ教授シ神学部長ノ位地ヲ兼掌セラレタルノミナラス更ニ設立者トシテ政府ニ対シテモ学院ヲ代表セラレタリ、惟フニ博士（マ）の声明ハ永ク学院ト共ニ不朽ナルベシ。西曆千九百二十四年三月博士ガ神学部長并ニ教授トシテノ辞表ヲ提出セラル、ヤ理事会ハ之ヲ受容スルト同時ニ現ニ名譽総理タルニ加フルニ名譽教授ノ称号ヲ以テシ学院トノ干係（マ）ヲ持續セラレン事ヲ希望スルニ決シタリ。

蓋シ博士ハ崇高ナル品性ト該博ナル学識ヲ以テ多年変遷アリタル職務ノ間ニ忠誠ニシテ変ル事ナク能ク才幹ヲ發揮セラレ学院ヲ愛スル家ノ如ク、ソノ愛情ト思想ヲ傾倒セラレ且ツ日本基督教青年会同盟并ニ日本日曜学校協会ニ対スル顯著ナル奉仕ニヨリ学院ニモ光彩ヲ添エラレ、加之日本基督教会ノ進歩發展ニ対シテモ貢獻セラレタル所殊ニ尠シトセズ、理事会ハ之等ノ事蹟ヲ併セ録シ以テ厚ク博士ノ功績ヲ讃ヘント欲スルモノナリ。

井深博士ノ明治学院ニ於ケルガ如ク一ノ学園ノ創始ヨリ發展ニ到ルマデ一身ヲ以テ終始セラレタル者ハ真ニ無双ナルベシ。理事会ハ博士ガ今回学院ノ関務ヲ離レタル後モ長寿ヲ全ウシ学院ガ彌々

盛ンニ發展シ行ク将来ヲ樂マル、機会ノ久シカラン事ヲ切望ス。

西曆千九百二十四年三月五日

明治学院理事会

井深梶之助氏

予ねて病氣靜養中の処去る二十四日午前十一時東京芝白金の自邸に於て死去、享年八十七才、氏は安政元年六月福島県若松市に生れ旧会津藩校日新館横濱修文館、ブラオン家塾、東京一致神学校等にて研学明治十二年麹町日本基督教会牧師に就任、同十四年東京一致神学校教授となり、同十九年明治学院創立に際し理事長兼神学部教授に就任、同二十年同院副総理に決定、同二十四年へボン博士の後を継いで総理となり、神学部長及び教授を兼ね大正十年三月総理を辞し名誉総理に推された。永く日本基督教青年会同盟理事長の職にありしが昭和五年七月に退任更に名誉同盟委員長に推されてゐる。葬儀は去る二十六日午後三時より明治学院に於て学院葬により執行

〔福音新報 第二千三百十号 昭和十五年六月二十七日発行より〕

井深先生の葬儀

—明治学院葬—

井深先生の葬儀は去る二十六日午後三時より明治学院葬により、驟雨に煙る芝白金の同院大講堂に於て執行された。

講堂内部は正面に柩を安置し、左右に設けられた司会者席、説教者席も凡て黒布に覆はれてゐた。

定刻都留仙次氏司式聖歌五五番を合唱、笹尾象太郎氏聖書朗読、富田満氏祈祷、鷺山第三郎氏履歴朗読に次いで山本秀煌氏莊重なる態度を以て井深先生が日本基督教会の元老として教界の為に、明治学院の為に献げられた功績を讃へ、傍ら基督教文学興隆に尽された貢献に就て語られた。

明治学院長矢野貫城氏の弔辞、郷司慥爾氏の祈祷、笹倉彌吉氏の祝詞を以て式を閉ぢた。

高等学部、高等商業部、中学部は各代表十名を式場に参列せしめた外、出棺に際して講堂入口より正門に到る両側に堵列し故総理の柩を見送つた。

(参列者は学生を除いて約一千名)

〔福音新報〕第二千三百一十一号 昭和十五年七月四日発行より〕

日本神学校だより

本校理事井深梶之助先生は先年来脳溢血症にて静養中の処、六月二十四日早朝急変、午前十一時文字通り眠るが如く安らかに逝かれた。享年八十七。同先生は本校の前神学校明治学院神学部部長、本校創立委員にして委員長、本校最初の理事長であられ、病中も常に本校に対して深き関心を示され、学校関係者が昨年度財政好況の報告を齎らした際の如き涙を浮べて喜ばれ、握手を求めて『ありがとう』と繰り返された程であつた。老しモーセの如く最後まで主の教会とその事業とのために祈り、二十三日の午後郷司牧師の訪問の際にも小さき礼拝を営み最後に共に主の祈を明瞭に誦せられたことである。葬儀に明治学院葬に於ては本校村田校長が弔辞を述べられた。

『福音新報』第二千三百二十二号 昭和十五年七月十一日発行より

学院育ての親 井深名誉総理逝去さる

盛大な学院葬執行

明治学院名誉総理井深梶之助博士は昨年三月以来健康勝れられず御静養中同五月脳溢血を再発して危篤に陥られて以来一進一退の御容態にて白金三光町の自邸にて御病臥中の処去る六月二十四日未明脳膜下出血の爲再び危篤に陥り午前十一時に遂に逝去された。葬儀は六月二十六日午後三時より学院大講堂に於いて学院葬により盛大に執行された。

名誉総理井深梶之助先生は大正十年後進に道を開くため学院総理の職を辞任され同十三年古稀に達せられるや神学部部長兼教授の任をも退かれて後は翌十四年の夏、汎太平洋会議に日本代表の一員としてハワイに赴かれた外は、芝白金三光町の自邸に或は湘州逗子の別荘に古書筆墨を友として夫人と唯二人悠々自適、清閑な晩年を楽しまれてゐた。八十余歳の高齢とも見えぬ艶々しいお顔色にステッキを振りながら豊饒たる御元気で時々学院にも見えられ、又日本基督教会大会の席などにも其の何時に変わらぬ元氣なお姿をお見掛けした事であったが、昨年三月以来御健康勝れられず、食欲も減退し、衰弱日々加はり、歩行も困難な状態となられ白金三光町の自邸にあつて御静養中のところ同五月三度目の脳溢血を再発して危篤に陥られ関係者一同一時は絶望かと憂慮した事であったが、其の後不思議

にも漸次回復され夫人の手厚き御看護の中に御病床にあつてひたすら御養生に努められたが、何分にも八十六歳の高齢の事とて御病状は一進一退の有様であられた処去る六月二十四日未明脳膜下出血の爲再び危篤に陥り午前十一時遂に天父の下に召された。享年八十七

×

×

×

井深先生は安政元年六月「十一」日会津若松の藩士井深宅右衛門氏の長男として生まれ幼少既に抜群の才幹あり、文武両道に秀で藩主松平容保公の寵を受けられた。慶応四年先生十三歳の時、時は恰も天下は勤王佐幕入乱れて戦ひ、擾乱の声巷に満つる時で主君松平容保は薩長軍の包圍攻撃をうけ壮烈なる籠城をなせしも翌年九月遂に力尽きて開城の悲運に陥り、先生の同志先輩達は有名な白虎隊として飯盛山に壮絶なる最後を遂げる等の非常なる出来事に遭遇された。先生は幼少の爲助けられて一時捕虜となられしも猪苗代に移されたが後赦されて故山川健次郎男柴四郎氏等と共に奥羽街道を草鞋ばきで江戸へと出て来られた。時に明治三年四月先生十五歳の時であつた。

翌明治四年横浜の県立洋学校修文館の学僕として雇はれ具に辛苦を舐める中同校の外人教師で宣教師たりしサミュエル・ブラウン氏に認められて種々勉学の便を与えられた。同氏の感化により明治六年一月同氏より洗礼を受けて公然基督信徒となられた。同年九月より植村正久、熊野雄七、押川方義、本多庸一、山本秀煌の諸氏と共に山之手二十二番のブラウン家塾に移り、其処にて英学及び神学をまなばる。此の間実に先生の人生觀世界觀に一大転換を來たし又あの堪能な英語の基礎が出来たのである。

明治十年十一月、ブラウン塾の塾生は東京築地明石町に新設された校舎に移り之を東京一致神学校と称するやうになつた。之が、明治学院の前身であり此の校舎の落成式当日（明治十年十一月三日）が明治学院の創立日となつたのである。「※1」翌十一年六月先生は植村正久、瀬川浅両氏と共に最初の卒業生となられた。卒業後は一時横浜指路教会「※2」の牧師となられたが明治十四年母校東京一致神学校の助教となり又一方イムブリー博士と共に日本一致教会の組織や憲法制定に尽力され又其の間幾多の基督教文献の著訳を公刊されたのであつた。

明治二十年一致神学校が他の二校と合併して白金に移され明治学院となり同二十二年かの有名なヘボン博士が学院総理となられるや先生は選ばれて副総理となり翌二十三年現職のまゝ北米ニューヨークに遊学、ユニオン神学校に学ばる。翌二十四年帰朝して学院総理に任ぜられた。時に齡三十七歳であつた。

明治二十七八年日清戦争の頃、我国全体に欧化主義に対する反動が起り基督教主義学校は非常なる経営難に陥り明治学院も特典を剥奪され生徒は激減する等の困難に立至つたが先生はよくその圧迫困難に打克ち学院本来の面目を失ふことなく堅忍持久よく今日の明治学院の基礎を築かれた。

明治三十八年日露戦役の最中本多庸一氏と共に仏国巴里に於ける万国基督教青年会大会に赴き、欧州各地に於いて東亜に於ける日本の立場を熱心に説明して多大の好反響を得たのであつた。

同三十九年北米合衆国に赴き、時の大統領ルーズベルト氏及同国政府要路の人々と面会して日米親善に努力された。同四十三年には英国のエディンバラに於ける万国宣教会に参列して屢々議長とな

つて公正なる指導振りによつて大いに日本人の信用を高めた。次いで大正二年には万国学生基督教青年會總會に参列の爲瑞西のチューリッヒに赴かる。

大正四年御大典の砌^{「みぎり」}多年育英の功により勲五等瑞宝章を授けらる。

此の間先生は日本基督教會教師として各地の伝道に奔走され、又中央にあつては大会議長に選ばれる事前後十二回、我國教界發達の爲大なる貢獻をされてゐる。又一方小崎弘道氏等と共に我國基督教青年會の創設發達のため努力を払われ、其の同盟委員長として国内のみならず國際的にも眼覚ましい活動をされた事は我が教界に特筆さるべき事である。

大正十年学院の仕事一段落をつけし時後進に路を開かん爲總理の職を辞さる。時に六十六歳。

明治二十四年總理になられてより実に三十年、前身一致神学校教師となられてより四十年、殆ど半世紀に亘つて我が学院のために尽瘁され、其の間幾千の卒業生を世に送り出し、幾多知名の人士を育成された功績は実に我國教育界に不滅の光輝を放つものと言はねばならぬ。

御遺族は花子未亡人（七六）の外

嗣子文雄氏（ロイド・レヂスター・オブ・シッピング検査員）

次男健次氏（陸軍々医少将医博）

三男清見氏（新京大同組技師）

長女千代子氏（荒川九大総長夫人）

次女豊子氏（片山東京外語教授夫人）

三女春子氏（木村医学博士夫人）
の三男三女の子福者である。

盛大な葬儀

故井深先生の葬儀は先生生前の学院に対する功績により校葬により行ふことに決定し、直ちに矢野院長を委員長とする葬儀委員会を設けて着々準備を運んだ。遺骸は御遺族の希望により土葬とする事となつたため葬儀は逝去の翌々日六月二十六日午後三時より学院大講堂に於いて左の順序により厳粛且盛大に執行された。

葬儀次第

司会者 都留 仙次

奏楽者 H・D・ハナフオド

前奏（会衆起立柩を迎ふ）

讚美歌 五五

聖書朗読 笹尾兼太郎氏

祈祷 理事長 富田 満

讚美歌 二九七

履歴朗読

鷺山第三郎

葬儀之辞

山本 秀煌氏

弔辞 学院長

矢野 貫城

祈祷

郷司 慥爾氏

讚美歌 四八三

弔辞

日本神学校

村田 四郎氏

日本基督教会大会

村岸 清彦氏

基督教青年会同盟

齊藤 惣一氏

基督教々育同盟会

安井 哲氏

日本基督東京中会

松尾造酒藏氏

明治学院同窓会長

一色 虎兒氏

弔辞、弔電朗読

中山 昌樹

祝祷

笹倉 彌吉氏

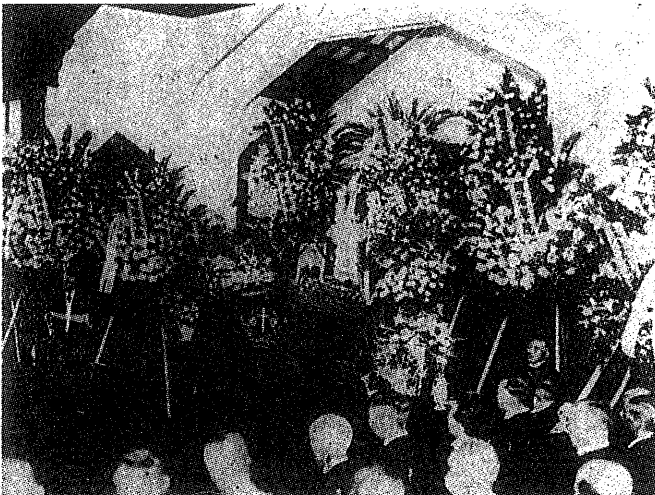
挨拶 学院代表

矢野 貫城

遺族代表

眞野 文二氏

後奏（会衆起立柩を送る）



明治学院講堂に於ける井深梶之助葬儀

葬儀当日学院は学業を休み全学生生徒は校門より式場迄堵列して柩を迎へた。式には学生生徒は代表者のみ列席せしめたのであるが当日の来会者は約八百名で大講堂を埋め尽し、又各方面より贈られたる花環は講堂の壇上及前面一面に飾られ故人の各方面に遺した足跡の巨大さを今更乍ら深く感ぜしめた事であつた。

柩は校門より先生の教へ子達のポールベアラーによつて運ばれ会衆起立の中に正面壇上に置かれた。

司式者は壇下向つて右方に在つて司式し、祈祷・弔辞等すべて壇下向つて左方に於いて其のパートをとり何人も壇上に登壇せず基督教葬儀としては異例であつた。

最後に遺族代表として故人の義弟に当られる柩密顧問官眞野文二氏の挨拶があつて午後四時五十分柩は再び故人と縁故深き教へ子達の手によつて運ばれ在校生及総員堵列見送の中を肅々と先生が生涯を捧げた懐かしき学院に最後の別を告げられた。一同の視線は見えなくなるまで柩の後を追つてゐた。校舎も校庭の大銀杏も旧主を見送るかの如く雨に濡れて淋しく立つてゐた。

かくて柩は青山墓地に運ばれ郷司牧師司式の下に厳肅に埋葬式が行はれ永遠の安き眠に就かれた。

主なる会葬者 (順不動)

松平保男、永井柳太郎、原邦造、山田英夫、志立鐵次郎、柴五郎、小坂順造、西野恵之助、河田茂、桃井直幹、神林浩、名和克己、藤浪正、細見憲、近藤次繁、深井英五、岸田正記、渡邊千菊、徳富蘇峰、高田畊安、高島三郎、山本忠興、日疋信亮、島谷敏郎、河井道子、正木壽郎、羽仁吉一、牧野虎

次、萬代順四郎、伊集院清彦、阿部政次郎の諸氏

弔詞

故明治学院名誉総理井深梶之助先生は安政元年六月十日会津藩士井深宅右衛門氏の長男として生れ藩校の教育を受けて文武の道に精勵し次第に頭角を現はされましたが恰も維新変革の時代に当り友人先輩が白虎隊に加はって壮烈なる忠死を遂げるに会せられたなど一少年時代既に幾多の艱難に遭遇し以て後年の大器を玉成するの基礎を造られたのであります。

後洋学を志して江戸に出てブラウン博士の人格に触れて始めて基督教に接する機会を得、遂に明治六年同博士から受洗し宗教界に志して、ブラウン塾、一致神学校等に於て教養を積み牧会、伝道、教育、青年指導等の事業に携つて基督教の為に大に力を致されましたが、明治十九年に明治学院が創設せられるに当り、其理事兼教授となり、次で米国留学を終へて明治二十四年総理に就任せられ、大正十年職を辞せられるまで総理として三十年、前身たる一致神学校助教授となつてから実に四十年の永きに亘つて学院に尽され、職を退かれて後も学院の為を思はれるの念益々深く、真に学院は先生から大恩を受けて居るのであります。

先生為人謹厳廉直多くの体験に依て洗練せられ、恩寵に依て磨かれた基督教的紳士でありまして教

界の大先輩と仰がれ、後進の大なる力でありました。

先生は明治時代の先覚として又其の才氣と教養とを以て社会的地位に於て大を為すことは容易のことでありましたが、人の目に大ならんと欲するよりも、神の啓示に忠実ならんとせられた先生は、終始一貫して理義を誤まらず、恵の内に在りて生き、国と人とに仕へることの外、何物もなかったのであります。

今や先生は八十七年の神に嘉せられた麗はしい御生涯を終へられ神の召を受けられ静かに天の御国に移されました。私共は在りし日の先生を憶ひ、哀悼禁ずる能はざるものがあると共に、先生の靈の上に愈々祝福豊かならんことと、先生に依て始められ、育てられた多くの事業の上に神の導きいや増さんことを祈り弔詞と致します。

昭和十五年六月二十六日

明治学院長 矢野 貫城

〔明治学院時報〕第九十七号昭和十五年七月二十日発行より〕

〔※1 明治学院の起源については巻頭の「明治学院歴史資料館資料集発刊にあたって」を参照のこと〕

〔※2 「横浜指路教会」とあるが「麹町教会」の間違いである〕

井深梶之助先生略歴

昭和十五年六月二十六日

明治学院葬に際し朗読す

鷲山 第三郎

明治学院名誉総理井深梶之助先生は、安政元年六月十日会津若松の藩士井深宅右衛門重義氏の長男として生まれました。井深家は、家老井深茂右衛門家の分家であり、当時は藩の大学寮、有名なる日新館の頭として、藩中の青年達の文武の指導役の家柄でありました。母君は同じく藩の家老西郷頼母氏の四女八代子「※1」と申され、賢婦の誉あり、大正七年東京、芝、白金の地でなくなられたことは吾々の記憶になほ新しい。

先生幼にして拔群の才幹あり、日新館生徒として十歳の頃、成績優秀のため、藩主松平容保カクモリ公から近思録一部並に御硯一面を拝領しました。書道は尊円流、馬は大坪流、剣は一刀流、弓は道雪流、槍は一旨流にと、次第に技を練って居られました。学ぶこと一年有半、天下は麻の如くに乱れ、擾乱の声は八方に聞えそめました。

慶應四年八月、先生十三才の夏、京都守護職として二十八万石の大藩会津若松は薩長軍のために遂

に包圍攻撃をうくるの危急に立ち至りました。主君松平容保公は喜徳公とともに、藩中の武家一切を鶴ヶ城に糾合し、壮烈なる籠城を決意しました。越えて九月二十二日、糧食、弾薬、欠乏に傾き、戦死者の数累進するの折柄、敵の放てる兵火は街を掩ひ、城の本丸にさへ刻々と巨弾の飛来して、武人は謂はずもがな、無辜の婦女子さへ傷つゝき倒るゝの悲運に陥りました。主君容保公は、事これまでなりと、万恥を一身に引きうけられ、藩中幾千の残存者のために、開城をなすの憂目を見ました。これは助けられし者の一人としての先生の生涯に、消すべからざる印象であり、感激であられたやうであります。

巖父宅右衛門氏は君公と共に、江戸に幽閉の身となりました。落城後の藩中の零落は謂ふも更であります。先生は暫く猪苗代に捕虜となつてゐましたが、赦さるゝや山川健次郎氏、柴四郎氏等と共に計り、学問をもつて身を立て、家を興し、以て雪辱の実を挙げんと決心の臍を固めました。かくて母君より与へられた二分金三枚を懐にして、忠僕菅井三之助を従へ、草鞋ばきで、奥羽本街道を江戸へと出て参り日本橋小舟町のある下屋敷に脚をとどめました。時に明治三年四月十七日、先生まさに十五才の寿であり、また先生の今日ある発端でありました。

翌明治四年、先生は、当時横浜に設立されてゐた、県立洋学校修文館の学僕に雇はれました。まことに弊衣破帽の赤貧の書生で、冬季巖寒の折はうすい毛布の上に雨戸をのせて夜寒を凌いだときさへ、自ら述懐されたことがあります。そのうち、同校の外人教師であつた、サミュエル・ロビンス・ブラウン氏に認められて、書物を給せられ、いろ／＼と勉学の便を与へられました。此のブラウンといふ

教師は、人格識見ともに卓絶した宣教師であつて。其の後へボン博士等と聖書の日本語訳をなすの傍我国先覚の青年たちに、英学並びに神学を教授して新日本の文化のため多大の貢献をした人物であります。先生はこのブラウン氏からたゞに人格的な感化と正則な英語とを受継いだばかりではありません。それらを通して『父子親あり、君臣義あり』以上の、「これまでは思ひも及ばなかつたほどの、さらに大きな社会観、人生観があることを暗黙のうちに悟らされました」「これまでは薩長に対し、復報するがために臥薪嘗胆、いかにもして勉強大成しようとのみ考へて居ましたが、ブラウン先生の側にあると、学問の真の動機はそんな小さなものではない、さらにさらに大きな博愛人道のためであると悟らしめられました」「即ち偉大な神の力といふものに心を傾けるやうになりました。」

明治六年一月の第一日曜に先生は遂に意を決してその恩師ブラウン氏から洗礼をうけて、公然と基督教信徒となりました。時に齡十八であります。

同年の九月から先生は植村正久、熊野雄七、押川方義、本多庸一、山本秀煌の諸氏とともに山之手二百十二番のブラウンの家塾にうつり、そこで英学とともに神学を学ぶことになりました。この時から明治十年九月までの家塾時代、此の四ヶ年間にまさつて、井深先生の語学的、思想的、信仰的内容を進歩発達せしめたものは、全生涯を通じてよもやありませんまい。ブラウン氏は『言葉は人間である』といふ標語のもとに、英語は一言一言丁寧厳格にその発音法を教へ、ある場合は塾生の口の中に自分の指を入れてまで舌の操り方を教へたと申します。

先生の英語の発音上、RとLとの区別がおのづから明瞭であつたのなどはまさにブラウン先生の教

育の然らしめたものと思はれます。また「塾の授業時間は、毎日午前中であつたが、どの先生の時間も緊張そのもので生徒の学力の進歩は目覚ましいものであつた」と伝へられてゐます。グリッフィスの言葉に「ブラウン氏は日本に於ける最初の最も卓絶した教育家で、ことに英語の教授法に於いては無双であり、その門下には全日本の英語の最堪能者を出した」とありますが、それは過言ではありませぬ。

明治十年十一月、ブラウン塾の塾生らは、東京、築地、明石町十七番に新築された校舎に移され、これを東京一致神学校と称するやうになりました。(明治学院のそもくの起源は、実にこの神学校の校舎の落成式の当日、即ち明治十年十一月三日にあるのであります)〔※2〕

翌明治十一年六月、先生は植村正久、瀬川浅両氏とともに最初の卒業生となりました。明治学院第一回生たる所以もこゝにあります。(齡二十四)

その後先生は横浜指路教会〔※3〕の牧師として實際伝道に従事してゐられましたが、明治十四年母校(東京一致神学校)の助教授となり、一方イムブリー博士を援けて日本一致教会の組織や憲法の制定に寄与するところがあり、また、有神論、天地創造論、神性論、人性論、福音史、その他の著訳を公刊して我国基督教文献史の濫觴を培ふたものであります。

明治二十年この神学校は他の二校と合併して白金に移され明治学院と称されるやうになりました。同二十二年医者としてヘボン式ローマ字の発案者として有名な、かのヘボン博士が第一次の学院総理となられました。先生は選「ば」れて副総理となり、現職のまゝ、翌二十三年北米ニューヨークに遊学、

ユニオン神学校に学ばれました。二十四年帰朝、学院総理に任ぜられました。時に齡三十七。ヘボン氏はその就任式の席上、先生に総理室の鍵を手渡しながら「私は明治学院といふ船によりき楫をたゞ今つけます」と公衆の前に宣言したさうであります。

明治二十七八年の頃、日清戦争に因んで、我国全体に欧化主義に対する反動が生じ、基督教の学校は何れも非常の経営難に陥り、明治学院もなか／＼の難航にたち至りました。併し先生はよく堅忍持久し、内外人の教職員を指導して初期の目的達成に努められました。今日の学院が一宗教学校としての面目を失はず、然も公立学校同様の特典を把持してゐるのは一に先生よりの賜であります。

明治三十八年日露戦役の最中先生は本多庸一氏と共にパリに於ける万国基督教青年会大会に赴きヨーロッパの各地に東亞に於ける日本の立場に關し熱誠なる説明を施して多大の好反響を得ました。

同三十九年北米合衆国に赴き大統領ルーズベルト氏、其他回国政府の要路の人々に面会して、日米親善のため多大のとりなしの功を挙げました。同四十三年には、エディンバラに於ける万国宣教会に参列の上屢々議長となつて公正妥當なる指導振を發揮し日本人の面目を挙げ信望を拍しました。次で大正二年には万国学生基督教青年会總會に参列のためスイスのチューリッヒに赴き大いに其の人物を称揚されました。大正四年御大典の節は、多年育英の功勞により勲五等瑞宝章を授けられました。

この間先生は日本基督教教会教師として各地に講演伝道に赴かれ教会の發達強化に尽力し、中央にあつては大会議長として画策経営に熱心されたことは隠れもなき事実であります。大会議長たりしことは前後十二回に及びました。かゝる例は極めて珍らしいこと、思ひます。一方又故小崎弘道氏等と共に

に我国基督教青年会の創設發達のため惜しみなき努力を払はれ、其の同盟委員長として単に国内のみか国際的にも目醒ましい活動をされたことは識者の夙に認めて居るところであります。ジョン・アー・モット、ロバート・スピア氏等と親交のあつたことは之等を物語つてゐます。大正十年学院の仕事一段落を告げし時、先生は後進に路を開かんため総理を辞任されました。時に六十六才。同十三年古稀に達せられるや神学部長兼教授の職をも辞任されました。学院理事会は多年の功勞に対し感謝決議をなし其の決議文を永遠に保存することゝなりました。大正十一年の秋脳溢血の症状のごとく、視力に障碍を來たされましたが其れは静養の結果幸に全快され、大正十四年の夏は最後の御奉公と申されながらハワイホノルルで開かれた汎太平洋會議に日本代表員の一人として列席されました。其後書道に精進され悠悠自適清閑を樂しまれてゐましたが最近兩三回脳溢血、脳膜下出血の症状あり、漸次に健康衰へ昨年来病臥されてゐましたが去る昭和十五年六月二十四日午前十一時極めて靜かに永遠の眠に就かれました。

先生の風格は端麗莊重其の言語動作には一点にもゆるがせにしない謹厳さがありました。威あつて猛からず柔和にして而も狎れしめず、事を処するに公正果斷稀に見る紳士でありました。説教講演に於て雄弁なる。殊に英語に堪能なるは屢々人をして背後に瞠若たらしめました。実にグリッフィスの言ふ「全日本の最堪能者」の名に背かぬものがありました。

最後に自分は潜越乍ら、井深先生の御閱歴に現はれてゐる一つの根本問題に触れて見たい。それは、先生が、あれ程の政治的力量と外交的手腕実力と、生れつきの貫祿とを備へてゐながら、何故に比較

的に超世間的な基督教々役者となり、一個の基督教学校の指導者たる位置に終始したかといふことでもあります。それには客觀的主觀的二様の原因が在るかと思ふ。客觀的には、何といつても明治前半の世は薩長の天下であり、徳川譜代の臣、ことに会津松平の家中の如きは如何に個人的に優秀なる力量識見を有つとも反逆落魄の武人の裔として用ひられる術はなかつたに相違ない。こゝに於て失意ながらも氣概ある会津の士は遠く海外に新天地の開拓を企てた。北米シエラネバダの山中に、会津コロニーといふ一画の地域があり、そこに残された一軒の百姓家に、立派な菊の御紋章と、葵の紋とを表裏にした金襴の旗、一振の螺鈿をちりばめた刀の蔵されてゐるのを余は目撃した。またその附近の木陰には皇国四年と誌された「おけいの墓」(享年十九)なるものがあり、そのお家流の品ある文字から見て、この寂しい山門に集ひよつてゐたものが、由緒ある末裔の一群であつたらうと想像される。この海外への逃避行の心は、国内にあつて、現世を超脱した実在界、即ち神への関心となるのではあるまいか。戊辰の戦塵がまだおさまりきらぬ明治初期の世相が先生の靈魂を神へ、基督へと赴かしめた事に何の不自然があらうか。私はこれを以下二つの事実をもつて実証が出来ると思ひます。

ある心理学者が「人間がおのづからに涙すること、また意識が朦朧となつた場合に凶らずも口にする言葉、その言葉のよつて来る概念は、その当人への意識下に絶えず存在してゐて、よかれ、悪かれ、その人の性格となり、品位となり、果ては運命までも形造るものである」と謂つて居ります。私は意識旺盛なる頃の先生にはいざ知らず、少くとも晩年の先生の御言葉のうちに非常に多く会津に関するものゝ多かつたことを思ひ出します。一日、御危篤に陥られて意識もあるやなしと氣づかはれた場合、

私共は枕頭に侍つてゐましたが、囚らずも話が会津のことに及びました。その会津といふ一言がお耳に達したのか今の今まで安らかな表情であつた先生のお顔が急に激しい悲しみの形相となり、今にも嗚咽するばかりになりました。私共は驚き且つ感激したのであります。「大脳の自制力が喪失する時感能^{マヤ}は外界よりの刺激に直接的である」と申します。会津といふ刺激は何を先生に想起せしめたか。

慶應四年九月二十二日鶴ヶ城落城の当日、玄武、青竜、朱雀のもろくの部隊は殺滅され、白虎の少年隊すら飯盛山で自刃し、藩公は事これまでなりと、残る藩士とその家族のために秋山篤の切腹の進言もきかず、麻上下に草履丸腰の姿で開城の誓のために敵軍将のもとに赴かれたいたましい姿を生は目撃されたと申して居られたが或ひはそれを夢の如く幻の如く脳裡に描かれたのではなかつたか。この少年期のいとも深い感激と印象とが先生の意識上、意識下の事実として、先生の生涯に影響がなかつたと誰が謂へようか。君公の恭順、それによって助けられた身として、自らもまた救極^{マヤ}の事に身を捧げようとの意向に身を処したことをむしろ当然ではなからうか。

今一つはブラウン氏の人格の先生に及ぼせる感化影響である、氏が明治初代の卓絶した教育家であつたことは既に述べた。また秀れた語学の指導者であつたことも事実に徴して明かである。しかしその門下の顔ぶれ、即ち植村、押川、本多の諸氏を想ひ合せる時に彼等は知者でも、学者でもなく、むしろ教養高き、真面目な基督教徒そのものであつた。

これはその指導者たりしブラウン氏が、単なる英語や神学の教師ではなく、寧ろ人間そのものいとも良き教導家であつたことを証する。氏が新潟の英学校から横浜の修文館に転じた時、六名の学生

が氏と共に横浜に移つたと謂ふし、その後二十四名の新潟の青年が漸次に修文館に集ひよつたとも誌されてゐる。これをもつて見ても氏の教育家たる資格の最大なるものはその人格的魅力であつたことが知られる。彼れは母の乳房から伝道の情熱を吸ひこんだ生来うまれつきの福音伝道者であつた。而も彼れは本来オランダ人であり、アメリカに移住して、夙より外国伝道の志望をいだき、アモイに、マカオにシンガポールに、つぶさに伝道の辛酸をなめ、今は最後のライフワークとして、氏自身の言葉を以てすれば「最も良き開墾者として」日本に基督教教育者としての使命を果たしつゝあるのであつた。彼れは音楽に長じ、数学をよくし、母の遺伝として、文学的鑑賞力も豊であつた。彼の奉仕の対象は神であり、欽仰マゴの的は十字架上の基督であり、労役の源は愛であり、その目標は広く人類であつた。若し世に敬虔と勤勞と愛とが一つの肉体となつたものがありうるとすれば、それはブラウン氏の日常生活ではなかつたか。「ブラウン先生はまことに親切で嚴格で、良い先生でした。」と、井深先生が述懐せらるゝ時、その述懐の内包として、彼れこそは、此の世の栄達ならぬ今一つの栄光を自分に見せてくれた方であつたとの意がなかつたらうか。何故に先生がサラ・「フィンスデル」・「ブラウン」※4「(ブラウン氏の母)の作なる「わづらはしき世をしばしのがれ」を愛吟なさつたか。之を歌はれる時に、臉をそめなさつたか、その意衷はほゞ想察できる。また修文館の学僕時代である。一日先生がウイルスンスリーダーの巻の二を見てゐると、イエスキリストらしき人を描いた一つの挿絵があつた。おそろおそろブラウン氏のところに行つて「これは何の絵ですか」と尋ねたところが、氏は絵と先生の顔とを見較べながら、小さな声で「若し君がこの絵のことを知りたいなら、この次の日曜日に

へボンさんの教会においでなさい。」とその方へ指をさゝれたさうである。「その一本の人さし指こそ思へば私にイエスの十字架の意義を教へるものであった」と先生は感慨ぶかく語られた。

君公松平容保の恭順と、基督の僕ブラウン氏の忠勤との関連は一見なきが如くである。而し之を凝視すればする程、両者は吾等の井深樞之助先生の人為りのうちに渾然と一つになれるを見逃しえない。秋霜烈日全身之義之道なる会津の武士が基督教徒となった一典型ではあるまいか。その統一には一抹無理の感なきを得ない。しかしその無理を忍んで忠順なる基督教徒として生き貫いたところに井深樞之助先生の真の面目と偉大さがある。

〔※1 八代子は次女説と四女説がある。なお井深樞之助の『回顧録』では「第二女」となっている。戸籍上は四女である〕

〔※2 明治学院の起源については巻頭の「明治学院歴史資料館資料集発刊にあたって」を参照のこと〕

〔※3 「横浜指路教会」とあるが「麹町教会」の間違いである〕

〔※4 「サラ・フィンスデール・ブラウン」とあるが「フィーベ・ヒンスデイル・ブラウン」と思われる〕

井深梶之助研究

ここには、故工藤英一経済学部教授が執筆された一九七九年十一月『大学時報』一四九号と一九八二年十一月『基督教文化学会年報』No.28に掲載された論文及び故杉本民三郎元明治学院総主事が一九八三年四月三十日、日本クリスチャン・ペンクラブ総会に於ける講演を元に執筆された、杉本民三郎著『わが酒杯はあふるゝな里』さんげ庵、一九八三年刊の論文をご遺族、各学会編集部の許可を得て転載した。

キリスト教大学の理想を求めた井深梶之助 — 第二代明治学院総理 —

工藤 英一 「明治学院大学教授」

明治学院の歴史は一八七七年の東京一致神学校の開設に始まる。「※」それ以来七十数年を経た一九四九年四月、戦後の新制大学として明治学院大学は漸く発足した。長い伝統を有する学校としては、余りにも遅れた大学開設といふべきかも知れない。戦前の日本におけるキリスト教主義学校教育への誤解と偏見が、その一因をなした点は否定できない。しかしそれと同時に、日本におけるキリスト教主義大学としての在り方を真摯に探求した場合、安易に大学開設に踏み切りえぬ事情のあつた点も忘れることができない。これらの点を思う時、明治学院総理井深梶之助の苦悩と努力に思いを馳せざるをえないのである。

井深は東北会津藩の出身である。そのために維新の動乱のなかで受けた苦渋こそ、かれを「敵をも愛す」キリストの信仰にむかわせた。その反面、かれは薩長を中心とする明治政府への反骨精神の持ち主でもあつた。かれは東京一致神学校の第一期生であり、卒業後母校に教鞭をとつた生粋の明治学院人であつた。一八八八年、ヘボンが明治学院の初代総理に就任するや、井深は求められて副総理となつた。さらに米國留学を終えて帰国するや、かれはヘボンの後任者として総理となつた。一八九一

年、井深三七歳の秋であった。その就任式で、かれは明治学院の教育の基本方針として「パンにあらで寧ろ修養^{カルチュラル}、忠君愛国のみに偏せざして上帝を敬畏するを以て知恵の本と為す」べきことを宣言した。上帝とは、当時キリスト教徒が用いた「神」を示す言葉である。この就任式の前年、天皇制下における教育の基本理念を明示した、あの「教育勅語」が發布されているのである。

井深総理の前途に待ち構えていたものは、反動期における学院の経営難であり、一八九九年の文部省訓令十二号によるキリスト教主義教育の危機であった。井深は、これらの難局を忍耐強く切り抜けるとともに、キリスト教の立場を一步も譲ることがなかった。

井深の卓越した英語力と、冷静で着実な判断力と指導力とは、かれを教会やYMCA関係の国際会議における重要な人物とした。それゆえ、かれは日本のキリスト教界を代表する国際人であった。武士的キリスト教徒であった井深には、すぐれた国際的センスが備わっていたのである。

明治学院が既存の専門学校である神学部、高等学部を整備・拡充して大学とすることに始動し始めたのは、一九〇七年頃であった。井深総理自身、学院拡張案立案委員並びにそのための資金募集委員となっている。しかしながら、この明治学院独自の大学部設置案はその後必ずしも進展をみなかった。むしろ井深の胸中には、漸次別個のキリスト教主義大学建設の計画が芽生え始めた。一九〇九年十月、日本宣教五十年記念講演会において、かれは、既存のキリスト教諸教派の立場を越えた一個のキリスト教主義大学の建設を提唱している。宣教開始五十年記念大会の決議文の中に、この井深提案は採択された。井深の立場は、各教派が自派の教勢拡張をめざして大学の理念への十分な配慮を欠い

た布教中心の大学建設を企てることは、正しくないとするにあつた。それよりも、超教派的立場に立つて、充実したキリスト教主義大学の建設をめざすことこそ、日本の大学教育に対するキリスト教としての貢献にほかならないとするのが、井深の基本的考え方であつた。

一九一〇年、エディンバラに開催された世界宣教大会に出席した井深は、右の案を提案した。プロテスタント教会の超教派的統合をめざすエキュメニズムの立場から、またアジア地域における宣教のための有効・切実な企画として、井深の案は、同大会において強い関心をもつて歓迎された。

帰国後の井深は、企画実現のために精力的に働いた。各派宣教師や新渡戸稲造、佐藤昌介等と委員会を組織し、「日本基督教大学」の憲法原案の作成が進められた。しかし、キリスト教主義学校のなかに既に大学を開設したものもあり、各教派の伝統や利害関係が複雑に絡みあつて、超教派的大学建設の理想はついに実現を見ずに終つた。一九一五年五月頃の日記の中で、井深はこの事業の実現がなお前途遼遠であると再三にわたり嘆息している。大学建設の準備的前提として、井深が努力して推進した幾つかの教派のミッション・スクールとの合同も、結局は画餅に終らざるをえなかつた。

一九二一年、三十年間にわたる明治学院総理の職を辞した井深は、やがてキリスト教学校教育の第一線からも退いた。それとともにかれの抱いたキリスト教主義大学の理想も忘れられていった。しかしながら、明治学院においては、大学開設をめざすに当つての大学像として、井深の考えが強い影響力をもつたことは否定できない。

エディンバラの世界宣教大会において確認されたアジアにおける超教派的大学の創設は、日本の女

子に関しては、東京女子大学の新設となつて結実している。その事業の中心となつて働いた人物のひとりに、明治学院時代井深の良き理解者であり協力者であつたA・K・ライシャワーがいた。

井深の求めたキリスト教大学の理想は、不幸にして男子に関して結実をみなかつたが、女子に関しては、アジアの他の地域に先駆けて実現をみたのである。一九一八年四月三十日の井深の日記には、東京女子大学の開校式に出席した旨の記述がある。そこでの井深の感慨は果していかなるものであつたらうか。

『『大学時報』一四九号 昭和五十四年十一月二十日発行「大学を興した人々③明治学院大学」より』

『※明治学院の起源については巻頭の「明治学院歴史資料館資料集発刊にあたって」を参照のこと』

井深梶之助——その思想形成への一試論——

工藤 英一 [明治学院大学教授]

一、はじめに

井深梶之助（一八五四—一九四〇）は幕末に生まれ、明治・大正・昭和（戦前）を生き抜いたキリスト者であり、日本におけるキリスト教学校教育の為に少なからざる貢献をした人物である。かれは三十年の長きにわたって、明治学院総理（現在の院長）の重責を担った。しかしながら、この井深については、僅かに資料集としての『井深梶之助とその時代』全三巻（一八七一年九月、明治学院）があるのみで、いまだその伝記も評伝も刊行されていない。

もちろん本稿は、井深の生涯そのものについて詳述するのが目的ではない。ただ、本稿の記述に先立って、井深の生涯の概略を明らかにすることは必要であろう。その点に関しては、本稿の末尾に井深梶之助・略年譜を掲載したので、これを参照されたい。この略年譜は、筆者個人の作成したものであって、きわめて不十分且つ杜撰であるが、これによって差しあたり井深の生涯の概略を知ることができるであろう。

井深の思想がいかなるものであったかを明らかにしようとするに当たって、おそろしいかなる研究

者も、ひとつの壁につきあたりざるをえないであろう。それは、井深にはその思想の基本を知り得るような主著がないという点である。もちろんかれにも多くの著述がある。しかしそれらの殆んどは、翻訳書か伝道用のリーフレット類であつて、それらの著述から、かれの思想の根幹を理解できるといったものではない。それゆえ、井深の思想を理解するひとつの方法として、かれの著作そのものにアプローチしていく方法とは別個に、次のような方法を提示したい。

井深は、キリスト者として、なかならず牧師とりわけキリスト教教育界の指導者として、さまざまな事件や問題に対処した。そのような場合におけるかれの事件や問題への対処の姿勢・行動の様式を考察していくことは、かれのキリスト教信仰に根ざした思想を理解するうえに有効な方法となりうるであろう。それはいわば、特定の事件や問題をつうじて、井深のキリスト教信仰の在り方を明らかにすることにほかならない。

このように具体的な事件や問題をつうじて、井深の信仰の在り方を思想として把握する場合、そのような思想が井深という一個の人格において形成された所似が何であるかが、当然問われるであろう。筆者はこの点について、井深の思想形成における重要な要素として、次の三つのことをあげたい。ただしこの指摘は、筆者の井深樞之助研究の現段階におけるひとつの試論の域を出ぬものであることを予めお断りしておきたい。三つの要素とは、次のとおりである。

(1) 会津人としての出自

(2) 日本基督教会の一員としての立場

(3) 国際的舞台での活動との関連

二、会津人として

井深が会津藩における名門の上層武士の家に生まれ、しかも長男であったということは、かれが幼少時において、きわめて厳格な封建的倫理道德の訓育を受けたことを意味する。しかもこれに加うるに、戊辰戦争における深刻な敗戦体験をまかれは経験した。特に母方の実家である西郷家では、非戦闘員である老幼婦女子二十一名が、鶴が城に籠城した一族の戦闘員に後顧の憂いなくらしめようと自刃して果てるという事件があった。このことによつて井深は、祖母・伯母・従姉妹たちと死別した。これによつて、井深は会津藩の敗戦をつうじて、武家の封建的倫理の在り方を身にしみて感じとつた。会津藩は、維新戦争におけるスケイプ・ゴウトの立場に立たされ、政府軍（会津ではこれを西軍といたつた）は、会津藩に対して苛酷な態度をもつてのぞみ、峻烈な差別的扱いを敢てした。それゆえ、井深は薩長に対する強い怨恨と対抗意識を抱いた。このことが、井深に、みずから英学修業を志し、それをつうじて会津藩の受けた屈辱をそそごうという決意を抱かせた。かれの向学心を支えたひとつのものは、こうした会津藩士としての武士の「意地」にほかならなかつた。

井深が英学修業に強い使命を感じたのは、右の事情のみからではない。かれは、政府軍の捕虜であつたが、藩上層部の計らいで捕囚の身を解除され、家族のもとに戻ることを許された。この特別待遇は、名門井深家の後継者であるがゆえに与えられた処遇であつた。この知遇への感謝として、井深は

強い使命感に燃えた。さらに、井深の母方の伯父であった会津藩家老西郷頼母が、戦争の過程で藩内において受けた非難や蔑視について、井深は一族の汚名をそそがねばならぬという意識を強くしたのである。

このように会津人としての薩長への怨恨と対立意識から向学心に燃えた井深は、さまざまな苦学の体験を経て、S・R・ブラウンと出会い、幼少期から受けた封建的武士の倫理からキリスト教への回心を経験したのであった。おそらく、井深に会津人としての強烈な封建的忠誠心がなかったならば、またそこから発する薩長への強い反感がなかったならば、山上の垂訓に含まれる隣人愛の倫理に心打たれて、古い倫理を捨ててみずからキリストの僕となることはなかったに違いない。それゆえ井深の会津人としての側面は、その思想形成に重要な意味をもつのである。

もちろん、このような側面が、否定媒介的に井深の信仰に結びつくだけでなく、キリスト者となつてからの井深の内面に、会津人としての反骨の精神を燃えさせた点も注目すべきである。例えば、文部省訓令十二号の問題に関して、井深が宗教教育を守るべく、徹底的に国家権力に抵抗してやまなかったのは、その最も典型的な場合である。平素はきわめて謹厳なクリスチャン・ジェントルマンであった井深に、このような一面があつたことは無視できない。

三、日本基督教会の一員として

一八七七年井深は、ブラウン塾から東京一致神学校に転じた。同校における井深は、外国人教授の

講義の通訳者として重要な存在となり、宣教師の深い信頼を勝ち得た。従って、かれは、同校卒業後牧師となってからも、母校において教鞭をとることになり、さらにその後身である明治学院神学部の教授となり、やがて同学院の最高責任者となった。このことは、かれの立場が日本基督一致教会Ⅱ日本基督教会においてきわめて重要なものであることを示している。

しかしながら、日本基督公会以来の無教派主義と日本人教会の自主独立の伝統につながる日本基督教会に所属しながら、ミッションの経営になる明治学院の総理の地位にあることには、実はひとつの困難が伴った。すなわち、ミッションの立場と日基の自給独立の主張をいかに調和させていくかの困難がそれである。このむずかしい課題を円滑に進めていける日本人キリスト者として、井深の存在はきわめて貴重であった。

しかし、この問題がついに破綻を来たすのは、一九〇三年の植村正久の明治学院講師辞任であり、翌年の東京神学社の開校である。植村は、横浜以来の井深の僚友のひとりであったが、日基内部における自給独立の最も熱烈な主張者であった。しかも、植村のパーソナリティは、日基関係の伝道者・信徒を強くひきつけるものがあつた。植村は井深より年少であり、従って先輩としての井深に敬意を表していたとはいえ、日基における植村の実力と影響力は、井深を凌ぐものがあつた。

植村の明治学院講師辞任の理由に関して、保守的な宣教師との間に惹起した教科書問題のことがいわれるが、要は、植村の自給独立の主張が、漸く実行の段階に達したことに基づいていたと考えられる。植村の辞表が提出されるや、明治学院当局は、井深とインブリー及び石原保太郎の三名をして、

植村の辞任を慰留させた。しかし植村の辞意は変らなかつた。その説得の過程で、植村は左の六項目の提言をおこなつた。

- 一、明治学院神学部と日本基督教会との間に、いつそう緊密な関係をもつこと。
 - 二、神学生補助の資金は、ミッションによらずして、学校によつて管理されること。候補者の資格審査は、学校の権限たること。
 - 三、日本基督教会の信仰簡条こそ、教育の基準であり、教授は他の信仰簡条を固執せず、また日本基督教会の信仰簡条に反しない限り、教授の教育に制約を加うべきでないこと。
 - 四、教授会は有能なる新教授の採用によつて強化さるべきこと。
 - 五、別科は改善すること。
 - 六、理事会は、いかなる場合にも教員の任命に關しては、主導権をとること。
- 以上の項目は、植村の主張を物語るばかりでなく、井深が明治学院総理として、ミッションの立場と自給独立主義の間に立たされた微妙な立場を物語るものである。

四、国際的活動

井深は、ユニオン神学校への留学以後、数回にわたつて欧米に出かけている。かれの外遊における最も主要なものは、万国キリスト教学生同盟(W・S・C・F)の大会や世界宣教大会への出席であつた。これらの会合をつうじて、井深は次第にエキキュメニカルな信仰を身につけていった点は否定で

きない。その場合、かれがブラウン夫妻によって鍛えられた卓越した英語力の持ち主であったことの意味は大きい。

このような信仰との関連で、井深が関心を寄せた具体的行動として、日本における超教派的なキリスト教主義大学の創設をめざす努力があげられる。井深は、一九〇七年の頃から、この課題との取り組みを始め、明治学院の拡張計画の中にも大学の新設をとり入れ、しかもその大学が超教派的なものとして充実した内容を具備したものでなければならぬ点を強調した。一九〇九年の日本宣教五十年の記念講演において、井深はキリスト教主義大学建設の必要を訴えた。さらに一九一〇年のエディンバラにおける世界宣教大会では、かれの提言が採択され、クリスチャン・カレッジス・プロモーターズ・コミティの委員長に任命された。

それ以後、井深の超教派的キリスト教主義大学開設の具体的活動が開始された。その為の前提として必要であったことは、日本における既存のミッション関係高等教育機関の統合であった。井深の説得によって、バプテスト派やデイサイプルス派との統合・合併策は成功に近づいたが、比較的大規模な学校をもつミッションとの話し合いは難航をきわめ、結局、井深の意図は挫折をよぎなくされた。ただ女子高等教育に関しては、A・Kライシャワーを中心とする努力が実を結んで、一九一八年の東京女子大学開校となった。

井深がキリスト教界における国際的交わりの中で身につけたエキュメニズムの具体化の試みは、単にキリスト教大学の問題だけではなかった。井深が所属した日本基督教会において、かれは教派合同

の問題を訴える努力を怠らなかつた、しかし、井深の主張は、ここでも受け容れられなかつた。

五、結び

以上述べたように、井深の思想形成を考える場合、第一に会津人としての武士的倫理的キリスト教受容が重要な意味をもつことが指摘できる。それは、厳格な倫理的態度のクリスチャン・ジェントルマンとしての井深を形成した。ただその場合、国家権力への反骨的态度となつた部分は、漸次ナシヨナリステイックなものに接近し、融合していったことは否定できない。

しかも教会人としての井深においては、ミッションの立場と日本の教会の自給独立を強く主張する反ミッションの立場の狭間に立つて、両者の緩衝をはかつていこうとする点が顕著であつた。この点もまた、井深の思想を考えるに際して重要である。

第三に、井深がその卓抜な英語力を武器として、キリスト教界の国際的舞台において活躍し、そこで受け容れたエキシメニカルな信仰を、日本のキリスト教学校教育に具体化しようとし、また日本の教会の革新に役立てようとした点も注目すべきことである。ただこの点に関して、井深の思想は、日本の教会の現実に比較して、遙か先に進みすぎたといふべきかも知れない。

井深梶之助略年譜

一八五四(安政元)年 会津藩士井深宅右衛門の長男として生まれる(六月十日)。禄高五五〇石。幼名清估。

一八五六(安政三)年 帯附の祝い(三月十一日)。

一八五八(安政五)年 上下着の祝い

一八六〇(万延元)年 父から「いろは」を習う。

一八六三(文久三)年 藩校日新館に入学。

一八六四(元治元)年 四書五経の素読試験に合格。

一八六七(慶応三)年 「試学」に及第、「近思録」一部を拝領。

一八六八(明治元)年 元服、梶之助と改名、重信と名乗る。この年、父の後を追って越後出陣。御小姓役として鶴ヶ城籠城。落城(九月二日)。猪苗代の民家に寄寓、後ち水谷地村で家族と共に暮らす。

一八六九(明治二)年 仮日新館に通学、生徒取締

りを命ぜられる。洋学修業を申し出、十月二十日付で許可。

一八七〇(明治三)年 上京、千村五郎の洋学塾に入学、その後土佐藩英学塾に転じた。

一八七一(明治四)年 土佐藩英学塾を退塾、「修業御免」となる。横浜・修文館の学僕となる。S・R・ブラウンと出会う。

一八七二(明治五)年 キリスト教に関心を寄せる。ブラウンの経済的支援を受ける。横浜市学校に通学。

一八七三(明治六)年 ブラウンより受洗(一月五日)、ブラウン塾開塾とともに入塾(学僕兼従僕取締役)。

一八七四(明治七)年 吉田信好と共に栃木、埼玉に伝道旅行、新約聖書翻訳委員長ブラウンの助手を勤める。

一八七五(明治八)年 「喜の音信」の編集に従事。父より結婚をすすめられ、これに反対。

一八七七(明治十)年 郷里会津若松に帰省、東京

一致神学校開校、入学。

一八七八(明治二一年)年 日本基督一致教会の教師
試補となる(四月三日)。

一八七九(明治二二年)年 正教師となる(十月一日)。

一八八〇(明治二三年)年 麹町教会牧師となる(一
月一七日)。水上関子と結婚(四月)。

一八八一(明治二四年)年 東京一致神学校助教授と
なる。

一八八四(明治二七年)年 旧約聖書翻訳委員となる。

一八八六(明治二九年)年 明治学院理事員となり、
神学部教授に選ばれる。

一八八七(明治三〇)年 組合教会との合同問題に
奔走。プリンストン大学よりM・Aの名誉学位を
受ける。一致教会第四回大会議長。

一八八九(明治三二年)年 明治学院副総理に選ばる。
(十月二日)。

一八九〇(明治三三年)年 米留学の為副総理辞任
(七月七日)、横浜出帆渡米(八月九日)、ユニオン
神学校に学ぶ。

一八九一(明治二四年)年 帰国(九月)、明治学院第
二代総理に就任(就任式十一月六日)。

一八九二(明治二五年)年 熊本英学校事件に関する
公開状により信教の自由を訴える。

一八九三(明治二六年)年 「日本の花嫁」事件に関
して告訴委員のひとりとなる(第一中会)。

一八九四(明治二七年)年 第九回日基大会への「日
本の花嫁」事件に関する田村直臣の上告に対し反
論をなす。広島・呉に軍慰問旅行。

一八九七(明治三十年)年 来日したJ・R・モット
ーと協議。父宅右衛門死去(二月二十九日)。万国学
生キリスト教同盟会議出席の為渡米(ウィリアム
ス・タウン)。

一八九八(明治三二年)年 関子夫人死去(三月二
日)。明治学院普通学部、尋常中学校となる。学生
キリスト教同盟總會で会長に選ばれる。全国尋常
中学校長諮問会議に出席。

一八九九(明治三二年)年 上海の清国学生青年總會
に出席。文部省訓令十二号發布。この問題につき

東京府・文部省に働きかけ、宗教教育を守るために活躍。

一九〇〇(明治三三年) 大島花と再婚、明治学院普通学部にて徴兵猶予認めらる。

一九〇一(明治三四年) 総理邸に居住。

一九〇二(明治三五年) ラトガース大学より神学博士の学位を受ける。

一九〇三(明治三六年) 台湾旅行。普通学部、上級学校進学資格を認めらる。植村正久明治学院講師を辞任。

一九〇四(明治三七年) 傷病兵慰問旅行。日基大会において独立自給・内外協力問題論じられる。東京神学社創立。

一九〇五(明治三八年) 桂・インブリー会談の通訳。万国キリスト教青年会及び万国キリスト教学生同盟の大会出席を兼ねて、欧米諸国を巡回、日露戦争における日本の立場を弁明。

一九〇六(明治三九年) 帰国(二月十三日)。満州・朝鮮伝道旅行。

一九〇七(明治四〇)年 南長老教会ミッション明治学院より離脱。在職二五年祝賀会。東京にて万国キリスト教学生同盟大会開催。

一九〇九(明治四二年) 宣教開始五〇年記念会開催、キリスト教主義大学の必要を強調。日本YMC A同盟委員長(一九三〇年まで)。

一九一〇(明治四三年) 万国宣教大会出席のため渡英、アメリカ経由で帰国。

一九一一(明治四四年) 諸教派合同期成同盟会の発会式に出席(五月七日)、教役者修養会で教派問題を論ず(九月三〇日)。ヘボン博士死去。

一九一二(明治四五・大正元年) 三教会同に出席。

一九一三(大正二年) 欧米渡航、万国学生キリスト教同盟大会、万国日曜学校大会に出席。カリフォルニア排日問題につきアメリカで運動。

一九一四(大正三年) キリスト教大学開設を期し、学校合同のため尽力。

一九一五(大正四年) 朝鮮旅行。瑞宝章勲五等を授与さる。

- 一九一六(大正五年)年 弟彦三郎北京にて死去。
一九一七(大正六年)年 明治学院創立四〇周年記念式にて三五年勤続者として記念品を授与される。
一九一八(大正七年)年 東京女子大開校式に列席。母八代子急逝。
一九一九(大正八年)年 熊野雄七中学位部長辞退。インプリー教授辞任。
一九二〇(大正九年)年 第一回中学位生徒同盟休校事件。総理の辞表提出。中国旅行。
一九二一(大正十年)年 総理辞任、白金三光町邸に移る。第八回世界日曜学校大会開催。
一九二二(大正十一年)年 日本基督教会創立五〇年記念講演において、「日本基督教会の創立及び其の発達に貢献ある人士の歴史的追懐」を演説。
一九二三(大正十二年)年 北京における万国学生キリスト教同盟に出席。
一九二四(大正十三年)年 神学部長・教授辞任。発病・静養。神学部角筈に移転。
一九二五(大正十四年)年 植村正久死去。汎太平洋

- 会議出席の為ハワイへ行く。
一九二六(大正十五年・昭和元年)年 回顧録執筆開始。
一九二七(昭和二年)年 宗教学案問題。明治学院創立五十年。
一九二八(昭和三年)年 神学部引退。日本宗教大会。インプリー死去。アメルマン死去。
一九二九(昭和四年)年 三男真澄米国にて死去。神学部と神学社の合同決定。
一九三〇(昭和五年)年 日本神学校開校。
一九三三(昭和八年)年 八十歳祝賀会。
一九三四(昭和九年)年 発病・静養。
一九三五(昭和十年)年 中学位生徒同盟休校事件。
一九三九(昭和十四年)年 病氣重態。
一九四〇(昭和十五年)年 逝去(六月二四日)、明治学院葬(六月二六日)。(以上)

『基督教文化学会年報』No.28 一九八二年十一月発行「第五回キリスト教者人物史研究」より」

井深梶之助

杉本 民三郎 「一九三二（昭和七）年高等学部英文学科卒・元明治学院総主事」

《これは一九八三年四月三十日午後二時、教文館において開かれた日本クリスチャン・ペンクラブ総会に於ける講演を土台にして記述したものである。時間不足のため語り得なかつた部分があるので補足した。》

私は『井深梶之助とその時代』三巻の編集に当たつたので、満江理事長から、このような題で話すようにとご指名があつたものと思ひます。

さて、井深梶之助と言つてもご存知でない方が多いと思ひます。井深梶之助は明治二十四年から大正十年まで明治学院総理（院長）として、キリスト教教育に、伝道に、また、青年会運動に活動した人であります。

井深梶之助は、徳川幕制時代から、明治、大正、昭和と生きて、今次第二次大戦の直前、昭和十五年、八十七歳で生涯を終つた人でありますから、時代も激動の時代であり、年齢も八十七歳でありますから、その波乱に富んだ長い生涯の出来事を詳細に述べるには時がありませんから、私のノートによつて講義調に申述べますことをお許し願ひます。

◇家系

梶之助の父宅右衛門は、会津藩士で知行五百五十石を受け、学校奉行として藩校日新館の塾頭をしていました。母八代子は、会津藩家老西郷頼母の二女「※」でありました。先祖は信州高遠の城主保科正直の家臣井深茂右衛門重吉で五百石をうけていました。よく訊かれることですが、ソニーの井深大氏も同じ先祖で四代目から分かれています。以下井深の経歴と事件を述べます。

◇少年期

梶之助は安政元年（一八五四年）六月十日、会津若松に生まれました。十歳で藩校日新館に学びました。これは高級武士の子弟の学校でありました。この学校に童子訓どうしくんという校訓がありました。

この訓は、幼い梶之助の頭に刻まれて、終生それを守り通したので、茲にその第一条だけを申し上げておきましょう。

君なければ、食なし（君は藩主のこと）

父母なければ、生なし

師なければ、知らず

慶応四年（明治元年）戊辰戦争が起りました。父宅右衛門は藩領を衛まもるため越後に出征しました。梶之助はこの時、父に随行を願ひ出たが許されず、その後援軍が派遣せられる時にこれに加えられました。十四歳に達しませんでした。その時、元込銃で敵兵一名を殲たおしました。しかし、戦い利あらず、六十里越を命からがら敗走して帰りました。

慶応四年（明治元年）八月、官軍は会津攻略の方針を変えて会津に迫ることになりました。土佐藩の参謀板垣退助は、官軍の総参謀の大村益次郎の「小枝を伐つて幹に迫れ」という戦略、すなわち、日光、今市、宇都宮、白河、仙台、平、棚倉、三春、二本松を陥れて後、会津本拠に迫るといふ戦略であつたが、会津の冬は十月から始まる。雪に弱い南国薩土の兵士は、戦えない。そこで板垣は、薩摩藩の参謀伊地知と謀つて一挙に会津の本拠を攻略することとした。八月二十三日、早くも官軍は会津城下に進撃して来た。会津の兵は辺境の防備に出払つていて城下は手薄であつた。不意を衝かれた会津城下は混乱狼狽の極に達した。藩公松平容保は乗馬して滝沢口に向い梶之助も扈從して行つたが、馬を撃たれ、家臣たちの勧めによつて徒歩して城に入った。梶之助は藩公松平容保の小姓として君側に侍つた。籠城は八月二十三日より九月二十二日に至る一ヶ月であつたが、その間日夜砲弾にさらされ、毎日搬入される負傷兵や砲弾に当たつて死ぬ味方の兵士たちを見た。籠城者の中に、のちに新島襄夫人となつた山本八重子がいた。八重子はこの時は川崎某の妻であつたと井深は書いているが、新島襄を助けて同志社を興した山本覚馬の妹で、山本家は砲術指南の家であつたからか、八重子は飛込んで来た砲弾を分解して君公の御前で説明したのを井深少年は見たと記している。八重子はこの時、羅紗地の洋服を着て断髪であつたとも記している。

八月二十三日、官軍が城下へ城下へと乱入して来た時、井深一家は幸いに家が城の入口に近かつたので辛うじて城内に逃れたが、母八代子の実家西郷家は、敵の手にかかつて恥を晒すよりはと一家自刃した。七十を超えた老母から二歳の幼児に到るまで、自ら刺し、他を刺し、或は互に刺し違えて果

てた。親戚の者までこれに加わり、十七名の多数で西郷家は血の海と化したのであります。

梶之助は入城と同時に白虎隊の一隊が勇ましく行進して出て行くのを見送った。白虎隊は数え年十六、十七歳の少年から成る隊で、井深梶之助、山川健次郎（東大総長）高峰秀夫（東京高師校長）柴四郎（東海散士）等は年齢が足りず、これに加えられなかった。ここで白虎隊のことについて説明しておきましょう。世に白虎隊と称されているのは、八月二十三日、戸の口原に向った二番士中隊のことであつて、その中の二十人が（一人蘇生している）飯盛山で自刃したのを称えているのですが、白虎隊には寄合白虎、足軽白虎とあつて総勢二八八名であつた。前述の戸の口原に向った白虎隊は三十七人であつたが、或は傷つき、或ははぐれて飯盛山に出たのは二十人でありました。指揮者であつた日向内記は、その前夜失走して行方不明となりました。仕方なく篠田某が代つて指揮者となりましたが、何分にも十五、六歳の少年のこと故、思慮が足りなかつたと思われる。飯盛山から鶴ヶ城を遠望すると、城は砲煙と火災煙に包まれているので、陥落したものと誤認して、「今や城が落ち、君公が難に遇う、もはや臣等が事畢りぬ」と思い、自らの手によつて国に殉じようとの議が起つた。一同は賛成したが、一人秀才のほまれ高かつた井深茂太郎だけが賛成しなかつた。かれは切腹する前に、落城か否かを確認する必要があるといふのであつたが、『命が惜しいか、卑怯者―』といわれて、ついに一同と共に自刃して果てたが、惜しいことであつた。井深少年の説の正しかつたことは、愛宕山に出た十一人の白虎隊も、鶴ヶ城を望見して、飯盛山の少年と同様に落城と誤認して、まさに胸を開いて割腹せんとする場面に、会津藩敢死隊の一人が通りかかり、落城を確かめもせず、早まつたことを

するなど窺たしなめられて、なるほど思つて、よくよく城を見れば、天主閣は毅然として立つており、鐘樓の鐘の音も聞えているので、割腹を思い止まったのでした。それにしても惜しまれてならないのは飯盛山の十九人の少年である。二十人中、一人蘇生して助けられてこの事情が判つたのです。この人は通信技手として日清、日露の役にも従軍し、七十余歳まで生き延びて死にましたが、その墓は飯盛山にあつて、同志十九少年の墓より少し離れた処に葬られています。

籠城一ヶ月に及び、官軍の砲撃はますます激しく、味方の死傷、或は自刃するもの日増に多く、城内には殆んど子女と負傷兵を残すのみとなつた。藩主容保も降服の機を掴まうと同盟藩に使者を出したりしたが、時機を失し、官軍の方は、それより早く仙台、米沢などを降服せしめていたので、会津はもはや孤立無援となつた。藩主容保はこれ以上死傷者を加えて抵抗するの無益なるを知つて降服に決し、包帯を綴り合わせた白旗を掲げて降服を示したので、ついに一ヶ月に及ぶ官軍の砲撃は止んだ。

九月二十二日、午前十時、甲賀町通りに設けられた降服式場に、藩主松平容保、養子喜徳父子は、窺うかがれた姿に麻上下を着け、冷や飯草履に無帯刀という見るも哀れな姿で、軍監中村半次郎（桐野利秋）の前に立つた。二十八万石の城主のこの惨めな姿に、居並ぶ会津将士はただ嗚咽おえつして仰ぎ見る者はなかつた。井深の師秋山篤は、この光景を見るに忍びず自刃したほどである。お小姓として君側に侍していた十五歳の井深少年の心中は察するに余りあるものと思われます。

松平父子は滝沢村妙国寺に幽閉となり、男子は猪苗代、松代藩及び高田藩にお預けとなり老幼婦女子は、水谷地等の城北諸村に、また傷病兵と看護人は城東南青木村に収容された、父宅右衛門は藩主

父子と共に和歌山藩お預けとなった。梶之助は一旦猪苗代にお預けとなったが、誰のはからいによるものか、唯一人婦女子のいる所に返された。誰のはからいか今もって解らぬと述懐しています。戦争は終結したが、その反逆の責任は筆頭家老菅野権兵衛がとることになり、彼の切腹によって会津の罪は赦されたが、国の滅亡により藩士とその家族は禄を失い、大部分は会津を離れて四方に離散した。南部藩領内斗南とみなみに移住して斗南藩と称したが、二千八百戸を養うほどの領地ではなかった。少数ではあるが、オランダ人スネルに率いられてアメリカに渡った者もある。加州に残るワカマツ・コロニーがその跡である。少女おけいの墓もある。

◇青年期

戦争で藩校日新館は焼失したが、その跡に仮日新館が建てられ梶之助は再びそこに入学したが、翌明治二年十月、東京遊学の辞令が出た。遊学といつても費用は一銭も出ない。翌明治三年四月十七日、母が工面した路銀と一包の荷物を持って若松を後にした。当時は何の乗物もない。徒歩と川舟の旅で五日間を要して新橋（あたらしばし）につき、探ね探ねて漸く斗南藩に入った。会津の名誉回復のため、新しい学問をするべく希望に燃えた十六歳の少年井深梶之助であった。

新しい時代に順応するためには、洋学を学ぶ必要がある。そこで、芝増上寺内にあつた徳水院という洋学塾に入つて、はじめてABCを教わつた。先生は千村五郎といった。彼の語学力のほどは分らなかったが、それよりも当時出版されていた福沢諭吉の『世界国尽』『西洋事情』『西洋旅行案内』『窮理図解』等の書物によつて、はじめて世界というものに眼が開かれ、天地が変わるほどの驚きで

あつた。それまでは、会津藩、薩摩藩、長州藩などと藩の存在は知っていても、日本国というものすら知らなかつた者が、海の彼方にも色々の国があることを知つたのは大きな驚きであつた。せつかく、非常な希望を持つて入つた徳水院も、どうした事情か、数ヶ月で閉鎖となつた。そこで鍛冶橋内にあつた土佐藩英学塾に入つた。ここの教師沼間守一は旧幕臣であつたが、板垣退助に見込まれて土佐藩の英学塾の教師となつたのである。井深少年には、なかなかの人物に見えたようであるが、間もなく明治四年正月には修業御免となり、この塾での勉強も続かなかつた。

当時、横浜の修文館で学僕を求めているといふところを聞いた。^{マユ}修文館は官吏の子弟を教育する学校で、学僕とは用務員を兼ねた学生のことである。亡びたりとはいへ、会津藩五百五十石を受け、しかも家老の孫である者がこの卑しい職には抵抗を感じたところであらうが、喰いつなぐためには、やむを得なかつた。その中に館長が代り、星亨が館長となつた。学校の名前も変り、啓行堂となつた。井深は星に認められ会計主任に抜擢され、もはや掃除などはしなくてもよいことになつた。後に深い師弟の関係となるS・R・ブラウンとはこの時に出会つたのであつた。星亨は大酒を喰ひ学生をつれて夜遊びをするが、朝は早くから起きてランプの下で勉強していたとのことである。当時井深少年に最も大きな影響を与えたのは、中村敬宇の『擬泰西人建白書』であつた。さきに福沢諭吉の書物によつて世界の文明に眼を開かれた井深は、この中村の文章によつて、その西洋文明の基礎をなすものがキリスト教であることを知つてキリスト教に関心をもつようになった。たまたま井深の同僚の処に訪ねてきた人から、それなら海岸通りにゼームス・バラという人が講義をしているからと教えてくれた。行

つて見るとそこには、すでに押川方義、植村正久等が講義を聴きに來ていた。聖書は漢訳と英訳とが用いられていたようであるが、バラの日本語が解り難く何のことか意味もよく理解できなかった。しかし、そこで見た「天道溯源」とか「真理易知」のような漢訳の布教書、解説書によって理解が助けられた。

修文館で用いていた教科書のウエルソンス・リーダーにキリストが小兒を祝福している絵があった。井深はその絵の意味についてブラウンに訊ねた。ブラウンは、眼鏡越しに井深の顔を上げしげと見て、『お前は、ほんとにこの絵の意味を知りたいか、それなら次の日曜日に居留地三九番のヘボン施療所の小会堂に來るよう』とのことであつた。井深はそこでブラウンからキリストのことを聞いた。これが井深がキリスト教に接した第一歩であつた。日曜毎にブラウンから聖書の講義（英語）を受けたが、ブラウンは日本語ができず、井深は英語が未熟で甚だ解りにくいものであつたが、午後はゼームス・バラの自宅に行つて聖書の講義を受けた。この方は多少日本語もできたので聖書の研究には大いに助けとなつた。キリスト教は欧米文明の基礎をなすものであることはすでに知つたが、そのほかに、今まで教わつてきた君臣の義とか父子の恩敬とかいった古来の道徳以外に人間の倫理のあることを知り、井深の精神的世界は開け、洗礼を受けることを決意し、このことをブラウンに相談した。ブラウンは、それならば、小川義綏を訪ねて、その諮問を受けるようにとのことであつた。そこで小川を訪ねたところ、小川は受洗すれば命にかかわるかも知れないが、その覚悟はあるかと決心を確かめてから井深の受洗を認めた。そこで明治六年一月第一日曜日へヘボン施療所小会堂においてブラウンより

洗礼を受けた。ブラウンは、自分から洗礼を授けない宣教師で、彼から洗礼を受けた者は井深を含めて三名だけである。なお、明治五年より太陽歴が採用されて、明治五年十二月三日で明治五年は終っている。

修文館長星亨は、大蔵省出仕となり、修文館は、当時、私立英学塾を経営していた河村敬三の学校と合併して横浜市共立修文館となり野毛山に移った。井深は会計役を罷免されて生活も勉学の途もなくなつた。そこでブラウンに相談した処、月謝と食費を出してやるから市学校に残れとのことで市学校を続けることになつた。その時の同室の少年は、井深がブライト・ボーイと呼んでいる秀才で、後の枢密顧問官都筑馨六であつた。月謝と食費はブラウン先生が負担してくれるが、その他の費用の出所がなく、困り果てていたところ、桑名藩主松平定教及びその家臣七、八名が市学校に入学して来ることになつた。一行は野毛山の伊勢松屋という料亭に下宿することとなつたが、アメリカに行くため特に英語を勉強したいというので、そのチューター(個人指導教師)として井深が選ばれた。校長はさきに井深の会計係を取り上げたのを気の毒に思っていたのと、桑名藩が会津藩の親戚である関係から校長は井深を推薦したものとされる。こうして井深は幾ばくかの収入を得ることになつた。

ブラウンは契約の期限が来たので学校を去ることになつた。困つたのは井深は固より、桑名藩からの学生たちであつた。ぜひブラウンに授業をつづけてもらいたいとのことで相談の結果、井深が代表で、はこね函根に避暑中のブラウンに相談に行った。ブラウンは月謝一人十円、十人集まることを条件として、山手二百十一番の自宅で授業をつづけることになつた。月に百円の月謝はなかなかの大金であつ

たから困って、桑名藩主の松平に頼ることとなったが、その中に、彼等が下宿していた精米屋の平松屋寅吉が、桑名藩の恩義に報いるためか、月百円の月謝を引き受けることになった。これで月謝問題は一応片付づいた。

ブラウンの塾は、はじめは桑名藩士ら十名足らずであったが、その中に、バラ門下の押川方義、植村正久、熊野雄七らも加わり、また島田（武藤）三郎（後、衆議院議長）白石直治（後、工博）前田利嗣（侯爵）らも加わり二十名以上となった。井深は真木重遠の後任として塾の学僕兼取締役となり、ブラウン邸の長屋の一室に住居することになった。俸給は十二円から十五円で、この中から父親に三円の仕送りができた。当時、小学校の准訓導が二円五十銭であったから、三円の金は困窮の底にあった父親にはありがたかったであらう。

井深はブラウンの新約聖書翻訳の助手となった。翻訳委員は、ブラウン（長）、ヘボン、グリーンで、補佐役に松山高吉、奥野昌綱、高橋五良があたった。

明治十年、プレスビテリアン、ダッチ・リフォームド、スコットランド・プレスビテリアンの三ミッションが合同して、東京築地明石町に神学校を創立した。これが東京一致神学校で、ブラウン塾の学生の大部分はこれに入り、ブラウン塾は自然に廃止となった。一致神学校には校長はなく、アメルマン教授が主任教授となっていた。井深はアメルマンに請われて、日本語の教師となり、彼の講義の通訳に当たるなどアメルマンの助手となってアメルマン邸に住んだ。

◇壮年期

明治十二年、同校第一回生として卒業し、翌十三年、奥野昌綱の後任として麹町教会の牧師となる。水上せき子（関子、勢喜子）と結婚、翌十四年、一致神学校助教に招聘さる。東京一致神学校と東京一致英和学校（これはジョン・バラの築地大学校とワイコフの横浜先志学校の合併したるもの）が合併して明治学院を創立することになり、明治十九年四月創立案が起草された。明治二十年、井深の努力により、荏原郡白金村玉繩台に一万坪の土地を購入して、築地より新校地に移転した。明治二十年一月、設立認可され、井深は理事員会議長となり、神学部教授を兼ねた。明治二十二年、学校代表者としてJ・C・ヘボンを総理とし、井深を副総理とした。

明治二十三年、かねての念願が叶い、米国ユニオン神学校に留学、教会史を専攻した。外国留学は、初めてであったが、その前年にプリンストン大学より、マスター・オヴ・アーツの名譽学位をうけている。

明治二十四年帰朝、第二代明治学院総理に就任、三十八歳。就任式にヘボンは総理室の鍵を手渡し、井深はこれから明治学院のカジを取るのだと梶をもじつてしゃれた挨拶をした。この年、島崎藤村、戸川秋骨、馬場孤蝶らの普通学部クラスは、校庭の一隅に一株の樟の樹を植えて学院を卒業した。

明治三十三年、大島花と結婚、先妻せき子は、三十一年死去、二男三女を遺した。

明治三十五年、米国ラトガース大学より神学博士の名譽学位を受ける。

◇晩年

大正十年、明治学院総理を辞任、名誉総理となる。白金三光町の校邸に閑居していた。

昭和十五年（一九四〇年）六月二十四日死去、八十七歳。同二十六日、学院葬が行われ旧会津藩主松平保男、徳富蘇峰、永井柳太郎らの朝野の名士、教え子の島崎藤村等が参列した。

◇井深と基督教会

日本基督一致教会は、組合教会との合同に失敗して日本基督教会となった。日本基督教会は各個教会の小会、地区の国会、全国の大会の組織であつたが、井深は大会議長たること九回（大正六年まで）、冷静な人であつたから名議長と言われた。また巡回伝道にも度々出かけ、国内はもとより、朝鮮、台湾、満州にまでその足跡は及んだ。ここに日本基督教会を沸かせた一つの事件がある。それは教寄屋橋教会牧師田村直臣が、明治二十五年アメリカで、「日本の花嫁」（ジャパニーズ・ブライド）という小著を英文で発行したことに始まる。この書が、日本の恥辱を外国に晒さらしたといふので問題になり、牧師にあるまじき行爲として、井深梶之助と熊野雄七が原告となつて田村を東京中会に告訴した。東京中会では、可否同数となり、議長の裁決によつて被告田村の敗北となつた。田村はこれを不満として大会上訴した。基督教界の輿論も漸く喧しくなり、大会では、遂に田村の敗北となり、牧師の資格を剥奪され教会から追放された。この日本では珍らしい宗教裁判は明治二十六年より同二十七年まで続いたが、告訴人は井深と熊野であつたが、この事件の起る三年前に田村の結婚式を司つたのが井深であつた。

◇井深と青年会運動

東京YMCAが明治十三年創立せられた時、その創立に加わつた井深は、日本に於ける基督教青年

会運動を指導し、屢々その会長にも挙げられ、海外の大会にも派遣せられ、議長、副議長もつとめた。それを年代順にすると、明治三十年、米国における万国学生基督教同盟会議に出席、議長に選ばれる。明治三十二年、清国に於ける青年会に出席、同三十八年仏国における万国青年会同盟会議に出席、同四十三年、スコットランドのエヂンバラにおける万国宣教会議に出席、大正二年、米国における万国学生基督教青年会議に出席、折から排日移民法のため、邦人慰問激励のため渡米する服部綾雄、江原素六らと同船、井深はさらに首都ワシントンに赴き、珍田大使の紹介で大統領ウィルソンに会い、さらに國務長官ブライアンには二回面会して排日移民法の撤回を要請した。この事は、ワシントン・ポスト紙であったか新聞名は記憶にないが、内田大使、添田寿一と共にシルクハット姿でホワイトハウスを出るところの写真と共に大きく報道された。

◇井深と明治学院

明治学院総理としての教育活動は最も彼が力を注いだ活動で、在任三十一年に及んだ。明治十四年、明治学院の前身、東京一致神学校助教授となった時から教えれば、明治学院在職四十一年で、彼の生涯の半生を明治学院の教育と発展につくした。明治、大正の牧師は多く彼の薫陶を受け、植村正久の東京神学社出身者と共に旧日本基督教会を形成し、日本の救霊の活動を直接、間接に指導した。また、その自由な教育により、軍人と役人は一人も輩出しなかったが、多くの文人、芸術家を育成した。

彼が明治学院在職中、最も激しく戦ったのは、文部省訓令第十二号撤回の戦いであった。明治三十一年、普通部は、尋常中学校の資格を与えられたが、翌三十二年訓令によって、宗教教育を禁止され

た。すなわち、聖書教授、礼拝等を行なうことができなくなる。もし、この訓令に違反すれば、徴兵猶予、官公立高等専門学校への受験資格を与えぬと言う酷いものであった。この訓令に怯おびえて入学する者はなくなり、在学生も減少して、僅か九十余名となり、一人の教員の給与の支払いにも窮した。明治三十三年の卒業生は僅かに九名であった。この訓令は、宗教学校にとっては存立の生命に関わるものであった。井深は青山学院本多庸一、麻布中学校江原素六、同志社西原清東等と屢々会合して協議し、この訓令の撤回運動を起した。中でも井深は最も強力に執拗に当局に迫った。立教は早くから降服してこれに加わらなかつた。この訓令の立案者は参事官岡田良平であつたが、岡田はもとより、次官奥田義人、大臣樺山資紀、総理山縣有朋にまで会つて強く訓令の撤回を求めた。岡田は「文部省が定めた事以外は絶対にしてはならない」と言つたので、井深は、「では教育勅語の奉読は何の規定もないから取り止めましょう」と言つたら、岡田は黙つたという話がある。時の政府首脳は少年の頃、井深と戦つたのも不思議な因縁である。山縣は長州軍の山縣狂介として、樺山は覚之進として薩摩軍に属して会津攻略に加わつていたのである。

井深らの運動は効を奏し、翌三十三年に徴兵猶予の特典が回復し、同三十六年には、官立学校への受験資格を回復、訓令第十二号はそのまま生きつづけて戦後まで撤回されなかつたとのことだが、資格回復と共に宗教教育も黙認されてきた。

井深は財政的に苦しかった明治学院のため海外に行くたびに相当の募金をした。これは井深の語学力もさることながら、その人格が信頼されたものであらう。

◇井深の著作活動

井深の著作は、植村、内村ほどの分量はないが、次のような著作がある。アメルマンとの共著で、明治十四年に「新約聖書神学」「俗話馬可伝」を、同十七年に、「有神論」「救拯論きゆうじゆ」を、同十八年に「神性論」「神の定旨」「天地創造論」を著わしている。インブリーとの共著では、明治十七年「福音史」「加拉太書注解」「腓立比書注解」「基督言行録」等の神学書を著わし、伝道用トラクト「未来の旅」旅行」「基督信徒の心得」など十万余部以上発行した。

◇井深概評

(一) 幼少、会津藩校日新館における教育は彼の生涯を律したと思われる。すなわち、君(藩主)に対する忠、父母に対する孝、師に対する恩は彼の一生を律した道徳律であった。彼の日記には、正月元旦には、必ず「松平邸に伺候」となっている。君公のご機嫌うるわしきを拝し喜悅満足したことであらう。次は親に対する孝養である。没落した士族は全く生活力がなかったから、父宅右衛門は、斗南に移住しても農耕はできず、商売にも手を出したが、すべて失敗、五百五十石の奉行は、九尺二間の佗住居、日々の生活にも事欠く有様であった。井深はこの父母の哀れな生活がよく分っていたので、自ら苦学の貧書生でありながら、節約に節約を重ねて送金し、父母の窮状を助けた。また、最大の恩師ブラウンをはじめ、アメルマン、インブリー三博士に対する恩義は事ある毎に想起し、言及して肝に銘じて忘れることがなかった。

(二) 井深は、最も敏感な幼年時代に、普通人の経験しない独特な経験をした。十四歳で戊辰戦争

に参加、十五歳で敵軍包囲の中で籠城、降服、母の実家西郷家の惨劇、朋友白虎隊の壮烈な死など、強烈な記憶を彼の脳裏に焼きつけた。宗教史家比屋根安定氏は井深を評して次の如く言った。

『井深という人は冷静な人で、何事にもけつして興奮しない性格であるから、よく議長に選ばれた。しかし、談、ひとたび白虎隊の事に及ぶと、満面にわかに紅潮し、眼には涙を浮かべて語ったものだ』と。戊辰の役における彼の記憶がいかに強烈であったかがわかる。

(三) 幼年時代に受けた恥辱から、薩長に対する怨恨は大正の初め頃までは消えなかったようである。長州藩大村益次郎の戦略により会津藩は滅亡、君公松平容保は降伏したことを少年時代に見てきた。村田四郎氏（元明治学院院长）が、山口から出て来て明治学院神学部を受験した時、試験員の一人に井深総理がいた。井深は村田青年に目をやって、『君は長州だね、村田蔵六と何か関係があるか』と、村田は『僕の方を睨んだよ』と述懐したことがある。村田蔵六は大村益次郎の幼名である。また、東京神学大学学長であった桑田秀延博士は、同氏が明治学院神学部の学生であった大正の初期に、或る朝、井深先生がニコニコしながら、教室に入ってくるなり『これで会津の汚名はすさがれた』と言って、たいそうな喜びようであったという。それは、その前日、松平恒雄の女、勢津子（松平容保の孫）が、秩父宮妃に決定したことが報ぜられたからである。井深は、薩長が会津藩を朝敵とし、賊臣と呼んだことに対する怨恨がその時まで消えなかったからであらう。

◇井深の生涯と摂理

歴史も個人の生涯も信仰ある者はこれを摂理的に見る。歴史の変遷、個人の運命は人智の測り知れ

ぬ摂理が働いている。井深少年が藩主松平容保のお小姓として君側に侍っていた時、最も砲撃のはげしかったのは東部の小田山方面からであった。この砲撃に加わっていたのは、当時十七歳の大村藩の熊野（福田）雄七であった。この熊野は横浜のバラ門下であり、井深に乞われて明治学院幹事となり、井深総理の女房役として相助け合つて明治学院の経営、教育にあたること二十五年に及んだ。敵味方となつて戦つたことにおいて、イグナチオ・ロヨラとフランシス・ザビエルの關係に似ているではありませんか。

また、井深の母の実家が一家自刃したことは前に述べたが、最初にこの惨劇を発見したのは土佐藩の中島作太郎（信行）であった。十六歳の細布子は、死に切れず虫の息であった。細布子は、「敵か味方か」と訊ねた。中島はその意を察して「味方だ」と答えた。細布子は手探りで脇差しをさがし、中島に介錯かいさくを頼んだ。この中島は、クリスチャンとなり、明治十九年の明治学院創立に参画して最初の理事員となり、井深を助けたのである。中島はのち自由党の副総理となり、明治二十三年、帝国議會が開かれた時、初代の衆議院議長に選ばれ男爵を授けられ華族に列した。

◇井深と英語

井深の英語に堪能であつたことは、教えを受けた者、それを聞いた者の語り草である。明治三十四年頃の国賓、ハワイ皇帝やその他の名士の通訳には多く井深が當つた。神田乃武と共に日本の双壁と称せられたという。神田は明治初年にアメリカに七、八年間留学しているし、井深が留学したのは明治二十三年のこと、しかも一ヶ年であつた。神学書の翻訳も多数あるが、当時、外国における国

際会議で議長の勤まる人は彼を措いていなかったのではないか。外国旅行の際には彼は必ず英語で日誌をつけている。私が学生の頃は井深はすでに隠退してプレジデント・エメリタス（名誉総理）として時々ステッキをつけて白金の丘に見えていたが、アメリカその他外国より来賓のある時は、必ず井深が案内していた。ある時、ハナフォード教授の授業をうけていた時、井深が、アメリカカイギリスかの外国来賓を案内していたが、ハナフォード教授は、「皆さん、井深先生の英語は、あの来賓たちの誰よりも立派ですよ」と言ったことがある。井深から直接授業をうけた島崎藤村は次のように述懐している。（藤村自筆の原稿を読んで、これを廻す）

『故井深先生の英語に精通せられたことは、^{「ア、ア」}齊藤勇君の所感にもある通りで、今更小生の申上げるまでもありません。

学院時代、当時の普通学部四学年の頃、井深先生は「英文学選集」二巻の訳の授業時間を受持たれました。アンソロジイ風に編まれた原書であつたと覚えます。その折の先生の口述は字々句々、実に簡潔適確で、先生が日頃の造詣の深さを思ひ知りました。得るところが多かつたのもあの時でした。井深先生が語学の上の練達は、石本三十郎先生の軽妙な通訳術と共に、当時にあつての双壁とも言ひたく、これは学院内のみかぎらないことでした。』（これは明治学院時報の井深追悼号に寄せられた原稿である）

また、彼の小説「桜の実の熟する時」には次のように「校長」として井深のことを書いています。

〈基督教の倫理や教会歴史を神学部で講ずる学校の校長が捨吉の方の組へも来て時代分けになつた

英吉利の詩と散文とを訳して呉れた。この校長の精確な語学の知識は捨吉の心を悦ばせた」と藤村は回想している。

井深が始めて英語に接したのは十六歳で上京して徳水院に入った時であるが、その塾は間もなくつぶれて、彼が本格的に英語を習い始めたのは横浜に来て修文館に入ってからである。年齢から言えば、今の高校生の時からであるから、語学の学習としては、むしろ遅い方であった。にもかかわらず、前述の如き英語の達人となったのは、恩師ブラウン博士の特別な教授法によるものである。彼の教授法についてここで述べる時間はないが、ブラウンは屢々井深の口の中に指を入れて発音を直したといわれる。日本人に最も発音できないしやthの発音が井深は外人同様に発音できたようである。日本語も会津人はひどい東北訛があるのに、彼には全然訛りがなく正確な日本語を話したという。後年彼は述懐して、「自分に会津訛がないのは英語発音練習のおかげである」と言っている。

◇井深と植村

井深はよく植村正久と比較される。植村は察するに野人風であり、親分肌であったようだから自分も多かつたようだが、井深にはそんな粗野な風はなくて冷いと言われた。卒業生の就職の世話もせず、来訪者を窓越しに見ても声をかけるようなことはせず、表玄関から取次を経なければ面会しなかつたという。このような正しい作法が彼を冷いと感じさせたのであろう。作家の佐々木邦は言う。『井深先生は冷いと人は言うが、自分は温かい人だと今も思っている。自分が慶応に在学していたが家の都合で退学することになり、どこか安く入れる学校はないかと、三田から歩いて白金に来て、垣根から

明治学院の校庭を覗いていると、外出する井深総理が、シルクハットに礼服で通りかかり、私を見つけて事情を聞き、私をつれて引返し、受付に行つて入学の手続きをしてくれた。この一事でも井深先生は実に温かい人であると思つた。」と語つたことがある。

◇会津藩の団結

会津藩の団結は、その後も続き、井深は松平家を中心として、新島八重子、山川健次郎などの親交は続いたようである。新島夫人の米寿の祝詞を述べており、山川とは多少縁続きもあるとかで、明治学院の卒業式にも山川が祝辞演説をした記録がある。菅野権兵衛の追悼式には、いつも井深、山川は出席している。井深の孫にあたる木村知己牧師の姉が会津若松市にあり、一度訪ねたことがあるが、その時、旧会津藩の武士階級をもつて組織している「葵会」^{あおいかい}なるものがあるとのことを聞いた。東京でも会津会が盛大に行われているようである。私は井深関係資料のため度々旧会津藩主松平家の当主松平保定氏（容保の孫、農林中金職員）を訪ね、またその紹介で会津にも行つたりしている中に会津人にされてしまった。私は土佐藩で、板垣退助、中島信行ら会津攻略に加つた藩の者であるが、その事は秘していた。ある時、会津会に招待をうけた。上野の会場に行つた。松平藩公のゲストとして不相応な上座に坐らされた。テーブルを囲んで向き合つて坐るようになった日本間であつた。床の間の前で知名の士が集つていた。私の前の席は空席で誰も坐ろうとしなかつた。「これは、どなた様の席でしょうか」と訊ねたら、秩父宮妃殿下の席であるとのことであつたので、これは、えらいことになつたと、あわてたが、妃殿下はその日は急にご都合ができて、お取り止めとなり、ホツとしたこと

を思い出します。

◇井深の家族

最後に井深の家族関係について私の知る範囲で簡単に述べておきます。

明治十三年、水上せき子と結婚したが、井深との間に二男三女を遺して明治三十一年死別し、明治三十三年、大島花と再婚し、二男がある。

先妻せき子との間に生れた長男文雄は英国の汽船会社ドッドウエル社の技師であった。次男健次は東大医学部出身の医博で陸軍に入り、陸軍軍医学校長、日本赤十字病院長を経て陸軍軍医総監となり軍医中將であった。長女千代は九大総長工学博士荒川文六の妻、次女とよは東京外国語学校教授片山寛に嫁し、三女はるは衣笠病院長医学博士木村良夫の妻となる。後妻花との間に生れた真澄はアメリカに留学中死去、弟清見は蔵前の高工を出て建築技師であった。以上が井深の子供である。

井深の弟勝治は通信院の役人となった。次弟彦三郎は、東亜同文書院の創立に関係し代議士にもなった。静岡県神山復生院に一生涯癩者のために奉仕してナイチンゲール賞を受けた井深八重はその女である。妹たみは真野文二に嫁したが、若くして死亡し、その妹さくが真野の後妻となっている。真野は文部次官から九大総長を経て貴族院議員となり枢密顧問官であった。

〔杉本民三郎著『わが酒杯はあふるゝな里』 ざんげ庵、一九八三年刊より〕

〔※八代子は次女説と四女説がある。なお井深梶之助の『回顧録』では「第二女」となっている。戸籍上は四女である〕

講演・座談会

井深樞之助先生没後六〇年・インプリー館一般公開を記念して二〇〇〇年十一月十一日午後一時〜四時半に記念館二階会議室に於いて開催された講演・座談会及び二〇〇四年十一月二十日午後一時に記念館二階会議室で開催の井深樞之助先生生誕一五〇年記念の木村知己先生の講演要旨を収録した。

井深樾之助先生没後六〇年、インブリー館一般公開記念講演会・座談会

(二〇〇〇年十一月十一日)

『インブリーと井深樾之助』

中島 耕二

昨年、ちょうど今頃なのですが、明治学院の創立に関わる宣教師について、お話をさせていただいて、今回、二年連続という事で、私自身としては、非常に嬉しく思っております。また、明治学院にも同時に感謝申し上げたいと思います。今日は、風がちよつと強いのですが、よい天気にも恵まれました。今日お話しするインブリーが来日した日、これは一八七五年九月二十六日なのですが、ちょうど百二十五年前になりますが、この日も秋晴れのよい天気でございます。インブリーの回想録にも「天気が非常にいい。これは自分を祝福してくれている。」というようだが、述べられております。そういう日に講演できて、大変ラッキーだと思っております。

さて、明治学院は、いわゆるミッションスクールと呼ばれているのですが、これは外国教会の海外伝道局によって創立されたということなのですが、特にその生い立ちは、日本人の教職者、日

本のキリスト教会の教師あるいは指導者を養成するための神学校として、創立されております。従いまして、今日、明治学院大学に神学部はない訳ですが、いろいろ歴史的な理由によりまして、現在の東京神学大学にその役割が担われているわけですが、明治学院がミッションスクールとして、神学教育、つまり教職者養成の学校から始まったということは、明治学院に関係する人々一人一人が、建学の精神として、やはり常に注目しておかなければいけない事実だと思います。昨今、クリスチャンボードとか、クリスチャンコードとか、いろいろ問題になっておりますけれども、明治学院の創立から考えますと、この点は、忘れてはならないことだと思います。

ところで、明治学院の歴史を紐解くということは、非常に私個人としても興味深い事なのですが、これは単に個人的な関心だけではなくて、明治学院が日本の近代史に繋がるといふ、歴史と常に同じ時間軸で時を刻んできたというところに、歴史研究の対象の一つとして考えられるということが、意義があり、興味がある点だと思えます。ご承知のように、一八五三年に、ペリーが浦賀沖に来航いたしましたして、翌年、日米和親条約が締結され、それによつて欧米諸国と日本の接触が始まったわけですが、日本が国際社会の中に引つ張り出されたということから、やがて日本国内で明治維新が起こり、こうした歴史そのものの中に、明治学院の創立が萌芽されていた、芽があったということに、明治学院と日本の近代化という接点があるように思われます。

そもそも、明治学院創立の起点となったのは、十九世紀はじめにアメリカのプロテスタントの諸教会が海外伝道の為に、アメリカンボードという外国宣教師団体を創立し、その運動の一環として、初期

の頃には、インド伝道、あるいは中東諸国への伝道が展開されたのですが、その後、東南アジア、あるいは中国へと発展致しまして、やがて日本へその海外伝道ミッションが到達するという、こういう過程を経るわけです。

日本にキリスト教が、あるいは宣教師が来日できた直接の理由は、皆様もよくご存じの日米修好通商条約、これが一八五八年に締結されて翌年に発効するわけですが、この第八条に「日本にあるアメリカ人は、信教の自由を認める」というハリスの案による条項が設けられて、これによつて宣教師が日本に来日できたということになります。

一八五九年には、アメリカの監督教会、これはアメリカのアングリカン・チャーチで、日本では聖公会と呼ばれておりますが、この教会が、中国在任の宣教師ジョン・リギンス、続いてチャニング・ムア・ウィリアムズという二人を長崎に派遣致します。この教会からの宣教師が、日本で最初のプロテスタント宣教師となります。続いて、十月に入りまして、アメリカ長老教会のヘボンが宣教医として来日します。それから一週間後に、オランダ改革教会のS・Rブラウン及びシモンズ、この二人が横浜に、オランダ系のフルベッキが長崎にと、こういう形でアメリカの三つのミッションが、一八五九年に初代宣教師を日本に派遣し、これをもって『日本の宣教の曙』という風に言われております。このうち今申し上げたアメリカ監督教会、長老教会、それにオランダ改革教会、この三つのうちの二つ、長老教会とオランダ改革教会が、直接に明治学院の創立に携わるわけで、従つて冒頭に申し上げた日本の近代化と明治学院が歩を一にする、歩調を一緒にしているということが言える事になります。

大体、日本にプロテスタントミッションが来日した過程というのは、以上のような経過でございます。

次に、インブリー博士が何故日本に來たのかと、この点についてお話申し上げたいと思います。

先ほど申し上げた、アメリカ長老教会はヘボンを先ず日本に寄越しました。これは当初、ミッションの計画で、日本は中国の文化圏の中にあるという認識が各アメリカの海外伝道局にありまして、中国で布教経験のあるヘボンを選び、且つ宣教医ということで、医療をもってミッション活動を行うということ、ヘボンを派遣しております。同様に、オランダ改革教会も中国で布教経験のあるS・Rブラウンを選び、且つ医師としてシモンズを選び、尚且つ、日本がオランダと唯一交流をしていた西洋の国ということで、蘭学に馴染みがあるので、オランダ語が分かるフルベッキを派遣したと、こういう風に、アメリカのミッションは、どのように日本に対し布教すればいいのかという、ストラテジーと言いますか、布教方針というものをきちんと立てて、その上で宣教師の資格を選び、派遣しているということで、場当たりのただ宣教師を派遣するという方法ではないということが、はっきりしております。因みに、監督教会のリギンス及びチャニング・ムア・ウィリアムズも、中国から直接長崎に派遣されています。こういう点が、アメリカの各ミッションのきちんとした方針というものが反映されているように思います。

このような、初代宣教師が来日して、いろいろとまだキリスト教禁教下、旧幕時代から明治六年までは禁教でございますので、その間に、教育、あるいは医療、聖書の翻訳、辞書の編纂というような

間接的な布教に従事して、その後、二代目、三代目の宣教師として、長老教会からはタムソン、カロザース、ルーミス、ミラーといった宣教師が続々と来日いたします。一方、オランダ改革教会も、初期に三名の宣教師を出したので、その後数は少ないのですが、ジエームス・バラを始め、一応継続して宣教師を派遣するというようなことで、こういった人々の働きによって、主として佐幕系の士族の青年達に英語の指導を経由してキリスト教に触れるチャンスを与え、そういった若者達が、横浜に集まって、先ほどのジエームス・バラの元で一つの教会を成立させます。これが有名な日本基督公会と云うもので、この時に成立した教会は、日本人最初の教会と言われているのですが、実際はジエームス・バラがオランダ改革教会の宣教師でもありませんので、アメリカのオランダ改革教会の一地方教会ということになっております。ただ日本人の信徒達は、自分達の教会ということで、教派主義ではない超教派主義の教会ということを標榜致します。これは、後に教会創立の趣意書にもこのように謳います。しかし、バラやブラウンは、本国のオランダ改革教会にこの教会が所属しているということは、あえて日本人達にそういう説明はしておりません。

こうして、超教派的な形で日本のプロテスタント教会が始まるわけですが、一方で長老教会は、各国の動き等も見て、やはり教派主義の教会を日本に打ち建てるべきだということで、このオランダ改革教会の主宰する超教派主義に対立する形で、長老教会の創立を行います。それが一八七三年のことになります。その中心人物は、横浜ではルーミス、東京の築地ではカロザースというこういった方達が、長老教会を成立させます。

ところが、問題が出てきたのは、超教派主義に賛同する長老教会の宣教師が出てきたことです。その主たる人物は、タムソンです。彼は長老教会の宣教師なのですが、オランダ改革教会の主張する超教派主義に賛同致します。現に、東京に日本基督公会の支部的な東京公会というものを創立させます。これも同じ一八七三年になります。さらに、ミラーという宣教師が長老教会から派遣されるのですが、彼は、フェリスを作った有名なキダーと結婚することによって、彼女の意向もあるのですけれど、オランダ改革教会に転籍致します。さらに問題になるのは、ちょうど一八七四年にあたりまして、独身女性宣教師が長老教会から三人派遣されてきます。パーク、ヤングマン、ギャンブルという三人なのですが、パークとヤングマンはニューヨーク婦人伝道局、ギャンブルはフィラデルフィア婦人伝道局、こういつた別れたところから派遣されてきます。彼女等が、横浜から築地に移りまして、先程申したカロザースの住んでいる築地の六番館に集合致します。そのうちにタムソンがパークと結婚することになります。従いまして、パークは、東京の日本基督公会、いわゆる東京公会の方に移ることになります。ヤングマンも書物を読みますと、タムソンに人目惚れた人だそうで、ヤングマンもタムソンの東京公会に移ります。ギャンブルはギャンブルでフィラデルフィアなものですから、「私は自分一人でやりたい」ということで、日本の長老教会のミッションとはちよつと違ったスタンスになります。そこにカロザースが、自分が長老教会をまとめたいという意向が働きました、その夫人にジュリア・カロザースという方がいるのですが、彼女も、女子教育に非常に熱意を燃やしまして、今日の女子学院の前身を創るわけなのですが、ここに、日本の長老ミッションが大分裂を起こします。タムソン、

ミラー、それにカロザース、ルーミス、こういった中に独身女性宣教師が絡みまして、どうにもこうにもならなくなつて、ヘボンが、「何とかしてくれ」と、再三伝道局に助けを求めます。そこで伝道局は、非常に困りまして、こういった問題を解決できる人材、それからちょうど今まで来日した宣教師が、神学教育にあまり強くなかったので神学教育の出来る人材、この二つの要素を兼ねた人物の色に入りまして、これに該当したのがインブリーということになります。

インブリーは、お父さんが海外伝道局の理事として長期間重要な地位を占めておりましたし、インブリー自身もプリストン大学、プリストン神学校で学びまして、長老主義の言わば本家の教育を受けているということで、人格的にも非常に優れているということが伝道局に評価されて、三つの条件が揃つたところで日本に派遣されます。

当初、横浜に数ヶ月いたのですが、すぐに上京致しまして、日本の長老教会の全体を見回して、やはり問題はカロザースであるということを確認致します。そして、カロザースを一応ミッションから排除するような動きを行います。カロザース自身も問題のある方で、非常に野望に燃えている方で、協調が不得手で、仕事は立派にするのですが、ミッションの宣教師の中での協調が中々うまくいかないということもありまして、最終的には、有名な『ヤソ問題』という、「イエス」をどう呼ぶかという問題の中で、カロザースは中国から来ている「ヤソ」を主張するのですが、一般の宣教師は「イエス」を主張して、最終的には長老教会ミッションの中では、「イエス」をメイン、「ヤソ」は補助的に使つてもよいということにするのですが、カロザースは「ヤソ」が唯一の正式名称であるということ

で、ここで意見が分かれて、結局宣教師の辞任を申し出ます。ミッションとしては渡りに舟ということで、その辞任を即海外伝道局が認めるように運動を行います。その結果、カロザースが辞任致しまして、インブリーは着々と再調整といいますが、長老教会の意見を統一する働きを致しまして、ルミスとかあるいはヘボンの力を借りて、来日二年後に日本基督一致教会というオランダ改革教会と合同の教会を創立するまでに手腕を発揮致します。もともとオランダ改革教会は長老政治の教会です。で、長老教会とは殆ど違和感がございません。それから一八七四年に来日していましたスコットランド一致長老教会、こちらでも長老主義ですので、何ら問題がなく、この三つの教会が合同して一致、それがユニオンということで「一致」とつけるのですが、日本基督一致教会というものを創立致します。この教会に、冒頭に申し上げた指導者、教職者を供給する目的で、東京一致神学校というものが出来ます。この学校の創立にあたりまして、長老教会からはインブリーが全面的な力を発揮し、オランダ改革教会ではアメルマンという方がそういった力を発揮し、それからスコットランド一致長老教会からはマクラレンという方が賛同しまして、この三人が専任教授ということになります。その他、ミラー、フルベッキ、タムソンといった方が講師となります。ここで初めて井深樞之助とインブリーの出会いが生じるわけです。

井深樞之助に若干触れますと、一八五四年、ちょうど日米和親条約の結ばれた年に、彼は会津藩の若松城下で生まれております。五百五十石取りの上士、上級武士の長男として生まれております。お父さんは、有名な藩校の日新館の学頭、いわゆる校長先生をやっておられました、もともとアカデミ

ツクな家庭に生まれて、しかも非常に聡明であつたというふうに言われております。しかし、戊辰戦争で政治背景が変わつたため、彼は学問に意欲を燃やしまして、英学修行のために、当時まだ廃藩置県の前ですが、明治三年になりまして、会津藩の経営する英学校が東京にありまして、そちらに参ります。ところが、会津藩というのは負けた藩でございます。斗南藩として青森の方に転封されてしまいますので、財政が続かなくて廃校となり、その後土佐藩の英学校に転学致します。そこで、千村五郎という有名な英学者ですが、彼の元で英語を勉強致しますが、こちらも土佐藩から会津藩の師弟をあずかるわけにはいかないということで、追ひ出されるような形になりまして、やむなく横浜に行きまして、当時、横浜の修文館という官立の学校がありまして、その学僕になります。英語を勉強して、幸いそこで教師をやつていたS・Rブラウンと出合ひまして、大いに信頼を得て、S・Rブラウンが修文館を辞める時に、彼の自宅で英語塾というか、神学塾が開かれるわけですが、その時に、井深樞之助も助手的な立場でS・Rブラウンの家に入ります。彼から英語を習ううちに、キリスト教に触れて、最終的にS・Rブラウンから洗礼を受け、ジェームス・バラの主宰する先程の日本基督公会の教会員になるということになります。

キリスト教で身を立てたいということになって、たまたまその時に、オランダ改革教会と米国長老教会が合同して神学校を創るということで、横浜から東京一致神学校（築地ですが）に彼がやつてくるわけです。井深はS・Rブラウンから洗礼を受けたような経緯もあつて、オランダ改革教会系の神学生ということになるのですが、その教会からアメルマンという方が明治九年に來日して、S・Rブ

ラウン塾のサポートをしておりまして、当初は、アメルマンと井深梶之助が非常に近い存在で、アメルマンが著作する書物の殆どを梶之助が翻訳したりしました。築地に移った後も、アメルマンの自宅が築地にあったのですが、そこに寄宿してそこから一致神学校へ通うというようになりまして。ところが、その後インブリーと非常に馬が合うといいますが、当時、インブリーの翻訳は原猪作という学生がやっています、インブリーは、どういうわけか日本語を全然使わない宣教師だったので、彼が英語で講義をすると、原猪作が翻訳して学生達に説明をするということをやっていました。そのうち原が神学校を辞めまして、その代わりに、英語に堪能な井深梶之助が代わりを務めるということ、ここにインブリーと梶之助の接点ができるようになります。そのうちに、二人とも似たような性格といえますか、気が合うといえますか、年は九歳ほど違う（インブリーが年長）のですけれども、徐々に恩師と生徒の間柄から、同僚的な立場になっていき、それから後、五十年に渡る深い交際が始まるということになります。この後は、秋山先生が続けていただけだと思います。

井深梶之助とインブリーの関係だけちよつと触れておきますが、一番大事なことは、明治二十三年に井深がアメリカに留学致します。その時に、彼にいろいろと留学先のアレンジをしたのがインブリーで、インブリーのお父さんがアメリカで、井深梶之助を相当面倒見ております。ただ、井深はS・Rブラウンから受洗したということで、神学校はニューヨークのユニオン神学校を選んでいます。プリンストン神学校には行かない形になっています。これは、ブラウンがユニオン神学校を出たという事、それから、比較的超教派の神学校でありましたので、そこを選んだということになります。

それから、インブリーは、明治二十六年にアメリカに一時帰国をしてしまいます。その間に日本で有名な「日本の花嫁事件」田村直臣の書物ですが、それから新神学が入ってきました、加藤覚等々のそういった新神学の問題に、日本基督教会は直面します。その時に、井深はインブリーにどんだん手紙を書いて、インブリーのアドバイスを受けます。その結果、四年経つのですが、再度インブリーが来日するというきつかけになります。それから、後に秋山先生が触れられると思いますが、文部省訓令十二号、この時もインブリーが井深梶之助を叱咤激励しております。それから、全ての学院の拡張計画、これについても井深梶之助から相談を受けたインブリーが、ミッションと交渉をして、例えば、この記念館、それから、白金の土地の購入費、後には向かいの礼拝堂の建設資金、これらは全てミッションから費用をいただいているわけですが、その仲介役は、インブリーが殆どやっております。

それから、これは、インブリーが黙っていてほしいという、井深宛ての手紙がありまして、実はいったんアメリカにインブリーは帰りまして、これは子供の教育の為にアメリカに帰るのですが、宣教師という商売は非常に厳しい商売で、一度祖国を離れますと、アメリカに戻った時に、再就職口というのは非常に厳しいのです。実に孤独な商売です。インブリーは四年間、著名な方でしたので、プリンス頓大学の講師的なことをしたり、あるいはオランダ改革教会のニューブランズウィック神学校へ行って講演をしたり、アメリカの各地の長老教会で日本の事情を説明したりしていたのですが、牧師の職、あるいは海外伝道局の職員の職というものにありつけません。そこで、インブリーは井深に手紙を出しまして、日本で機会がないかという相談を致します。井深の方は、渡りに舟で、非常に先

程の田村の問題、あるいは新神学の問題で、日本が揺れていましたので、ぜひとも帰ってきてほしいということ、うまくこの話が成立致しまして、インブリーが再来日するわけです。来日する前にこういった話が公になるのを、インブリーが嫌って、井深の胸の中に収めておいてくれという、こういう手紙を出しているのです。この辺が、最も信頼し合っている同士の個人的な繋がりであったと思います。それが結果的には、明治学院をインブリーと井深樞之助が二人三脚で築き、二人の性格が非常に出た学校と言われています。石橋を叩いても渡らない学校という風に言われているのですが、慎重で、あまり、例えば青山学院のように拡張拡張を図るような学校ではないというところが、この二人が基礎を築いた所以ではないかと、これはいまだにそれが続いているのかも知れませんが、何そのようなことで、日本にプロテスタントが宣教されたプロセスと明治学院の創立、インブリーが何故来日したのか、彼がどういうことをしたのか、井深樞之助との繋がりは、このへんを概観しまして、私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

『井深梶之助先生と明治学院』

秋山 繁雄

井深梶之助先生は、明治学院の前身の一つ東京一致神学校の第一回の卒業生で、明治十三年一月、二十七歳で東京麹町教会の牧師に選ばれ、翌十四年九月には、母校の助教教授に迎えられた。明治十九年、東京一致神学校、東京一致英和学校、神田の英和予備校の三校が合併して荏原郡白金村の現在地に明治学院を設立するにあたり、理事員の一人に挙げられ、土地の取得に尽力し、校舎の建設、寄宿舎の建設がなり、明治二十年九月に明治学院普通学部が開校された。

明治二十二年十月、ヘボン博士が明治学院初代総理に選ばれるや、井深先生は副総理に挙げられた。そして井深先生は、翌二十三年八月から米国ユニオン神学校に留学し、教会歴史を専攻し、二十四年九月に帰国した。同年十月十三日、ヘボン博士は老齢のため総理を辞任し、井深先生は明治学院第二代の総理に選ばれた。以来大正十年に至るまで、第二代総理として三十年間にわたり学院の経営と教育に尽瘁し、常に学院の歴史と共に歩み、学院の歴史に大きな足跡を残した。学院の今日ある基礎形成に井深先生の勤労が多であったことは、周知の事実である。

また井深先生は、学院のためのみならず教会の発展のために尽力、東京、横浜はもとより、全国各

地に巡回伝道し、さらには、朝鮮、満州、中国、台湾はもとより、欧米諸国に幾回となく出張、世界宣教会議、世界YMCA会議等に出席、その優れた英語力を生かして大いに活躍した。また明治二十二年発足の基督教夏期学校では、幾度か校長に選ばれ、自らも幾度か講演を行った。

井深先生が総理になった明治二十四年の六月には、普通学部の子生では島崎藤村、馬場孤蝶、戸川秋骨など二十八名の卒業生があり、神学部では多田素、一名であった。二十五年以降は、普通学部の卒業生は年々減少していった。これは欧化主義の衰退とともに、国家主義、国粹主義の隆盛、さらには明治二十七、八年の日清戦争の影響等によることは明らかであるが、明治学院普通学部には、官立の上級学校への進学の道が開かれていなかったことと、徴兵猶予の特典がなかったことにもよる。そこで明治学院は明治三十一年、普通学部を中学校令による尋常中学校の資格をえて、明治学院尋常中学部と改称して徴兵猶予の特典を受けると同時に上級学校への進学の資格をえたのである。

しかるに、明治三十二年八月三日に文部省訓令第十二号が公布された。すなわちその訓令とは、「一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最モ必要トス、依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許サザルベシ」というものであった。学院としては、もしこの訓令に従うならば、宗教上の教育と宗教行事を一切行なうことができなくなり、基督教主義を基本とする学院の精神は否定され、学院の建学の精神の支柱を失うことになる。

これより先、井深先生は七月十七日に神戸の関西学院において開かれた第十一回基督教夏期学校に

において「生涯の事業選択法」につき講演し、その他各種の行事に出席していたのであるが、八月五日急遽帰宅し、文部省訓令第十二号問題に取組むことになった。緊急理事会を開き協議の結果、先ず普通尋常中学部の資格を返納する手続きをとった。そこで井深先生らは基督教主義諸学校と連携し、この訓令十二号は日本帝国憲法二十八条に明示した信教自由を制限するものとして強く反撥し、あくまでも基督教主義の使命を死守しようとした。この当時の井深先生の日記を見ると、井深先生がこの問題のために日夜奔走苦心している様子をまざまざと知ることができる。すなわち基督教主義諸学校の校長達あるいは宣教師達とたびたび会合、文部省当局と幾回となく面会、さらには総理大臣にも面会し、訓令の延期、撤廃を求めるのであるが、当局としては一たび出した訓令であるからその延期、撤廃には応ずることができなかった。しかし井深先生たちの奮闘は明らかに効果があり、この訓令問題は次第に変貌して、明治学院普通学部は徴兵猶予と上級学校への進学の資格取得へと変わっていった。かくて明治三十三年七月九日、明治学院普通学部は文部省の認定する中学校と同等なることを認められ、徴兵猶予の特典を与えられ、また上級学校へ入学する受験資格を得るための中学校と同等以上と指定された。かくて井深先生の文部省に対する戦術的攻撃はインブリーなどの強硬論に支えられて、一応の成果をあげて決着することができた。しかし、井深先生にとって文部省訓令第十二号は信教の自由を制限するものであり、不当であることを強く認識して、会津人特有の粘り強さをもって、のち折ある毎に文部当局に対しその撤廃を求めつづけた。しかしこの訓令は日本が太平洋戦争に敗れる昭和二十年まで生き続けたのである。

既に述べた如く、井深総理は明治二十四年から大正十年まで約三十年間、明治学院の経営、教育に当たりその發展に尽力するのであるが、対外関係、特に協力ミッションとの関係には、ウィリアム・インブリー博士、また学内の問題、特に学生との問題には、熊野雄七という、よき内助者に恵まれたことは、井深先生にとり、この上ない幸せであった。したがって井深先生は日本基督一致教会、さらには名称の変った日本基督教会の中にあつて存分な活躍をなし、日本基督教会の大会議長を務めること十二回、東京第一中会の中会議長になることも多く、日本基督教会においては重きをなした。明治十九年から明治二十三年にわたる日本組合教会と日本基督一致教会の合同問題では、結局組合教会の交渉打ち切りによつて失敗に終るのであるが、当時日本基督一致教会の合同問題としての井深先生の活躍には目覚しいものがあつた。また既に述べた如く、東京、横浜の諸教会からの説教依頼は多く、全国各地の諸教会への巡回伝道もしばしばであり、また明治十年代であるが、来日した諸外国の名士の演説の通訳者の一人は井深先生であつた。その名通訳振りは、聴衆に大きな感動を与えた。またその頃、アメルマン博士やインブリー博士の神学書を次々に翻訳し、東京一致神学校の教科書として使用した。既に述べた如く、明治二十三年八月から翌明治二十四年九月までの米国ユニオン神学校への留学は、井深先生の目を世界に向けて開かせた。明治三十年五月から九月に及ぶ米国ノースフィールドに開かれた万国学生基督教同盟会議の出席、会議では副議長に選ばれ、議長不在のため議長を務め、その会議後、明治学院基本金募集に奔走した。

明治三十二年五月には清国基督教教育会の招きに応じて上海教育協会の会合にて「日本政府の教育

につき」の題で演説、その他種々の会合に出席して六月に帰国した。明治三十五年二月には、米國ラトガース大学より神学博士の名譽学位を贈られた。

明治三十八年三月、フランスのパリで開かれた万国基督教青年会同盟大会は創立五十年記念大会であつて、期間は二月二十六日から三十日までで、井深先生は日本基督教青年会を代表して演説をした。その後五月、オランダのザイストに開かれた万国学生基督教青年同盟大会において講演をなした。時恰も日露戦争の真最中であつたので、井深先生は、フランス、オランダの外、イタリア、ベルギー、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、スイス、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、イギリス等欧州各地を巡回して各地の青年会及び教会等において日本のために演説した。帰路米國に渡り、明治学院のために基本金の募集をした。また、ヘボン博士、ノックス博士、アメルマン博士など、かつて明治学院のために尽力した宣教師たちを訪ねて、翌明治三十九年二月に帰国した。

明治三十九年には夏休みを利用して、井深先生は、満州、朝鮮へ巡回伝道をなした。先ず大連、旅順に行き、北行して營口、さらに奉天に至り、帰路は義州、平壤を通り、仁川、釜山等に伝道し九月九日帰国した。

明治四十年三月七日、神田青年会館において、井深、インブリー、ジョン・バラ、ワイコフの明治学院四教授在職二十五年祝賀会が開かれ、井深先生はその席上、明治学院大学部設置の抱負を述べた。

明治四十三年五月には、英国エジンバラで開かれる万国宣教大会に日本の基督教を代表して出席するため神戸より船に乗り、十日大連に上陸、北公園のクラブで満鉄会社練習生に講演、また婦人會に

て「初代教会における女信徒」の題で講話、教会にて「キリスト教の使命」の題で演説した。それから一路シベリア鉄道を西行し、モスクワ、ベルリン等の名所旧跡を見物の後、英国に渡りロンドンにても大英博物館、ウエストミンスター寺院など名所旧跡を見物、六月十三日にエンジンバラに到着した。万国宣教大会においては数回の講演をなし、総務委員にも選ばれ、重要な会議にも参与した。その後米国に渡り、明治学院のため資金の募集につとめた。大正元年十二月十八日、井深先生は日本基督教会伝道局の用務で満州へ出張した。

大正二年五月には、米国で開かれる万国学生基督教青年会及びスイスのチューリッヒに開かれる万国日曜学校大会に出席するため、横浜港よりコオリヤ号に乗り米国に向け出航した。五月十三日、ホノルル着。井深先生は、服部綾雄、江原素六と共に中央学院にて、当時アメリカ・カリフォルニア州において起こっていた排日問題につき演説をした。六月二日、モホンク湖畔の万国学生基督教青年同盟会会議では議長にあげられ、開会演説をなした。六月十二日、ロックフェラー財団の書記ジェローム・グリーンと会見、基督教大学の性格につき貴重な忠告を受けた。六月十六日、セベレンスに面会、七千五百弗を明治学院に寄附するとの約束をえた。六月十八日、添田寿一らと共に米国国務卿ブライアンに面会、加州問題（カリフォルニア州の日本人迫害問題）につき陳情し、「彼より友情には最終的ということはない」との言葉を得る。また翌十九日には珍田駐米大使の紹介により、ホワイトハウスにウイルソン大統領を訪ね、右問題につき善処方を懇請した。大統領からは、「必ず正義に由つて事を処理すべし」との回答を得た。六月二十六日より三十一日までの万国委員会に出席、七月、スイ

ス国チューリッヒ市に開催された万国日曜学校大会に出席し、数回の演説あるいは講演を行った。この折、万国日曜学校の副議長にも推挙された。なお井深先生は小崎弘道と共に次期大会を東京に開くことを招聘した。八月二十三日、約四ヶ月にわたる米欧の旅を終えて帰国した。

大正三年三月二十九日には、朝鮮開城に開かれる朝鮮青年会大会に出席するため出発、同大会に出席し、また朝鮮各地において説教講演をなして四月十日帰宅した。この時、朝鮮滞在の外人宣教師から尹致昊（ユンチホ）らの囚人恩赦のために尽力せられたいとの依頼を受けた。

この尹致昊らに関する事件というのは、明治四十三年八月に韓国は日本に併合され、韓国を「朝鮮」と改めて、日本は朝鮮総督府を京城に置いた。同年十二月、朝鮮総督寺内正毅を暗殺する計画があったとの理由で朝鮮の教会指導者や愛国運動家が多数検挙された。すなわち同年十二月二十七日、寺内総督が鴨緑江鉄道竣工式に参加のため、宣川駅に一時下車、宣教師 G・S・マッキューン師と握手するのを合図に、基督教徒が寺内を暗殺する陰謀があるとして、基督者を中心とする民族指導者、約七百名が検挙された。全基徳牧師四名は獄死、百二十三名が起訴され、有罪判決を受けた者百五人（うち基督者九十六人）、これを「百五人事件」という。尹致昊は首謀者とされ、百五人は十年から五年の刑を宣告された。ところが事件の虚構性が暴露され国際世論の高まりの中で、大正四年までに全員が釈放された。これが事件のあらましであるが、井深先生は帰国中の朝鮮総督寺内正毅を訪問面会、尹致昊らの恩赦を請願した。また五月二十一日、井深先生は寺内正毅ならびに大隈重信を訪い、重ねて尹致昊らの大赦を願った。大正四年一月、井深先生はこの目的のために朝鮮に渡り、朝鮮総督府に

寺内を訪い、昨年昭憲皇太后崩御につき特赦の恩典が受けられるよう請願した。かくて井深先生の願いがかなえられて尹致昊らの釈放となった。もちろん昭憲皇太后の崩御があつての特赦であるから、井深先生の請願のみということではできないが、井深先生の奔走も空しくはなかつたであらう。

井深先生の大正六年に書いた履歴書を見ると、その当時従事している主なる仕事は次の如くである。

- 一、明治学院総理兼神学部教授並びに同財団理事長
- 二、日本基督教青年会同盟委員長兼同財団理事長
- 三、日本基督教主義教育同盟会長
- 四、日本全国基督教會同盟副会長
- 五、日本全国協同伝道委員長
- 六、万国日曜学校同盟副議長

大正六年十一月三日、明治学院創立四十年記念式にて井深先生は三十五年勤続者として記念品を受けた。

以上

井深先生が明治学院第二代の総理として三十年間の長きにわたり、総理の職責を全うし得た要因にはいろいろあるが、その主なものは、ミッションの宣教師たち、さらには日本人事教職員などに尊敬され絶大なる信頼をよせられたことであらう。東北人特有の隠忍自重にして実直な人柄に、会津

武士、それも重臣格の家柄から生まれた重厚さがあり、深い信仰に基づく謙虚さの中にも人を圧する威厳をもつていた。しかも日本基督教大会議長を十二回も務め、中会議長にも何回か選ばれる人望と信頼には比類のないものがあつた。その上既に述べた如く明治学院においては、宣教師としてはインブリー博士の如き肝胆相照らすよき相談相手に恵まれ、日本人としては女房役としてこの上ない熊野雄七の如きよき幹事に助けられたことは、井深先生の人柄にもよるが、まことに幸運であつた。明治三十二年の文部省訓令第十二号に対して、井深先生が終始一貫攻撃的姿勢を崩さず文部省当局と対決、学院の基本である基督教を守り抜いたのもインブリー博士らの協力があつたからである。

しかし、大正七年秋の学院理事会において井深先生は初めて理事の選から外れたことは大きな打撃であつた。この時はつきり自らの時代が去りつつあることを自覚した。翌八年には、熊野雄七が老齢のため学院を去り、インブリー博士もまた年老いて隠退帰国を待つばかりになつていた。井深先生は大正九年、学院理事会議長宛に「私は多日熟考の結果明治学院総理の職を辞すべき時期の到来した事を自覚致しまして、茲に謹んで貴下を經由して理事会に辞表を提出致します。．．．」と辞表を提出、大正十年三月をもつて総理を辞し、名誉総理となつた。神学部教授は大正十三年まで勤めた。

大正十年三月、井深先生が明治学院総理を辞任するや、明治学院は、これまでの多年にわたる功勞に報いるために白金三光町の敷地に新築した家を提供した。大正十二年、元來健康に恵まれ病氣をしたことのなかつた井深先生は、日曜学校世界大会を東京に開いた時の過勞などから、突然軽い脳溢血で倒れた。しかし約一年の臥床静養の結果、不死鳥の如くよみがえり元氣を回復した。

大正十三年五月、書家として有名な秋葉省像に入門し、翌十四年九月、秋葉の推薦により、ヨハネ伝四の十四により湧泉の雅号を定め人の依頼による揮毫を許された。井深先生の雅号湧泉の語源は「しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」である。したがって以後多くの人から揮毫を頼まれ、快く揮毫に応じた。この年一月八日、親友植村正久急逝、井深先生はその死を悼み、一睡もできず、日記の欄外に「巨星落つ寒氣身にしみ眠られず」と記した。

またこの年六月、ハワイで開かれた汎太平洋問題協議会に妻花子と共に出席、約一ヶ月滞在した。またこの年「教友七十歳以上の会」すなわち「七十路会」に出席、以後十年以上も続いたこの会には進んで出席した。

大正十五年八月、自らのこれまで生きてきた人生を回顧して、「回顧録」を書き始める。なかなか筆が進まず、一、二年を要したであろうが、未完成に終わったのは惜しまれる。『明治学院五十年史』の執筆者鷺山弟三郎「※」の質問に答えて、学院の起源沿革等について大略を述べている。また井深先生は、この頃井深家の系図を書くために祖先の残した資料を用いて苦心の末に書き上げる。昭和五年、明治学院神学部は学院から分離、東京神学社とともに日本基督教大会所属として日本神学校が設立開校されるのであるが、数年間にわたり井深先生は陰にあつてたいへんな尽力をする。井深日記を見るならば、その活躍の状況を知る事ができる。

昭和四年、三男真澄が米国留学中に死去する。この年四月十四日、湘南海岸逗子披露山に別荘壺中

庵を新築する。この壺中庵は壺中の天からきており、出典は後漢書で、その意味は俗世間を忘れさせる別天地ということである。以後たびたび静養に来て、正月もここで過ごすこともあった。昭和八年、井深先生の四男清見は、三谷民子を介して鎌倉雪ノ下教会長老児島三郎の娘由三子と結婚した。

昭和九年六月、井深先生は病再発するが、臥床三ヶ月くらいで全快する。そして昭和十年頃から、大儀見元一郎、児島三郎と和歌の交換をして楽しむ。しかし昭和十三年の冬より病床の身となり、四年の五月には一時重態となり、結局快方に向うことなく昭和十五年六月二十四日、脳膜下出血のため午前十一時死去。享年八十七歳であった。葬儀は二十六日午後三時、明治学院礼拝堂において明治学院葬により盛大に行われた。

〔※弟三郎と第三郎と両方あるが、『明治学院五十年史』執筆当時の昭和二年までは「弟三郎」、それ以降は「第三郎」と表記するのが正しい。(戸籍係の誤りで「第三郎」が「弟三郎」になってしまった)〕

『井深梶之助没後六十年記念』 座談会

木村 知己

松崎百合子

表 満寿江

(進行) 秋山 繁雄

秋山 はじめに、木村知己先生にお孫さんとして井深先生をどのようにご覧になっていらっしゃるか、その辺から始めたいと思います。

木村 木村でございます。先程、中島さん、また秋山さんから、井深の公的な側面について人物像を描いていただいた訳ですけれども、公的な人物像の背景にあります私的な生活の側面から、幾つかお話を申し上げたいと思います。私は井深梶之助

に関しまして、三つの側面からその理解が出来ると思います。一つは、ご存知の通り一九四〇年に井深梶之助が病没しますまで、白金三光町にありましたセベレンス館という学生の寄宿舎のすぐ横の日本家屋で晩年を過ごしておりました。井深梶之助には四人の息子と三人の娘がおりました。長女は千代(千代子)で九州大学総長となった荒川文六に嫁ぎました。表さんのお母様になる方です。それから二番目が、豊(豊子)と言いまして富士見町教会会員で、後に外語大学の教授をしており、亡くなられた昭和天皇の英国での通訳をしたりした片山寛で、有名な「Katayama Reader」を作った片山寛に嫁いでおります。それから三番目が私の母の春(春子)です。これは医師であった木村良夫に嫁いでおります。私どもは白金教会の隣に家がありました関係で、晩年の祖父の往診などに私はついてまいりました。またいろいろ届物をすること、しばしば祖父に会いましたので、晩年の祖父の生活を見ることができました。また、「壺

中庵」の話がありました。逗子の披露山の中腹に「壺中庵」という別荘を建て、そこで夏冬を過ごしておりました。そのため、私どももまた祖父の家のすぐ下の所に別荘を建てまして、祖父の健康の管理に父が当っておりました。そのようなことで、祖父の晩年の生活を私どもは近くで見えていました。二番目に、私は先程ご紹介がありましたように牧師になりましたから、先輩の牧師からあなたのお祖父さんはこういう人だったと、しばしば井深梶之助の人物像を聞かされることがありました。なるほどと思う点がありました。三番目に、私の姉が会津の医者に嫁ぎまして、会津に五十年住んでおります。その関係で、私どもはしばしば会津に参り、祖父の幼少時代、そして祖父が会津を追われていく時代のことなどを参ります度毎に知る機会をもちました。また、野口英世が受洗した会津の「若松栄町教会」には、いろいろと資料が残っております。当時の会津の様子や、祖父の生育歴など、或いは「幼児体験」などを、「日新

館」等その他を見ながら調べてみました。大変興味を持ちました。私は只今高齢福祉関係の仕事をしていておりましたが、高齢者の持つ「生育歴」の重要性、また「幼児体験」について関心がありますので、祖父の生活に關しても申上げてみたいと思います。

一つは、一九四〇年に八十七歳で祖父が亡くなります頃、私どもは白金三光町の家に行きました。優しくてあたたかいお祖父さんでした。けれども、時々非常にきついところがありました。たまたま誰かが置いていった漫画があったので、それを見ておりましたら、取り上げられて、「早く帰れ」と、叱られました。非常にそういう点で厳しい祖父でございました。人柄としては、大変クールな点が強い祖父で、私どもは恐いお祖父さんでもありました。

ところが、ある時私が薬を届けに参りました。その当時は祖父の前では、ちゃんと足を折って座り、足を出して座るということは絶対許されませ

んでした。きちんと座っておりましたら、靴下に穴があいておったのです。そうしましたら、祖父が「お前さんは『天保銭』を持っているね」と、言われたのです。私はその時は何を言われたのかさっぱり分かりませんでした。そのまま家に帰ってきて母に「お祖父さんがあなたは天保銭を持っていると言われたのは、あれは何ですか」と聞くと、母が「また言われたね」と言いました。『天保銭』というのは、大きな穴のあいた明治期のはじめまで使っていた通貨だそうです。見たことはありませんけれども、祖父は多分その天保銭を使って会津から出てきた時の生活だったのでしょう。穴のあいていることを『天保銭』と言うのだそうです。言い換えれば私に言うと同時に、私の母に対する叱責でもあったし、そういう面では大変祖父は厳しい人でした。

しかし、私どもが参りますと個人的には大変優しく、いろいろな点でよく話をしてくれました。大変興味がありましたのは、逗子ではすぐ下に住

んでおりますので、夏休みには、いつも朝起きますと、母が祖父の所までいろいろなものを届けさせて、必ず挨拶をするようにと言われました。朝食の前ぐらいに、山の上まで駆け上がって行きます。ずらりと兄弟が並んで祖父の食事をしているところの、ベランダの外側から「おはようございます」と、みんなで挨拶をするようにしております。その時びっくりしたのは、昭和のごくはじめでございますが、朝はいつもパンのトーストと紅茶の食事をしておりました。その当時、たいていの家は味噌汁にご飯というのが定番だったので、私どもは大変その祖父の朝食が珍しく、興味深くて、朝の挨拶に行くよりも、パンを食べている姿を見に、私どもはよく登って参りました。ところが、そのパンは、母によると、銀座の木村屋からわざわざ取り寄せていたそうです。随分贅沢なことをしていたと思うのです。ある時、ジャムをつけているのかと思ったら、茶色いものをつけているのです。私は帰ってきて母に、「お祖父さんが何

か茶色いものをつけていた」と言う、母は、「それは言っちゃいかん」と叱られたのです。何かと
思つて、後でよく聞いてみましたら、お味噌に蜂蜜を混ぜてつけて食べていたそうです。アメリカで大変モダンな生活をしていた割には、案外会津の「幼児体験」というのが消えてなかつたのだなと、つくづく思いました。

その祖父がクールであつたということについて、先輩の牧師達から、幾つかの批評を聞きました。富士見町教会の島村亀鶴牧師が、「木村さん、私が牧師になつたのはあなたのお祖父さんのためだよ」と。島村先生はご存知の通り高知、土佐の出身で、初めて東京に出てきたとき、高知の牧師のすすめで、明治学院への紹介状を持って井深樞之助に会つたそうです。その時、紹介状を渡して「島村です」と言うと、「あなたが島村さんですか」と言われたそうです。当時、学校では「島村」と、呼び捨てにされていたのに、明治学院の院長の方が、「島村さん」と呼ばれたのに、びっくりすると同時

にこの学校で勉強しようと思つて神学科に入つて、とうとう牧師になつたと。「井深先生は「さん」と言つて私の人格を認めてくださった、それが自分が牧師になるきっかけだつた。井深先生はその点では、非常にジェントルマンでした」と。島村先生は「わしゃ、田舎者だからね」と言つて、大変井深のジェントルマン的な姿に憧れたということを話しておられました。

ところである牧師は、それとは対照的に、「井深先生はジェントルマンで、非常にクールな方でした。だから井深先生には、弟子が出来なかつた。たくさん教えられた人はいるけれども、弟子は出来なかつた。それと対照的だつたのが、植村正久だつた」と。植村正久と井深樞之助を対照して、こういう話をしてくださった方がいました。ある人が自分の牧会に悩み悩んで井深先生の所に行つたら、「ああ、そうですか。私は十五分間時間がありますから、お話を聞きましょう」と、こう言つて話を聞いてくれたそうです。ところが、何だか

十分な話が出来なかつたので、また植村正久の所へ行つたそうです。植村正久はちようど神学校の授業に行こうとする間際だったので、「牧会は大切なことだ。君、ちよつと待ちたまえ」と言つて、わざわざ聞こえる所で「今、大切な相談があるから、三十分学校に行くのが遅れるから」と言つて、電話をかけたのだそうです。その方は、以来植村正久にすっかり心酔したそうです。植村正久と井深梶之助を対照したい例ではないかと思うのです。また、あるYMCAの方が、このような話をしてくれました。井深梶之助は、早くから頭が薄かつた。そしてYMCAの重要な役割を果たすと同時に、よく会議のチェアマンとして議場を捌くのが上手だつた、それは、クールだつたからでしょう。その様子を見て、YMCAにおつた一人の方がこう言つたそうです。「いぶかし（井深氏）や青年会に禿頭」と言つて茶化したという話をしておられました。このあたりから、井深梶之助の一つの側面がよく分かると思います。ただ、井深梶

之助のこうした生活の中には、「幼児体験」が非常に大きかつたことと同時に、生育歴の中の幾つかの重要な体験がありました。

それは、井深梶之助が最初に父と共に「戊辰戦争」の戦いに参加したことで、越後の小出島の戦争に出会うわけです。その時は、「日新館」の学生として行くのです。薩長軍と会津軍が始めて小出島で戦いをして、相当な犠牲者が両方に出ます。このときのことは、後の記録に出ています。井深梶之助は、近藤勇が使つていた鉄砲を持参していたとのこと。そこで、最初の敗戦を経験します。そのときに、戦場となつたお寺には、薩長軍と会津軍の両方の戦死者が一緒に埋葬してあります。「小出島戦争」百二十周年の時に、両方の遺族が招かれて、法要が行われました。その時に、私はそれに立ち会いました。会津が敗れた時の戦いの悲惨さ、そして敗れてから六十里越えという峠を越えてはじめて会津まで逃れるという敗戦を経験し、井深梶之助の少年時代の最初の体験です。

これは、本当に悲惨な体験だったそうで、食べるものもなければ、しまいにはわらじがなくて、裸足で悲惨な姿で会津まで辿り着いたそうです。その悲惨な体験が、後に、修文館の学僕生活で、貧しさのために寝る布団もなく、新聞やボロをまつて生活をしている時の記録がありますが、その時の苦しみに対して、あの小出島の敗走のことから考えれば何の苦しみでもないと言っていたそうです。それ程、最初の敗北の時の苦痛というものが、ある意味で井深梶之助を非常にクールにしている原点が、そのあたりにあるように思われます。それ以前は井深梶之助は、ご存じの通り、日新館の館長の子供として、秀才といわれ、誰からも尊敬を受けて生活をしていたものですから、本来ならば人々の上に立つことが出来るのですが、小出島の敗戦という一つの幼児体験が、後に忍耐強くまたクールな性格の原点になっていったと思われれます。これらのことも、彼、井深梶之助の原点です。

秋山 ありがとうございます。井深先生のお人柄をよくお話いただきました。大変ありがたく思っています。もっと続けてお話をいただきたいと思うのですが、次は、松崎百合子様には花子様のことにつきまして、思い出のあるお話をいただければと思います。

松崎 私は、花子お祖母さまとはある時は大変親しく、ある時は全然関係がなく、最後の頃に井深の所で花子お祖母さまと一緒に見ておりましたが、断片的なことでお恥かしいのですが、覚えておりますことをお話させていただきます。このような機会をいただき、約五十年ぶりに懐かしい花子お祖母さまの記録を纏められた本を読ませていただきました。知らなかったことがたくさんあり、正しく知りました。さらに日本の戦後のとても厳しい時期を約三、四年に亘って同じ屋根の下で、互いに助け合いつつ、私はたくさんのことをお祖母さまに教えていただきました。その時のことを、感謝をもってお話させていただきます。

はじめに、井深花子お祖母さまの略歴を申し上げます。今、弟の知己より、祖父のことをお話致しました。その代わり、私は花子お祖母さまのお話をさせていただきます。出生は、慶応元年二月四日。天城小学校卒業後、東京女子師範学校に入学の希望があつたのですが、ご自分のお母様が病氣にて機会を失い、家事を助けていたために、しばらく学校から離れていらつしやいました。そして明治十七年に英和女学校、後の神戸女学院に入院なさいます。卒業後、鳥取の英和女学校の英語教師におなりになりました。明治十九年、神戸組合教会で松山牧師より受洗されています。その間、宣教師の許で医療事業に従事し、渡米し勉強することを勧められ、明治二十四年に米国のマサチューセッツ州マウント・ホリヨーク・カレッジへ入学。数学、自然科学を専攻されました。帰国後、神戸女学院理化学部の教授として明治三十二年の十二月まで奉職なさいました。明治三十三年の一月、子供が五人もいる井深家に嫁がれま

した。後妻となつていらしたということでございます。この年の三月より家事の傍ら週三回、東京の女子学院に奉職、三十余年勤務なさいました。さらに東洋英和女学校に物理、化学を十四年教えていらつしやいました。下田歌子女史の実践女学校にもいらつしやいまして、物理、化学、英語を教え、さらに聖書のクラスも作り、数名の求道者も導きました。関東大震災後、一時大妻高等女学校で教鞭をとつていらつしやいました。今の高輪教会、その当時は台町教会と言つていましたが、その日曜学校の先生もなさつていらつしやいました。私もその姿を見て、白金教会と（鎌倉）恩寵教会で三十四年間日曜学校の先生をさせていただいて、自分の姿と祖母の姿を重ね合わせながら、お祖母さまはどんな気持ちをなさつていたのかなと思つたことがございました。大正七年、東京女子大学設立より大正十四年まで理事として協力なさいました。学校外としては、婦人矯風会の支部長として、また神戸女学院につきましては、理事

として創立以来昭和十八年までご奉仕なさいました。その後、逗子の海の見える小高い地へ家を作りになって、お祖父さまと静かな老後の生活を送られました。こういったところが、大体のお祖母さまの人生の概略でございます。

その次に、花子お祖母さまと私の思い出ということで、私事になりますが、よろしくお願い致します。井深のお祖父さま、お祖母さまが、明治学院の近くに住んでおられた時、木村一家、今申しました井深家の三女春子の嫁いだ先でございますが、私たちの家族は、目黒の駅の近い所に住んでおりました。家から恵比寿の方に向かっての長者丸のところに単線の電車が引かれていて、単線のレールの枕木をポンポンと飛びながら、白金三光町のお祖父さまお祖母さまの家へ日曜日に行くことは大変楽しいものでした。兄と私と妹で遊びに行きました時、途中電車が見えると傍の草原に急いで逃げて、その電車が通過するのを待ち、またお祖父さま達の家に行きました。随分な冒険で、

今だったら大変だったろうと思いますが、当時はのんびりしたもので、電車の窓から手を振っている方に、一生懸命手を振ったりしました。いつも、お祖父さまはいらしても、お祖母さまは、何かいろいろなお仕事があったので、ちよつと顔をご覧になってから「おやつだけでもらつて帰りなさいよ」とおっしゃってくださって、そのことが今も記憶の中に残っております。

それからまた、お祖母さまは、学校のこと以外の婦人矯風会の支部長、理事長と多忙の中にお勤めになられました。夏が近づくと、浴衣の小切れを束ねた見本を持っていらして、「知人の方にまわして、浴衣の反物を買ってくださる方を紹介してくださいよ」と、よく母に言っておりました。「なんでそんな浴衣を。このお祖母さんは学校で勉強を教えていらつしやるだけでいいのに」と私は思いました。後でその売り上げは、困難な家庭の人々の生活費に使われたことを聞きました。それから、愛隣団と書いてあるのは、これは、名称が

よく分かりませんでした。生活に困っていらつしやる子供達の衣類のために私達が着ました洋服や、近くの方々の洋服を手入れして、四季折々に、困難している家庭へ届けていました。そのために大きな袋がいつも暖炉の傍にあつて、「あつ、これ愛隣団の子供にあげるから置いておいて、そこに」と、おっしゃっていらつしやいました。今、その時のことが目の前に思い浮かびます。玩具や文房具の類も集めて、クリスマスや四月の新学期に届けられていらつしたということも聞きました。

現在、私が感謝しているのは、花子お祖母さまの推薦で、私の母も伯母も普連土女学校へ薦められたことです。伯母さま方は、私の母も、姉妹も推薦されました。それがまた私の孫、ひ孫へと続けられ、何代も生活の基本が充実に、明るく楽しい思い出が共通しております。井深のお祖母さまが普連土女学校へ薦めてくださり、それが代々普連土の質実剛健な生活をしたことだとしても感謝をしております。

戦後、思いがけない神様のお導きで、花子お祖母さまと共に生活することになりました。私が、妊婦疎開にあいまして、長野の奥の方に疎開致しております。母達は東京で焼け出されまして、東北の方の漁港のある所へ疎開を致しております。そして、戦後になりました、母が逗子の家に帰って参り、私達は東京の家を焼け出された方にお貸ししたためにどうしても出ていってくださいということが言えなくて、逗子の母の所に住まわせてもらおうかなという思いを持って、井深のお祖母さまの所へご挨拶に参りました。そうしたら、井深のお祖母さまが、「私は困っているのですよ。今まで小坪から来た伯母さんがよく私の面倒を見てくれたけれど、伯母さんは子供が結婚するので、もう明日から来られないと、ちょうど今ご挨拶をして帰っていったのですよ」と言いました。そして、私は「今、東京の方の家が空けてくださらなくて、私は行く所がなくて逗子の家にちよつと住まわせてもらおうかと、お願いがてら来たところ

皆でコーヒー飲みますよ。今、準備しているからいらしゃい」と言つてくださつて、まだその時代は、コーヒーはなかなか飲めなかつたので、自分の小さなコップを持って、お祖母さまのところへスプーンを入れて行きました。そうすると、お祖母さまが「はい、コーヒー入れますよ」山盛りにされながら「うーうー」つておっしゃつて、コーヒーがスプーンの底に少ししかないのに、ちよつとそえて、「はい、御砂糖入れますよ」つて「うーうー」つておっしゃつて、それで御砂糖にお湯をかけて。珍しいコーヒーだと思ひました。それで、後で私達が、「お祖母さん、プルプル砂糖計りはかりつて言うのだわね」と、皆でそう言いながら、お祖母さまでも大切な本当に大切なコーヒーを私達にまで入れて下さつたのだなど、今ではそう思つてお祖母さまに感謝致しております。そして、お祖母さまは、外国の方から送られた小包を開けて、中をいろいろご覧になりながら、すぐその晩のうちに、英語でちゃんとお礼状をお書きになりました。

私達は「英語の時間なんか本当に早くすめばいいなあ」なんて思つていたのに、お祖母さまはあのお歳になつても英語で絵葉書にお書きになつていらつしやいました。その当時は、出張郵便局では受け取つてもらえないので、私は本局まで行きましたが、その時、一生懸命に見るのですけれど、何か分らない英語が多くて……。でも、皆さんからのお返事が来た時には、お祖母さまの感謝の言葉が通じたのだなど思つていました。

朝、昼、晩とお食事があるのですが「朝は自分が作るから何も作つてこなくてもよい」とおっしゃつていました。朝は友達からいただいたオートミールを食べていました。オートミールがとても好きなのです。ガスが無いところでしたから、火鉢や薪を使つておりましたが、その時だけは火鉢の炭をたつぷり置いて、オートミールを作つておいしそうに召し上がつてらつしやいました。また、小さな庭でございましたけれど、軒下のところを、「百合子さんちよつとそこだけ耕しておいて

下さいね」とおしゃつていろいろな菜っ葉だとか、小さなトマトだとかお植えになつて、自分で収穫をなさつてらつしやいました。いつそんなお野菜を作ることを覚えていらつしやつたのかなど、感心してお裾分けをしていただいたことがありまして。

そのような訳で、足掛け三年、四年、ご一緒に楽しい生活が続きました。その間に私は、上の娘が長女で生まれました。そして、よくお祖母さまが、純子といいましたが、「純ちゃん、おやつだからお皿を持ってきなさい。小さなお皿だよ」とおつしやつて、純子もまだ小さな片言の時でしたので、「お祖母ちゃん、ありがとう」と言いながらお祖母さまの部屋へ行つて、ベッドの上に座つてお祖母さまからいつもお三時をいただくのが楽しみにございました。今日、ここに参りました春江の方はまだ赤ちゃんでしたけれども、よく障子を開けて「赤ちゃんよく寝ているね。色の白いい子だね」なんておつしやつて可愛がつてくださいいま

した。お祖母さまから見ると曾孫になるのですが、お祖母さまが退屈なさつている時には、二人の曾孫のお相手をして時を過ごしていらつしたことを、今思い出しております。

そういう生活が三年余、約四年足掛け続きました。それがだんだんと別れの時が近づいて来ますと、やはり身の回りのことがご不自由になり、ベッドの中にいらつしやる時が長く、いろいろとちよつとお考えになることが寂しそうなところでもございました。そして、ある日の朝でございます。いつも起きていらつしやるお祖母さまなのに、お呼びしてもお返事もないので、お祖母さまの所へ行くと、目だけ開けていらつしやつて、一人で行つたのです。それで急いで木村の父の所に呼びに行つていただきましたら、お腹が張つて苦しくて、ということでもちよつと父が来ましたら、いわゆるお通じがお腹の中に張つてしまつて、大変汚いお話でございますがあの頃回虫が流行つたのです。そしてそれがもとでお通じが通りましたけれ

ど、やはりもうその晩はとてもお苦しみになりまして、翌朝父が参りました時には、本当に静かな静かなお顔で天に召されていかれました。

私は、その四年間が、本当にお祖母さまからいただいたたくさんのお宝で、その後の導きであったと、今も、井深のお祖母さまに感謝の思いでこのお話をしております。思い出は次から次へと、五十余年も前の日々が走馬灯のようにめぐりめぐっておりますが、今日このようにお時間をいただき、花子お祖母さまの思い出を話させていただきますこと、厚く御礼申し上げます。

秋山 どうもありがとうございます。大変よく分かりました。それでは、恐れ入りますが表満寿江様に何か井深先生についてでもよろしいですし、花子さんについてでも結構でございますので、お話しただけだと思います。

表 私は本当に飛び入りでございますして、実は昨日この講演会のことを知りまして、ただただここが懐かしく、今朝、神奈川県秦野から飛んで参

りました。今は、いろいろ懐かしいことで、昔のことを思い出しているのでございますけれども、本当に、何も喋ることを用意してきておりませんので、ほんの一つ、二つ、思い出したことをお話させていただきますと思います。

私は、梶之助お祖父さまの長女の千代子の六女でございます。上の兄や姉達は殆どもうこの世におりませんので、私が一人でお伺いさせていただきました。井深梶之助お祖父さまのことは、晩年のことしか殆ど存じません。母から時々話を聞くぐらいのことしか覚えておりませんでしたけれど、たまたま私の父の赴任先で九州の福岡に長いことおりましたし、福岡に生まれまして、福岡で育ちましたので、大学に入る時に東京に出てきまして、その頃、このセベレンス館の横にあった祖父の家に遊びに行っておりますので、本当に懐かしいと思ひ浮かべるところでございます。先程も、食事のお話も大分出ましたけれども、私もよく思い出しますのは、祖父母の家では毎週水曜日

なることの方が多かったわけでございますしうね。

表 ちよつと蛇足ですが、私、木村知己先生の顔を拝見するたびに、井深のお祖父さまにそっくりなものですから、写真で比較をする度に、「ああ、お祖父さまそっくりだなあ」と思うのです。本当に蛇足で失礼致しました。

秋山 それでは、知己先生にお話いただきたいのですが、今、花子様のことを中心にお話をいただきまして、大変いろいろと分かりましてありがたかったのですが、本当のお祖母さまであります関子様につきましてどんな風に伺っていただけますでしょうか。

木村 井深梶之助の、最初の妻は関といい、この方はあまり詳しい経歴が分からないのですが、熱心なクリスチャンであったことは確かです。大変静かな、そして江戸時代から旗本の家系の方だったと私どもは聞いております。先程話しましたように、五人の子供がおりまして、男子二人、女子三人の五人の子供の教育をしたのですが、早くか

ら看護婦に近いような仕事をしておったと聞いております。と申しますのは、実は私どもは近くにいたのに、私の母は、花お祖母さんが本当の母だというふうに思っておりました。祖母の花が死ぬまで、私達は殆ど前の母がおったということを知りませんでした。そういうふうな家庭でもあったわけです。

秋山 『井深梶之助とその時代』の編集をしておりましたけれども、関子様のことにつきまして興味がございますいろいろな調べたのでございますけれども、菊田貞雄先生が関子様について書いておられるのです。やはり、今木村先生のおっしゃったように幕府の旗本として巢鴨に住んでいて、戊辰の役で負けましたので、徳川家達と一緒に静岡のほうへ行きました、五年ほど経って東京へ戻って来て、義理のお兄さんが横浜の税関に勤めておりまして、一緒に横浜に住み、横浜の共立学園に入學し、二、三年勉強し、女教師プライン、ピアソン、クロスビー等からキリスト教の感化を受

けて、明治七年の二月に横浜の海岸教会でジェームズ・バラから受洗をしているのです。それから明治八年東京に帰り、文部省が新設した竹橋女学校に入り、優秀な成績をおさめ、主席となるが、政府の都合でこの竹橋女学校が廃校になると、退学し、父母のもとで家政を助けた。そして、明治十三年に井深先生とご結婚され、明治三十一年にお亡くなりになるのですけれども、最後のお亡くなりになる前に親戚の方々にそれぞれお別れをして、キリスト教徒として立派な最後を迎えるのです。という事で、何か付け加えることがございましたらお願い致します。

木村 一つだけ付け加えさせていただきましょう。私は、祖父の「説教集」を見たのですが、祖父は教会の牧会を多くしておりませんでしたので、教会の説教は多く残っておりませんでした。ただ、呼ばれてした説教が幾つかあるのですが、いわば教会論、神学論の説教よりは、どちらかと言うと、キリスト教倫理的な説教が多かった。それは、学

校で生徒を教えていた関係もあったと思います。しかし、祖父は、やはり先程申しました幼児体験、また生育歴の中に、倫理観というふうなものを非常に強く持ったのは日新館でもって、いわゆる封建君主に対する忠誠ということを徹底的に叩き込まれたわけです。ところが、それが崩壊して行く過程の中で本当の意味での倫理とは何かということとを随分問われたらしいです。特に、横浜のブラウン塾で学んでいる時に、「汝の敵を愛せ」というその言葉にどうしても納得がいかないで、随分苦闘したということの後程申しておったようです。そして、その当時、井深梶之助は年齢からいきますと、白虎隊に本来ならば行くはずだったのですが、殿様の小姓として若松城のお城に残ってしまったために、白虎隊として死ぬ機会を失ったわけです。それに対する一つの倫理的な問題もあったのでしよう。先程もありました土佐藩の英学校で学ぶために横浜に出てくる時に、殿様から小さな短刀を一つ受け取って、それを君主に対する忠誠

として持ってきたらしいのです。「汝の敵を愛せ」という言葉をやっと自分の中に受け入れて、受洗

をした時からその短刀は仕舞ってしまったという話です。そんなところから、随分倫理観の強い人だったようです。生涯殆ど会津に帰っていないのです。あれだけ会津で自分の体験をしたにも関わらず、殆ど会津に帰っておらないのです。「何故帰らなかったのかなあ」と不思議に思ったのですが、ただ、会津の出身の野口英世とは随分交流があったようです。これはもう済んだはなしだからよいと思うのですが、井深の二番目の娘の豊、今片山に嫁いた豊を野口英世との結婚の世話を、東京医科大学を作った血脇（守之助）さんが世話をしようとした時に、これを断ったという話があったそうです。どうして断ったのか分りませんが、ある人と言わせれば、やはり士族階級ということ、いわゆる階級的なものであったのでは。と言う人もいました。どういう事情かはよく分かりません。そんなこともあったにも関わらず、殆ど会津には

帰っていないのです。それは会津に対する一つの思いがあったのでしょうか。

その中でもう一つこれに関連して、ご存じの通り靖国神社は薩長の犠牲者をまず最初に祀った招魂社でした。それが後に日清戦争以降、いわゆる日本の戦没者の神社にしたわけです。井深梶之助は靖国神社には殆ど行かなかったそうです。学校の関係があったのでしようけども、それでも行っていないかった。しかし、だからといって皇室に対する敬意がなかったわけではありません。やはり明治の人ですから、皇室というものに対して、特にご存じの通り会津藩は京都の守護職をしておりました関係で、皇室に対する尊敬は持っておったようですけれども、靖国神社には参拝はしなかった。それは薩長の招魂社の霊が祀ってあったからであろうと後に言われておりました。

それともう一つこれに関連して、自分が非常に幼児体験の中で苦しい経験をした。そして、特に敗戦の経験というふうなことから、関東大震災が

あつた九月一日のことです。関東大震災があつて、いわゆる自警団が朝鮮人を探しに來たそうです。幸いなことに、その時多くの朝鮮から來ておつた明治学院の学生達は、夏休みで朝鮮に歸つていたのですが、数名の朝鮮の学生がセベレンス館に残つていたそうです。その学生達をセベレンス館隣の院長宅の押し入れに全部隠して、祖父と祖母が玄関の所に座り込んで、「今、学生は全部朝鮮に歸つて一人もいない」と言つて自警団を追い返したのを、私の母はすぐ隣の部屋にいて、どうなることかと非常に恐れた経験を持つていた。朝鮮の学生達を全部押し入れの中で守つたのです。その朝鮮の青年達の中で、後に朝鮮へ歸つて相當な地位に就いた人が何人かいたということです。名前を私は知りませんが、いわば弱者に対し、自分の生育歴の中から、弱い者立場に対する思いが相當強かつたように思います。したがつて、説教もどちらかと言うと非常に倫理的な説教が多かつたように思います。

秋山 どうもありがとうございます。折角の機会でございますので、平林先生、何かございませうか。

平林 はじめて井深先生のことを木村さんからこのお話をお聞きになつた方が、何かちよつと誤解でもあつたならばいけないと思つて、一つ、一つ、申したいところです。一つは、井深先生が大変クールであつたというふうな評判が今でも残つております。明治学院の歴史を見ても、いろいろな人が書いていますけれども、中には賀川豊彦氏のようになその日記が残つておりますが、前後の關係を略しますが、井深の花さんが自分のことを日記に書いている有名な卒業生もいるわけであります。しかし井深先生にはやはり非常に信服している多数の方がおられ、一番よく知られているのは佐々木邦さんであります。佐々木邦さんはいろいろなところで明治学院のことを書いておられます。井深先生を非常に慕つておられます。もつとも最初の井深先生との出会いというのは、慶應義塾の

学生だった佐々木さんが、もう学費が続かなくなつて、そしてミッシヨンスクールに入れば月謝が支給されるかも知れないということで、青山学院に行こうと思つて慶応からまわつてきたら、ここの大銀杏のところにも明治学院があつた。ところが、急に雨が降つてきたので、あの大銀杏の所で雨宿りをしてしていると、学校の上の方から先生がどこへいらつしやるのか出ていらつしやつて、自分は有名な井深先生だから前からお顔は知つているので、帽子を取つておじぎをしましたら「あなたはどなたですか。何の用でいらつしやるのですか」と大変懇懇におつしやるので、「実はこれこれで」と言つたら、「ああ、そうですか」と、「事務所の方まで連れていつてあげます」と言つて、あの銀杏の下から、ずつと上がつてこの高等学部の事務所に連れて行つて、そして事務員に「この人は佐々木さんという人だそうだけれども、ちよつと編入学したいというお話があるから、事情を親切に聞いてあげなさい」と言つて、引き返していらつし

やつた。自分はもうお忙しい立派な先生が、わざわざ自分の傘の下に入れてくれて、そうしてもと来た道を帰つて、事務所の職員に仲介をしてくれた。そうして「もう、この学校に編入することを決めた」と。それ以外にもいろいろなことを書いておられますけれども、昔はどんな難問も、明治学院では、井深先生が「こうしなさい」と言えば、すぐ通つたといつて井深先生の威令を高く評価する人の意見もあつた。

それからもう一つのは、「クール」、クールかコールドか、分かりませんが、三光町のお宅で二階に休んでいらしたのに、下の奥の方にベッドルームを作つて、上から下へお移りになつたことがあります。その時、私は、ちよつと居合わせました。すると井深先生、歳をお取りになつても、木村先生よりもつと太つていらしたと思うのですが、とにかく背は低いけれども非常に立派なお体で、あの確か踊り場のない一本のはしごを、二階から下へどう移るのかと思つて、若造

ですから後ろの方で見えておりましたら、都留先生が「私がおんぶしましょう」と言つて二階に上がられて、あの井深先生の大きな体を、帯で背中へ背負つて、そうして注意深く下へ降りた。私はそれを見ていまして「ああ、先生と生徒というのはこういうものかな」井深先生がおんぶされて、都留さんに縋つて下へ降りてらした。そうして、下のベッドルームへ都留先生がお入れになった。あなた（木村先生）は、そういうことをご存じかどうか知りませんが、私はそれが終生忘れられなくて、「ああ、先生というものはいいものだな。ああ、師弟愛というものは温かいものだな」と感動しました。それからちよつと伺いたいことが、お孫さん達をお呼びになるのに、先生は何とお呼びになつていたのですか。

木村 私の祖父は最後まで「さん」付けで呼んでおりました。呼び捨てにしませんでした。「知己さん」といつて私のことを言われるので、私はびつくりしたことがあります。

平林 そうでしょう。私は晩年ほんの数年しか傍に行つたことしかありませんけれども、私のような者に「君」とおっしゃつたことはない。どなたも「さん」でした。ご家族をどうお呼びになつたか、おそらく呼び捨てにはなさらなかつたのではないかと思ひます。

木村 私の母については「春」と言つておりましたけれど、父親でございますが、父は医者で良夫と申しますが、「良夫さん」と言つて、父にはさん付けでした。でも、自分の娘はさすがに「春」と言つておりましたけれども、夫に対してはさん付けで呼んでおりました。

平林 もう一つ、これで終わりますが、花子さんのために申したいのですが、花子夫人は私に後年こうおっしゃいました。「平林先生、私家が空けてあちらこちらの学校へ出て行くとか、あるいは矯風会とかその他の役で他所へばかり行つてゐるという事で、どうも評判が悪いと聞いておりましたけれども、それは、先生、明治学院の俸給、

日本人の俸給は本当に少ないのです。宣教師の人々を真似できるような暮らしは出来ません。それで、私の方々に出ましたのは、生活のためでした。五人も子供がおりまして、皆それぞれ教育をしなければなりませんので、私は老人には評判が悪かったようです」花子先生も随分理性的な方でございましたけれども、私はセベレンス館の舎監をしていましたから、時々お宅へ伺いますと、奥さんが「平林さんは、確か茶碗蒸がお好きだとおっしゃいましたねえ」とおっしゃいまして、私の顔を見ると茶碗蒸をお作りになったのです。随分親切なことでした。それだけ思い出しました。

秋山 どうも平林先生、ありがとうございます。他にどなたかございますでしょうか。

浅原 白金教会の牧師の浅原と申しますが、私の教会に井深先生と同僚というより、少し後だと思えますが、熊野雄七、この明治学院に大変関わり深く、この敷地内に長いこと住んでいらつしやうたと思います。この敷地内に菜園を作つて、トマ

トとかいちごとか作つて、学生達がそれをよく盗みに来て、こんこんと諭すような学生思いの先生として知られていらつしやうたようですけれども、そのお嬢さんのおおるさんという方が、白金教会に長いこと教会生活をしておられた、その方に伺つたのですけれども、その熊野かおるさんの話によると、雄七先生と井深樞之助先生は、どうも肌が合わない。よくお互い仲が良くなかつたと、それでまあ、性格的なタイプの違いというか、そういうことだけではなくて、井深先生が会津藩で、熊野雄七先生が長州藩だと、そのことと単なる性格の違いで合わないというだけではなくて、その出身の違いがどのくらい影響したか、そのあたり、木村先生、どう思われますか。

木村 ご存知の通り明治学院には、いわゆる長州の出身の方がおられるのです。村田四郎先生がそうです。祖父は、やはり会津の敗戦の体験から、薩長との問題というのは随分心に残っていたようですが、村田先生を、祖父は随分大切に処遇され、

中学部長に随分若くして選任したり、その才能を早く認めておられたというのです。私が高輪教会の副牧師をしている時に、村田先生は大学でロマ書の講義をしておられたので、聴講していました。講義の後で、いつも村田先生が「ちょっと木村さん」と呼んで、いろいろな話をしてくださいました。

村田先生は、自分は、井深から薩長での差別は全く受けたことがなかった。むしろ自分を立ててくたださって大変尊敬していると、村田先生はそのように言っておられました。ただ、祖父自身の中には、会津の悲惨な体験、特に白虎隊の自刃の問題、その他の体験というのは非常に深くあったように思っております。熊野雄七先生とは、祖父は随分親しかったようですね。

秋山 今、木村先生がおっしゃった方が正しいので、(熊野先生は)九州の大村藩の出身なのです。あとは、ございますか。

吉岡 改革派教会の吉岡と申します。二つのことをお伺いしますが、一つは、井深先生が回心の経

験というようなものは何かお話がありますでしょうか。もう一つは、花子夫人が、あの時代に物理と化学の先生をなさったという、これは非常に面白いことですが、どこで勉強なさったか、そのこと二つだけお伺いしたいと思います。

木村 今の、吉岡先生はご存じの通り、雪ノ下教会(鎌倉)の松尾牧師の息子さんです。私は、松尾先生に私の祖父のことを何回か聞きました。松尾先生はご存じの通り明治学院の卒業生でありながら、富士見町教会の副牧師として植村先生の元におった方です。私は前に「どうして植村先生の副牧師になられたのですか」と聞いたたら、「井深先生は大変ジェントルマンでいろいろなことを教えてはいただけられるけれども、牧会についてはねえ」と、こう言っておられたので、多分そのあたりが一つの問題だったのでしょう。先程のコンパニョンの問題につきましては、私は詳しい資料もありませんのでよく分かりません。また、祖父に聞くこともありませんでしたが、多くの方達から聞

いた範囲では、先程申上げたようにブラウンのもとで学僕をし、「汝の敵を愛せ」というあの言葉が、自分にとって最後までのでかいであつたと日記に書いていたようです。多分そのあたりではなかつたかと思うのです。祖父は晩年私どもには殆どそういうふうな自分の自己体験を話すことはありませんでした。むしろ私にとつては先輩の井深に接した牧師の方々から聞いてみますと、井深樗之助先生は殆ど自分のことは話さない人だつた。植村正久先生は非常に自分の体験をよく話して、自分の信仰に迫ってくるようなことをしたけれども、井深先生はあまり自分のことを話すことはしなかつた。説教集を見ましても、いわゆる先程話した会津の敗戦のことなんかも殆ど書いていません。にも関わらず、私が会津に行つてみてはじめて六十里越えの時の悲惨な話を、いろいろな資料から調べてみてびっくりした。あれだけ体験をしていながら何の話もしなかつたというのは、どういふふうなことだつたのかと、今でも不思議に思つてい

ます。

もう一つは、これは折があつたらゆつくり申上げなければならぬのですが、前に工藤（英一）先生から井深樗之助についてのいろいろな研究テーマの中で、私生活のことについては殆ど分かなかつたので、その点については私に調べてほしいと要望がありました。例えば、みなさんご存じだと思いますが、井深八重は神山復生病院におりました。井深八重が子供の頃に、父親が早く中国に行つてしまいましたために、私の母と一緒に子供のように育てられました。しかし、井深八重は、祖母の花についてはあまり良い感じを持つていなかったようです。それは、九州大学での「癩」との誤診が起きた時、井深八重を神山の復生病院に付添つたのは、樗之助ともう一人、沼沢という叔母でした。この沼沢久仁という叔母がついて神山の復生病院に連れて行つて入室をさせるわけです。その後ずっと井深八重は、神山の復生病院にいて井深の家を見ておりました。井深八重は井深の家

のことを私の母とは違った側面から見えておりました。私は母の使いで、神山の復生病院によく行くことがありました。神山の復生病院に行く度に井深八重からいろいろな話を聞きました。「花は大変頭の良い、そして非常に優れた人だったけれども、家庭的には果たしてあれで本当に幸せだったのだろうか」と、後に申しておりました。明治学院で井深梶之助が全ての公職を引いていく、その前後の關係のことについても多少聞かされたことがありました。井深花は、アメリカのポストンの近くのマウント・ホリヨーク大学で物理等を勉強しました。私は四、五年前に井深花の郷里を訪ねたのですが、岡山からずっと山の方になる高梁（たかはし）からもう少し奥に入ったところの天城の酒屋が実家だったそうです。大島という旧姓です。私はそこに行って、大島という旧姓を調べましたらば、大島という姓がたくさんあるのです。多分酒屋の一族の大島ではないかと言われました。それから最初はすぐ神戸の神戸女学院に行ったのでは

なくて、当時、組合系の宣教師がやっていた小さな女子の学校があつて、そこで最初のキリスト教に接するのだと言っていました。物理その他を勉強をすようになったのは、マウント・ホリヨークに行つてからだったと言っていました。その時の祖母の話の中に、「私は日本人の特技を活かしてマウント・ホリヨークで実験にいつも優秀な成績をあげたのだよ」と言いますので、「何？」と聞きましたら、向こうではみんなピンセットを使つていますね。それに対して、祖母は、箸を使つたそうです。物を分けたり、摘んだり、いろいろな植物の種の分類なんかを全部箸を使つてやつて、向こうの人間が「ヘー」と言つて感心するのが、いつも自分にとつて嬉しいことだとそんな話をしておりました。多分マウント・ホリヨークでもつて、物理、植物、生物と言つておりましたが、やつていたようでした。そんなふう聞いております。

中島 どうもありがとうございます。質問ではなくて、ご紹介なのですが、キリスト教新聞社か

ら「会津のキリスト教」という本が出ておりまして、内海健寿先生という会津大学の名誉教授が書かれています。その中に井深梶之助の評伝が入っております。この評伝が私の見る限り、短編ですけれども非常に優れた内容ですので、もう少し井深梶之助の内面的なところを知りたい方は、ぜひこの論文を読まれるようお勧め致します。その中に、井深梶之助の学校での指導方法ですが、これも桑田先生のお言葉ということで、やはり「さん」づけをして個人を非常に生徒でありながら重んじる授業をしていたというような述べ懐が載っておりますのでご参考までに。

石井 資料館の石井と申します。私は、図書館から資料館に移りましたけれども、木村先生と平林先生がおられますので、学校側からこういうことを聞くのは大変恥かしいことではあるのですが、今日展示させていただいた井深資料というのは、ほんの僅かしか展示しておりません。膨大な量の井深資料をいただいたのは、どういう経緯でいた

だったのかというのを古い方に聞いても分からないものですから、お二人の方、もしご存じでいらしたら教えておいていただけると非常に助かるのですけれども。

木村 私もあり詳しい経緯は存じませんが、井深梶之助が亡くなりました後、井深梶之助に関するいろいろな資料を移すことになりました。その時に二つに分けました。一つは、神戸に井深文雄とあって井深梶之助の長男が六甲に住んでおりました。その奥さんが、井深梶之助の重要な資料を神戸の方に移して持って行ってくれました。また一部は、井深花が逗子の方の方に持って移りました。確か井深梶之助の日記その他そういうふうな物は、井深花の方に持って行ったと思います。その井深花が亡くなりました後に、伊藤毅さんが、その時に井深梶之助の資料が逸散しないようにということ、わざわざ神戸まで行ってくださって神戸の資料を全部調べてきて、明治学院に収めた物を自分でピックアップして来られました。そ

れから、逗子の家にありました物も、伊藤さんが整理して、井深花が亡くなりました時に、両方の資料を全部整理して明治学院の方に移してくださいと聞いております。ただその時に、神戸の方の資料の中で、一部こちらに返らなかった部分があったようです。伊藤さんは大変残念がっておつたように聞いております。しかし、日記その他の関係の物は、井深花が持つておりました関係で、多分こちらに移つたと、こう理解しております。

平林 卒業生の柴田忠久氏が、関子夫人のご親戚の子孫と、そういうふう伺いましたが、ご存じでしょうか。柴田さん。本郷西片町十番地です。

木村 お名前は聞いておりますが、私は詳しくはその方を存じません。

平林 私の娘の敦子の亭主が九州大学で水産学をやっておるのですが、これがこう申しております。ブリストルの大学へ呼ばれて研究していた時に、箸を使っていろいろ操るので、みんな集まってきた「便利な物を上手に使う」といって感心し

たという、先程の話と同じことでございますね。

秋山 それでは、このへんで終わらせていただきます。木村先生はじめ、みなさまどうもありがとうございました。

井深梶之助先生生誕一五〇年記念講演会（二〇〇四年十一月二十日）

井深梶之助の「原体験」と「キリスト教」

木村 知己

はじめに

一九八八年六月十二日に、新潟県小出町で「戊辰小出島戦争百二十周年記念慰霊式」が行われ、小出島で戦火を交えた会津軍縁者と西軍（官軍）縁者に招待状と趣意書が送られ、双方の戦死者の慰霊式が行われた。

私共には「小出島戦会津軍主将御子孫」ということで、出席の要請があった。

かつて「井深梶之助とその時代」出版編集に参加したとき、第一巻の回顧録で「小出島戦争の出陣」と敗走の悲惨な体験の回顧があり、その現地を見る絶好の機会と出席した。

郷土史家による「初期会津戦争回顧」の講演で、西軍（官軍）と会津軍の戦況や、小出島住民の被害と、双方の死傷者の状況と埋葬や供養の史実を聞くことができた。その後、いまなお残る「正円寺」の弾痕や刃疵などを見て、少年梶之助がどのような思いであったかを想像させられた。

祖父梶之助の晩年を身近に生活した私共は、その穏やかな「好々爺」の日々と、母や親族の者たちが遠慮がちに接する様子に、柔和さと、剛直さの二側面に不思議さを感じたものであった。多分、「キリスト者」としての信仰の温もりと、幼少期生活における「原体験」がそこに内在していたのではと思うのである。

「原体験」としての小出島戦の敗北と六十里峠の敗走の体験

井深家は信州高遠の保科家以来の重臣で、会津藩においても、家老西郷頼母を親族とし、梶之助は井深家の総領に生まれて、封建社会の慣例により、特別な待遇をうけて成長した。

幼少時代から重臣士族の子として、一般市民生活とは違った生活様式と教育をうけて育ったという。少年期には士族階級の特権である藩校「日新館」に学ばされ、特権階級としての特別な教育を受け、しかも、父宅右衛門が日新館奉行（館長）であったことから、努力に努力をかさねて、最優秀の成績であったという。

まさに、今日のエリート教育とエリート社会に生育した日々であったといえる。

しかし、一八六七年（慶応四年）に、藩命により、父宅右衛門が日新館生徒を主体とする会津軍を引率して、東上する西軍（官軍）を阻止するため会津領地であった小出島に出陣することになった。

梶之助は十五才で、父に同行を求めたが許されず、気負う気持を押えきれずに、無断で同行し、小出島へと出陣した。

封建社会の特権的な生育歴と士族社会の特権的教育が梶之助の行動への「原体験」であったのかもしれない。

だが、その後の小出島での体験は、その特権的「原体験」を完全に崩壊させるものとなった。

西軍（官軍）は当時の近代的武器を装備し、歴戦の経験をもって布陣して、少人数の会津軍の敵するところではなかった。

梶之助はこのとき、銃（近藤勇が使用していたものという）をもって敵と撃ち合い、抜刀して迫り来る兵士を至近距離で撃ち、殺傷させたことを述懐している。この体験は「殺すなかれ」とのキリスト者としての心に、深くひびく「原体験」となったと思う。

さらに、会津軍の敗走は悲惨なものであったという。史実によれば、三ヶ峠をはじめ、会津軍の要衝は次々と陥落、敗北し、その報は小出島の会津軍にも伝えられ、負傷者が続出し、なかには自刃するものもあって、止むなく会津へと敗走することになった。

このときの体験は、梶之助にとって、よほど痛烈なものであったらしく、後日、回顧録で、鮮明に記憶し、語っている。

その敗走体験では、流言におびえながら、空腹に耐え、六十里峠の敗走は混乱をきわめ、暗夜の中を手さぐりで進み、西軍の追撃を恐れての悲惨なものであった。空腹に耐えかねて、出会った人夫から握飯を無心して食べるなど、士族社会で確立したエリート意識に反して、生きのびることへの無惨な「原体験」であった。

会津若松城の落城と降伏体験

悲惨な敗走の果てに辿り着いた会津若松城下の状況について、梶之助は以下のように語っている。

「帰ってみれば僅か数ヶ月間に城下の形勢は、ガラリと変っていた。」と、その時のショックを懐述している。すでに敗色の濃い状況に、小出島戦の敗戦体験と共に、深刻な心の世界の「原体験」を深めていったようである。

その後、会津城での籠城の日々や、城主の“御小姓”に召し出されて城下の戦況や、犠牲者の続出、特に親族である西郷家、沼沢家の人々の自刃を知らされ、その痛恨の「原体験」は生涯、その心より離れることはなかった。

後日、「爾来星霜六十年を經過した今日、これを追想して来たれば、真に断腸の想いである。」と懐述しています。

会津落城と降伏を小姓として君主の側近で目撃し、小出島戦争以来の敗北体験をいつそう心に深く「原体験」として秘めていった。

降伏開城以来の悲惨な日々は、少年期の梶之助にとっては、心身共に深く深く心にひずむものであった。

「当時、自分は少年であつて、何とも思わなかつたが、今にして思えば、実に断腸の想いである。」と後日、懐述している。

「キリスト教」への道

時代の変化を体験した梶之助は荒廢した会津若松を出て、新しい時代に即応するために、東京に出る決意をした。

しかし、幼少期から故郷を離れたことのないものが、故郷を出て未知の東京で洋学を学ぶことは、生活を根本から変革する「原体験」であつたらう。

回顧録で「今日、十五才、十六才の少年が独り旅行することは、何でもないことであるが、六〇余年前には、少しく冒険であつた。」と遠慮がちにそのときの不安な体験を克明に記憶して語っている。

やがて東京に出た後に、人を介して横浜の「修文館」なる英学校で学僕を求めていることを知り、横浜に移り、キリスト教の伝道を志すブラウン宣教師と出会うことになった。

維新なる名の下に、同国民が殺し合う悲惨な「原体験」を秘めて、欧米人から教えられる聖書の言葉は非常に奇異なものであつたらしい。

しかし、ブラウン師の人格とバラ宣教師の熱心な伝道活動に心を動かされ、集会に出席し、キリスト教関係の文書を読みつつ、少年期の「原体験」では知り得なかつた心の世界に目が開かれていった。そのときの心情を「断然、志を決して洗礼を受く」と決断し、一八六三年一月第一主日に、ヘボン博士診療所付属礼拝堂にて、ブラウン師より受洗し、横浜海岸教会員となった。

かつて、ある伯母がこのようなことを語った。「梶之助さんはブラウンさんの教えによって、肌身はなさず持っていた拝領の懐剣を別に収めたらしい」と。

初戦の小出島戦の敗走や、会津落城と君主の幽閉などに、深い憎悪と復讐心を「原体験」としていた生活に、聖書の教えは、あまりにも価値観が違い、洗礼までには多くの動揺と心の葛藤があったに違いない。しかし、その「原体験」こそが決定的に聖書の言を受入れていくものとなったといえる。

祖父は日頃、ブラウン師の厳しい教育による英語により日記を記述し、日頃の会話でも、強烈な会津なまりの方言を全く話すことはなかった。また、故郷を懐かしむような会津に関する想い出話をすることは殆どなかった。

出生地である故郷、会津の悲惨な敗北と荒廃は、終生「原体験」として消滅することなく、深く心にひずんでいたはずであった。

しかし、キリスト教徒になってからは、その「原体験」に支配されることなく、キリスト者として絶えず新しい生活へと目を向けて「原体験」を福音によって克服していった。

日常性ではブラウン師より受けた人格的影響は大きく、温和な眼差しで人に接し、柔和な、礼儀正しさが人々の心に深く印象づけられていた。

植村正久による富士見町教会を長く牧会した島村亀鶴牧師が、井深の印象をこのように語っていた。

「私の田舎の高知の学校では『島村、島村』と呼び捨てにされていたのに、明治学院神学科入学で井深総理に面接したとき、『島村さん、あなたはこの学校で学びたいのですか』と偉い先生から、さん

づけで呼ばれて驚きと共に入学を決意した」と幼少期の士族特権社会で育成された「原体験」はキリスト教信仰により価値転換をしていた。

しかし、かつて、母の所用で伯父の病氣の見舞に出向いたとき、病室の壁の額が風呂敷で覆はれていた。不思議に思っていると、家族の方が「あれは祖父様（梶之助）の写真ですが、病人はあの写真がこわくて眠れないと申しますので」と、やはり身近な家族にとつては、日常性の中に祖父の謹厳、剛直な会津の幼少期より育成された「原体験」が、その人間性に濃厚に潜在していたようである。

おわりに

「明治学院総理」としてキリスト教教育界の重責を負い、国家の教育行政に対峙して、私学教育理念や経営に多くの苦悩の時を過した井深梶之助は、また「日本基督教会」の創立に参画し、大会議長を歴任するなど、教会政治や教会形成にも積極的に関与していった。そして、当時の日本基督教会にはミッションとの協力関係や、神学教育問題、教理問題など、意見、見解に厳しい対立などがあり、その折衝と調整にしばしば責任を負うことがあった。一方キリスト教社会事業や社会活動にも強い関心をもち、キリスト教青年会（YMCA）活動では、「いぶかし（井深氏）や青年会に、禿頭」などとかからかわれても、楽しんで参加していた。

多感な少年期から青年期への波瀾に満ちた「原体験」は、深く心に秘めつつもキリスト教信仰とブラウン師の高潔な人格に出会い、むしろ、主にある賜物として豊かに用いられることになったといえよう。

二〇〇四年十一月十日 印刷
二〇〇四年十一月二十日 発行

明治学院歴史資料館資料集【第一集】
——井深梶之助生誕一五〇年記念号——

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
編集代表 播 本 秀 史

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行者 久 世 了

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行所 明治学院歴史資料館
電話〇三(五四二二)五一七〇

東京都江東区森下一ノ八ノ四
印刷所 相和印刷株式会社
電話〇三(三六三一)〇〇四四